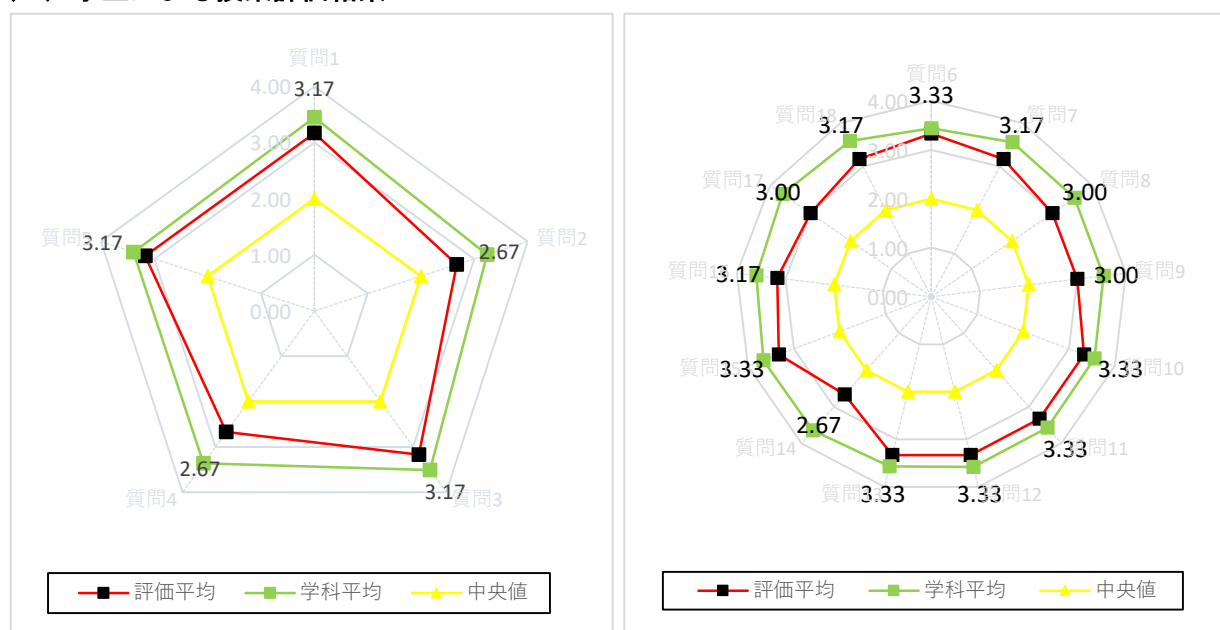


学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

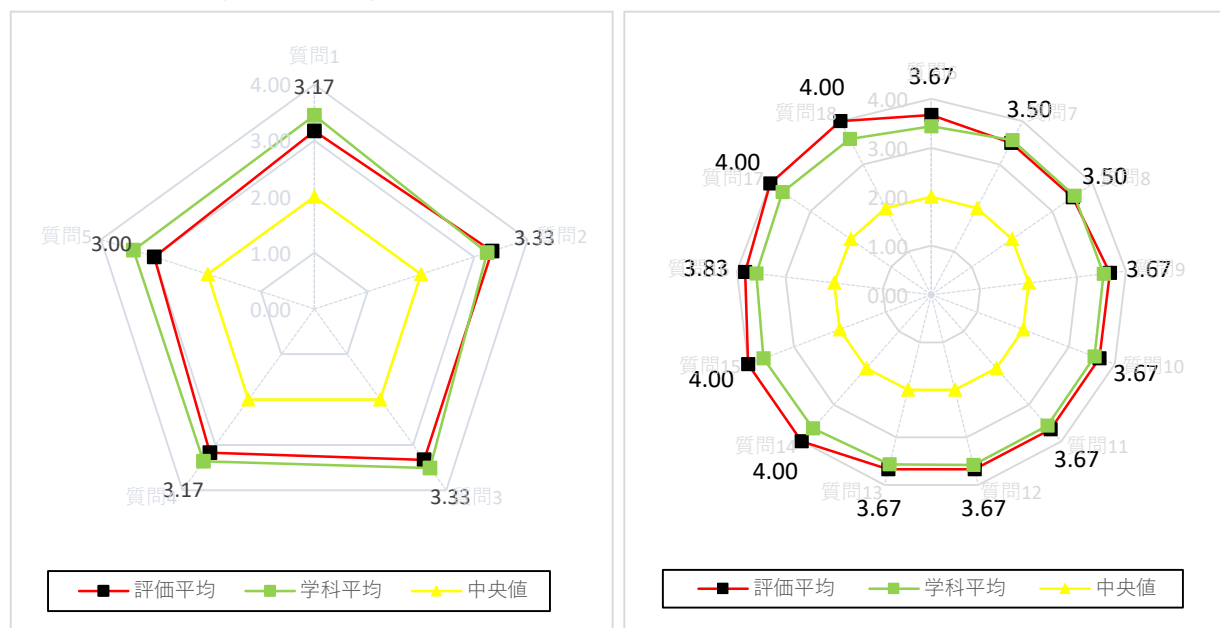
本授業は、全体操の時間、ゼミ活動の時間、くわえて、子どもフェスタというイベント、学外でのボランティア活動を行う体験活動を含む幅広い内容を持つ。そのうちの座学の部分について評価を行ったようだが、質問1～4の評価にあるように、たいていは熱心に参加しているが、興味関心の喚起が難しかったようまた、授業方法については、7、8、9と17がやや低い。また、質問14が目立って低い。質問等に誠実に対応したかということについて、ポイントが低いということは、聞いてもらえなかったと思っているのだろう。記述式の意見は書かれていないので、事情はよくつかめない。

（３）次年度に向けての取り組み

この授業について、改善点を提案するならば、学生が体験をする科目なのに、いろいろなことを漏らして、テストをしたら、講話を聴いたり、全般的に受け身で聞く授業内容であり、学生が授業内容に積極的にかかわる工夫が少ないということではないかと思う。課題意識をしっかりと育て、体験活動に臨むような工夫ができないだろうか。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

学科平均と同程度、もしくは学科平均と比して高い評価得た項目が多かった。授業内容は学科全体で共通した内容を行い、授業形式については全体授業とゼミ別授業とが混在していたが、ゼミ別授業では、できる限り各受講生に個別的な声掛けを行い指導支援を行った。また、修学ポートフォリオも活用して学生の生活実態の把握に努め、気がかりな状況がある場合、個別に対応するよう心掛けた。学生からは自由記述においても高評価を得られた。各学生の理解度に合わせた指導の仕方や各学生へ公平性を期して指導を行ったことが質問14～18の評価にも表れていると考えられる。

（３）次年度に向けての取り組み

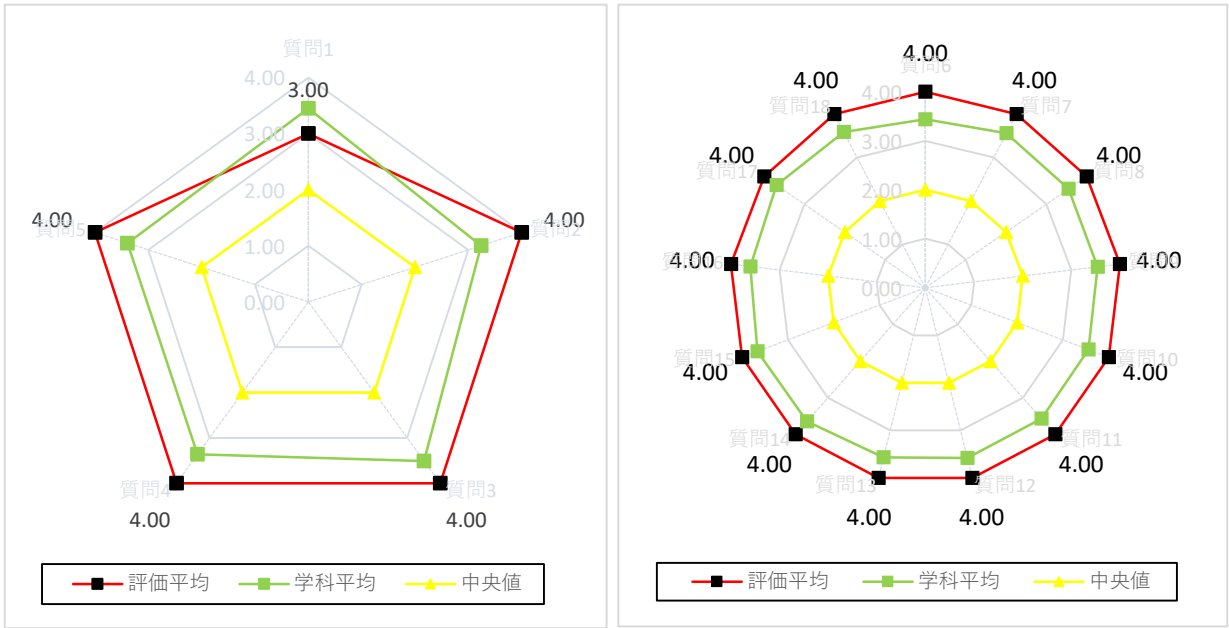
次年度においても、全体へ向けては指示の明瞭さに留意し、また学生には誠実・公平に接する姿勢を重視して、教育に取り組んでいきたい。

また、一人一人のポートフォリオも小まめに確認し、あすなろう体験実習の進捗や生活状況などを把握するなかで、気になることがあれば早めに声をかけることで、学生が大学生活を滞りなく送ることができるよう教育・支援を行いたい。

授業評価については、次年度も、最終講義回で十分な授業評価回答時間を設けて回答を促していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

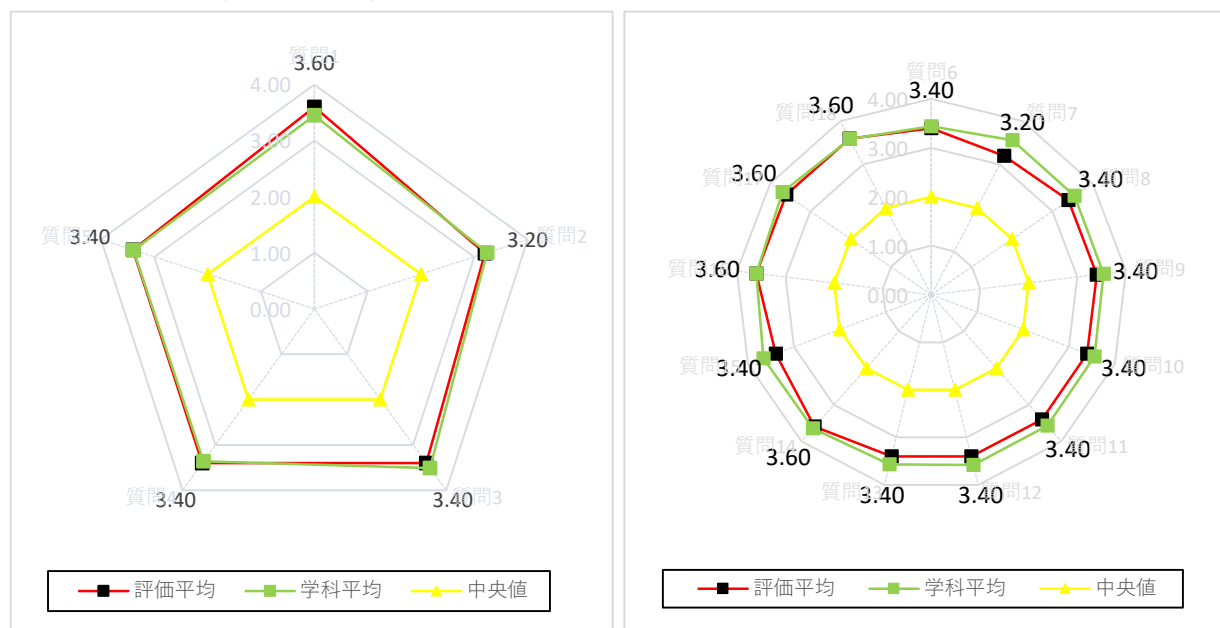
授業評価として非常に高評価であると言える。質問1の授業の出席状況に関しては課題である。

（３）次年度に向けての取り組み

授業の出席に関して学生にしっかりと促しを行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう（初年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

回答率83%（5/6）、総合評価3.43

本授業の目標は、大学での生活を快適にするための知識習得・環境構築と、大学生としての学びを可能にするためのスタディ・スキルの習得を通して、学士力養成のための学習基礎を定着させることである。

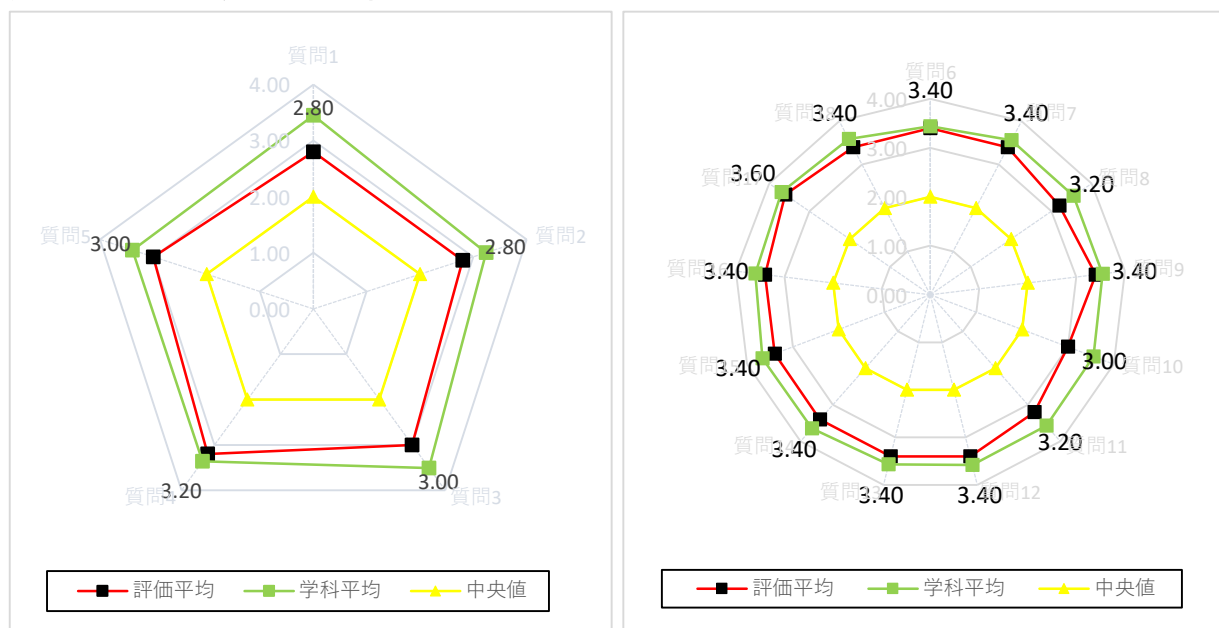
自由記述では、「楽しかった。」「発表の仕方やパワポの作り方を丁寧に教えてくださって良かった。」との評価であった。

（３）次年度に向けての取り組み

質問2・7が3.20と低い結果となった。シラバスや到達目標については、口頭で説明していたが、視覚的な情報も活用して伝えるべきであると考えます。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

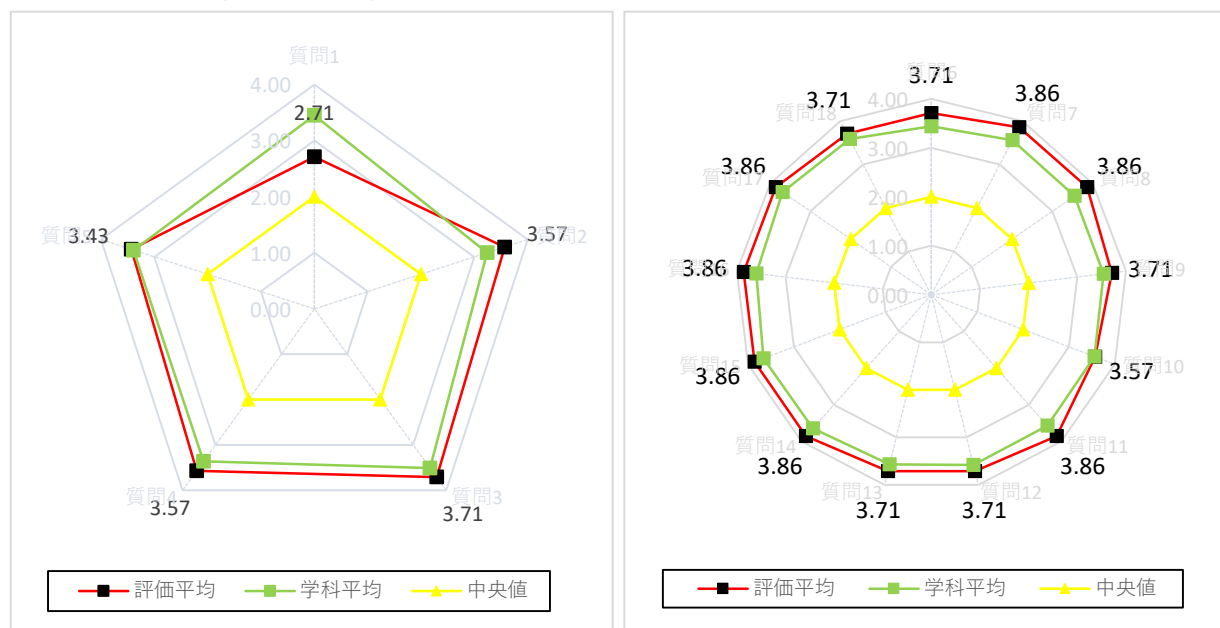
あすなろう（初年次教育含）の授業は、1年次生対象に通年科目として展開しており、授業内容に応じて学年全体を対象に実施する回とゼミ単位に分かれて実施する回とで構成されている。今年度のゼミ生の履修態度は真面目で、レポート等の課題の提出では、毎回、内容を整理し丁寧に記述したものを提出していた。しかし質問1から5の自己評価をみると、学年平均よりも少し低いことから、自らの出席状況や受講態度に関しては、やや控え目に自己評価をしていると思われる。質問6以降の教員への評価については、この授業全体について評価していることから、ゼミ担当者個人を抽出することは困難である。全体的なバランスは保たれており、極端に大きく落ち込んだ評価項目は見られなかった。

（３）次年度に向けての取り組み

この授業は学年全体で展開する回もあるが、そのような授業時であっても年間を通じてゼミの学生と顔を合わせることが出来る。そのため、学生が不安を抱きやすい入学直後から、年間を通じて個々の学生に応じた対応が可能となっている。今後も、ゼミ生の出席状況、受講態度、学習意欲等の状況を細やかに把握しながら、個々の学生に対しては、個別対応も入念に取り入れながら、充実した学生生活を送ることが出来るよう支援していきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

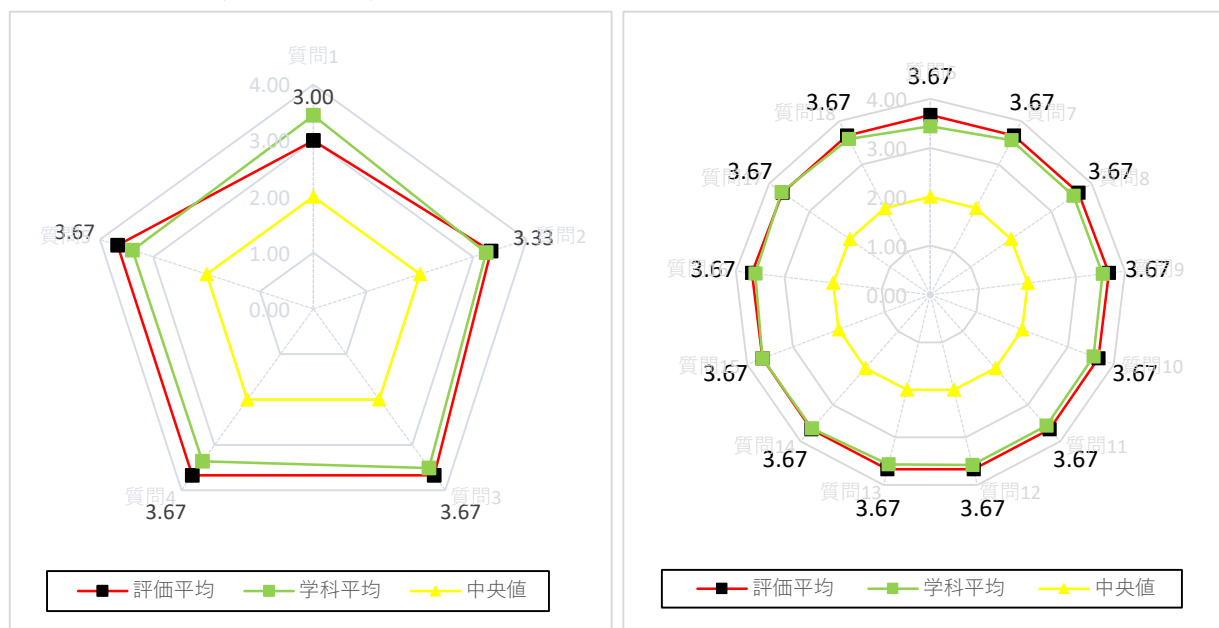
- ・欠席の回数が学科平均よりやや多い結果になっていますが、学生の無届での欠席はありませんでした。
- ・自由記述については概ね、授業内容、学生の授業への意欲、主体的な取り組み等、学生自身の中に一定程度の達成感を持つことができたのではないと思われる。
- ・社会人基礎としてのあすなろう初年度の面も大切としてきたところではあるが、大学生活初年度、しかも少人数ゼミ（7名）というメリットを活かした学生が主体的な学びを体験して、自分の中で価値ある学びを実現していくことができるように授業のあり様を考え進めた。そのことが自由記述を含め一定程度の学生の授業に対する満足感に繋がったと思われる。

（３）次年度に向けての取り組み

- ・学生が授業の中で、成功体験を得ることができるように、学生が主体的、能動的に学び、2年、3年、4年という経年において価値あるテーマ、学びを見つけ、探求していくことができるように授業を一段と活性化させていきたい。
- ・あすなろう初年度は、1年生全体での学習が半分程度を占めていることもあり、ゼミでの学習時間は多くはないが、学生が大学生活、授業等にある程度見通しをもち、余裕ができてきた時期に、ゼミでの学外授業（療育体験等）を取り入れ、2年生のあすなろう（発展）へのつながりと継続性をとることができるように設定していく予定である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう（初年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

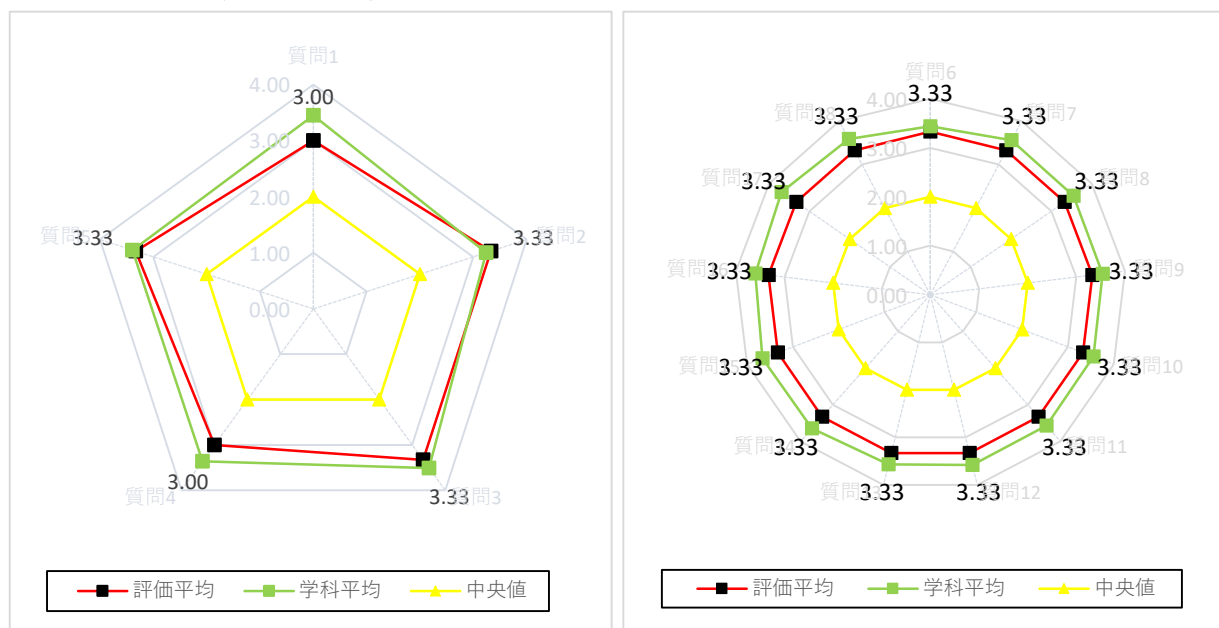
毎講座の度に、この回のねらいや目的を講義の冒頭に丁寧に説明したことで、学習意欲にもつながったと考える。
 しかしながら、シラバス対応づけなら説明をすると、よりよかったのではないかと考える。

（３）次年度に向けての取り組み

シラバスと関連付けながら、この講義で学ぶことの意味やねらいを伝える工夫をおこなう。
 また、欠席が目立つ学生には、個別に丁寧な対応をおこない、学習意欲を高める工夫をおこなう必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう（初年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

（２）結果の分析と評価（300～500 字程度）

- ・ 学科平均との比較（共通教育科目については共通教育科目全体平均との比較）
- ・ 特に低（高）い項目についての考察
特筆すべき項目はない。
- ・ 自由記述についての分析と評価
自由記述なし。
- ・ 本授業の目標、ねらいと照らし合わせた分析と評価
- ・ 授業全般に対する反省点
- ・ 回答率が低かった理由 など
回答率は6人中3人提出済みで50%であった。

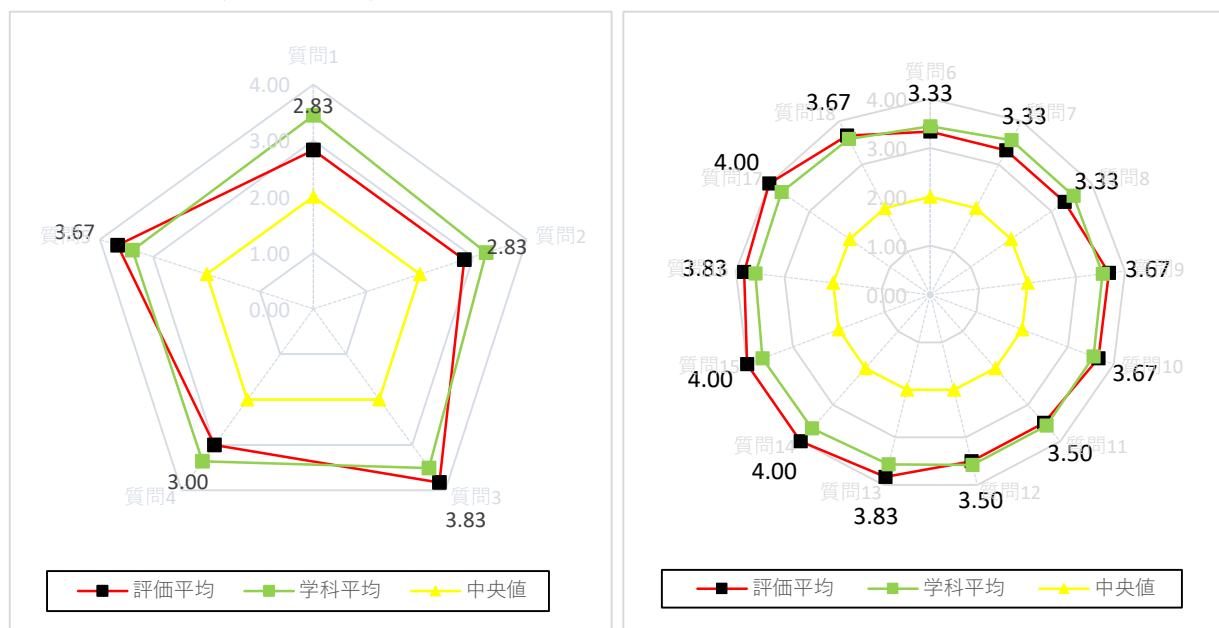
（３）次年度に向けての取り組み

（３）次年度に向けての取り組み（300～500 字程度）

- ・ （１）の授業評価結果で特に低かった項目に対する改善方法
- ・ （２）の授業全般の反省点に対する取り組み方法
- ・ 令和5年度に新たに導入したいと思っている授業方法 など
ボランティア活動を増やすべきである。
- ・ 授業評価そのものに対する意見を含んでも可
授業中に、アンケートに回答させる時間を設定したのに50%であった。欠席者が多かったことが影響したものと思われる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう（初年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

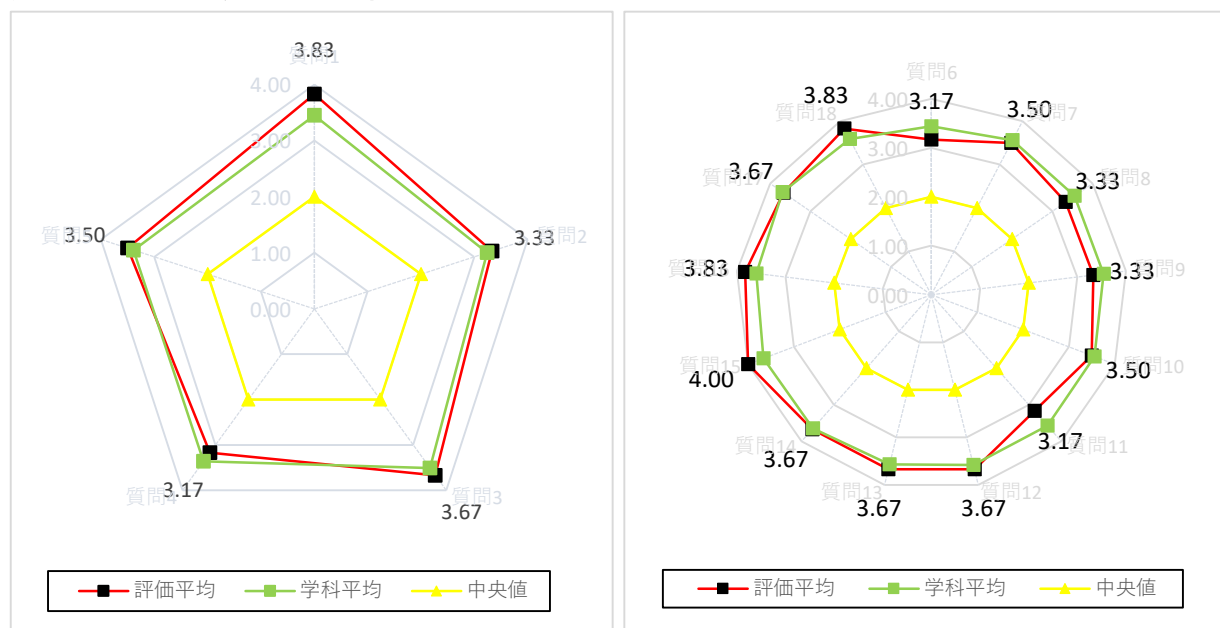
概ね評価は高いようであるが、一部学科平均を下回っている箇所がある。質問6シラバス（授業計画）について説明がありましたか。質問7教員は授業の到達目標を明確にして、授業を展開していましたか。質問8授業は興味・関心が持てる工夫がされていたか。上記の3つの項目である。質問6については、ガイダンス時に説明している。しかしながら、入学当初ということもあり、あまり内容が入っていない可能性もある。質問7については、毎回テーマを掲げて行っていたが、説明不足かもしれない。また、質問8に関しては、オムニバス講義でもあることから、難しい面も多々あるが、改善できる箇所は改善していきたい。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度に関しては、シラバスの説明を丁寧にし、講義の冒頭部分での説明を詳しくしていきたい。オムニバス形式であるため、難しい面もあるが、可能な範囲で学生の興味関心に近づけて授業内容を精査していきたい。また、大学全体のコンテンツもあるが、導入部分での丁寧な説明にも心がけたい。その他の項目に関しては、ある程度高い水準を維持することを心掛けて講義を進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

「あすなろうⅠ基礎」については、年度計画において全体で行われるもの、ゼミごとに行われるものに大別される。さらに、全体の中で進められたものであっても、それを踏まえてゼミに持ち帰ってさらに一人ひとりが活発に意見し、メンバーで考えるという討論の機会が設けられており、より発展したものになるよう方向づけがなされている。

本年度も昨年度に引き続き、コロナ禍において状況に応じ対面授業でなければならない授業とオンライン授業でも可能な授業に分けて対応した。パワーポイントを作成し、プレゼンテーションを行う機会も多く、それぞれがしっかりと発表できた。これについては学生間で質問等も積極的に出されて深めることができるよい機会であった。また、対面のみではなく、teamsによるオンライン授業をしっかりと活用することができたことは経験としてプラスであった。

一方、あすなろう体験についてはコロナによってなかなかボランティア活動などする機会が少なかったため、経験不足に終わってしまった。

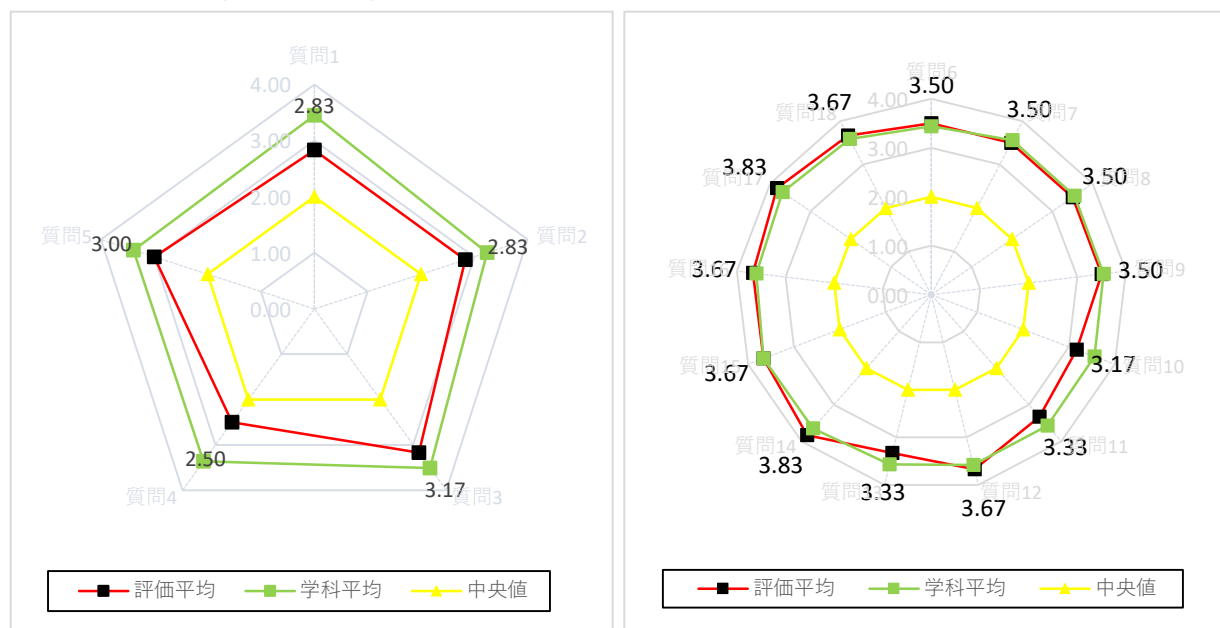
（３）次年度に向けての取り組み

次年度においては、ようやくコロナもほぼ収束し対面授業が可能となった。対面・オンライン授業のそれぞれのメリットを活かし、さらに一人ひとりの学生がより充実した大学生活を送ることができるよう細やかな配慮やサポートが必要であるとする。

あすなろう体験についても、より積極的に参加するよう勧める。また、学生間でもかかわりが深まるような工夫を行い、精神面でもしっかりと学生に寄り添ったかかわりをしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

質問1～5は、学科平均より低くなっているが、ゼミ生の中には体調面への不安または、学習面への緊張が高い学生が多いことが影響していると考えられた。

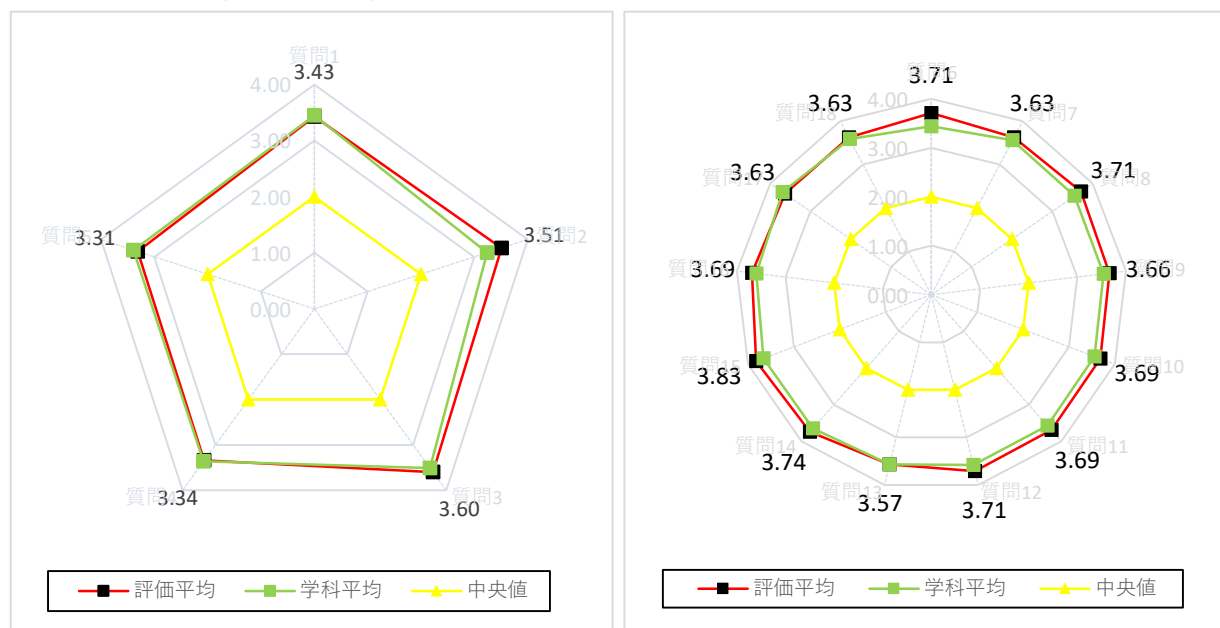
また、質問10～11、13においても学科平均より低い、他の科目に比べるとPowerPoint資料の提示や資料の配布が少ないことや、自分たちでプレゼンをするペース配分などが影響していると考えられた。その他は、学科平均同様もしくは学科平均よりも高く、特に質問14や17では、教員が個別および全体に対して丁寧に対応した結果だと考えられた。

（３）次年度に向けての取り組み

来年度は、質問1～5の評価を高くするために、学生自身の学習意欲や学習への達成感を高めることが課題となる。特に、レポートへの取り組むことへの自己評価の低さが考えられるため、あすなろう活動と並行しながら、個別および全体の指導を分かりやすく伝えていく必要があると思われる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		データサイエンス演習	45名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

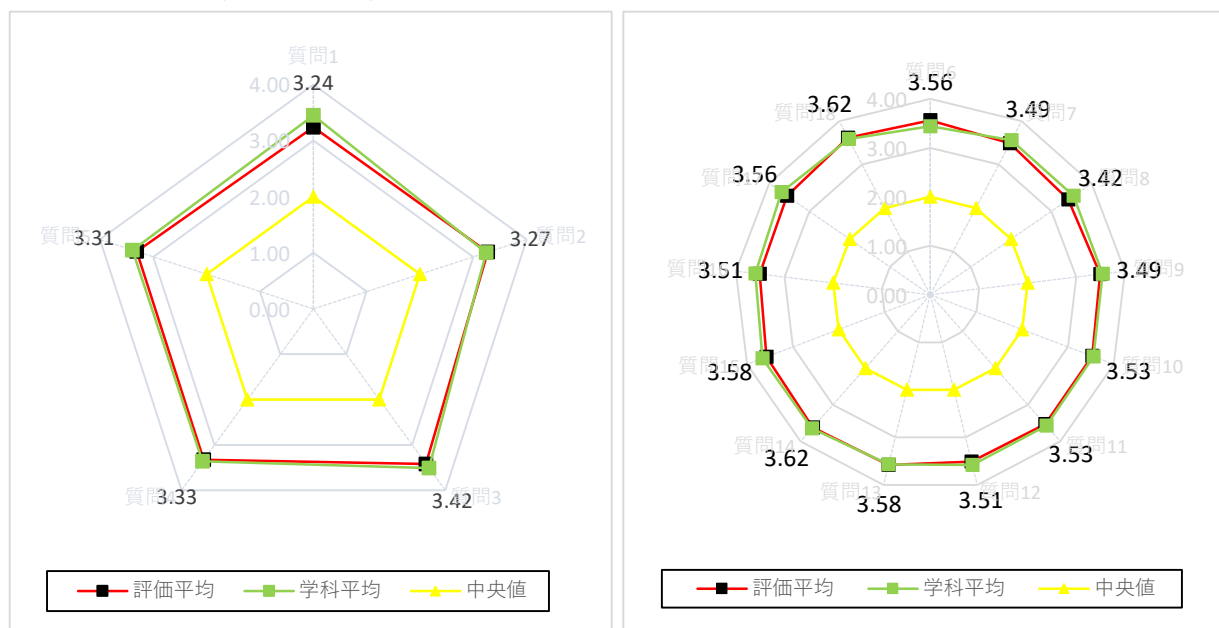
概ね高い評価を得ており、演習内容や講義形式としては問題ないと思われる。昨年度から講義形式を一人一人課題を行う形式からグループワーク形式に変えたことも良かったと思われる。各ゼミ別で課題を行うことで、目的意識が明確になり、課題遂行に向けて各人が努力していたと考えられる。また、ゼミ内で苦手なことを補い合いながら進めていく形が取れたようであった。

(3) 次年度に向けての取り組み

概ね高い評価を得ているため、この評価を維持していきたい。学生の質は毎年異なるため、次年度の様子を鑑みて、修正点を挙げていきながら、より良いものにしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		データサイエンス演習	80名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

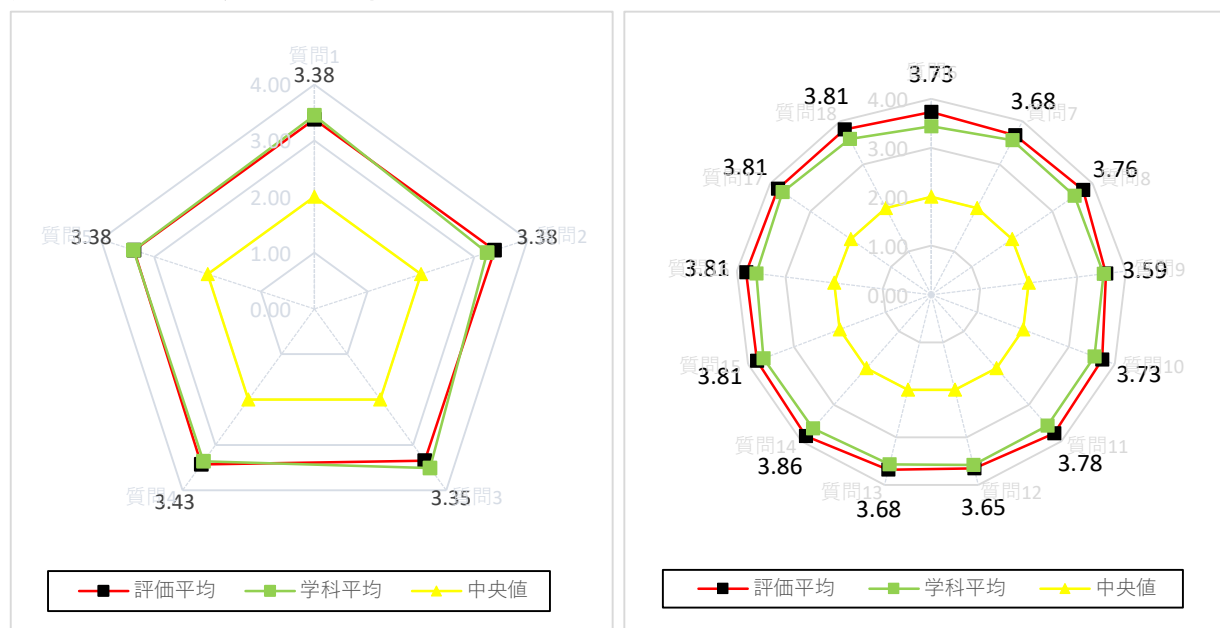
- ・データサイエンス（全体での学習）とゼミごとの学習においては、学生が混乱することなく受講をすることができたと思われる。
- ・4年生時の卒業研究に向けた「データの活用」「データの分析」等の技術を得ることがこの授業の大きな狙いとなっている。そのことを踏まえ、狙いは達成できたと思われる。今後はこのスキルを可能な限り、あらゆる発展等の中で活用していくことで、より深く学ぶことができるように継続させていくことが重要であると考え。

(3) 次年度に向けての取り組み

「知識」と「かかわり」、このふたつのことが学びを深めていく上では大切と考える。「知識」については、興味・価値あること等に関する理論、事象の背景、物事、データをより深く知ること、さらにより広く知ること、活用していくであり、「かかわり」は体験、経験、物事へのかかわり、人へのかかわり、環境（場）へのかかわり等に関してより深くかかわり、そこからより広くかかわることができるようになっていくことであると考え。それを学生自身が実現できること、達成できること等に向けて、学外ゼミ活動で多くの療育等体験に取り組んでいきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学概論 I	45名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

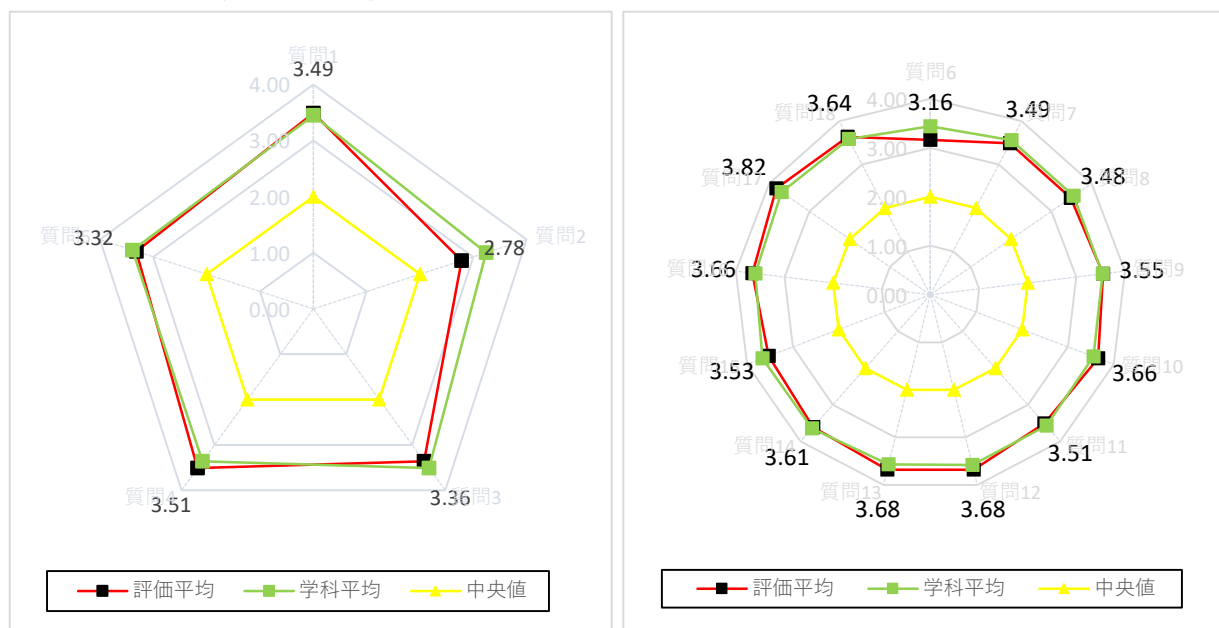
講義としては、全体的に高い評価を得ている。前年度の反省を踏まえて、シラバスに注力したり、映像メディアの変更等を行ったことが良かったようである。ひとまずは、高い評価として認識していきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度に向けては、この評価を維持できるように実施したい。そのうえで、映像メディアなどは最新のものに更新しながら、より良いものを提供していきたい。さらに、学生の質の変化にも注目して、内容等も考慮していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		発達心理学	82名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

授業者の授業評価点が学科の平均点より低位の項目は質問6、7、8、11、14、15の6項目であった。特に低い項目は質問6、11、15であった。質問6はシラバスの説明を簡略化したためと思われる。今後留意すべき項目は質問15である。「公平に対応」についての項目が低位だったことは反省すべきである。

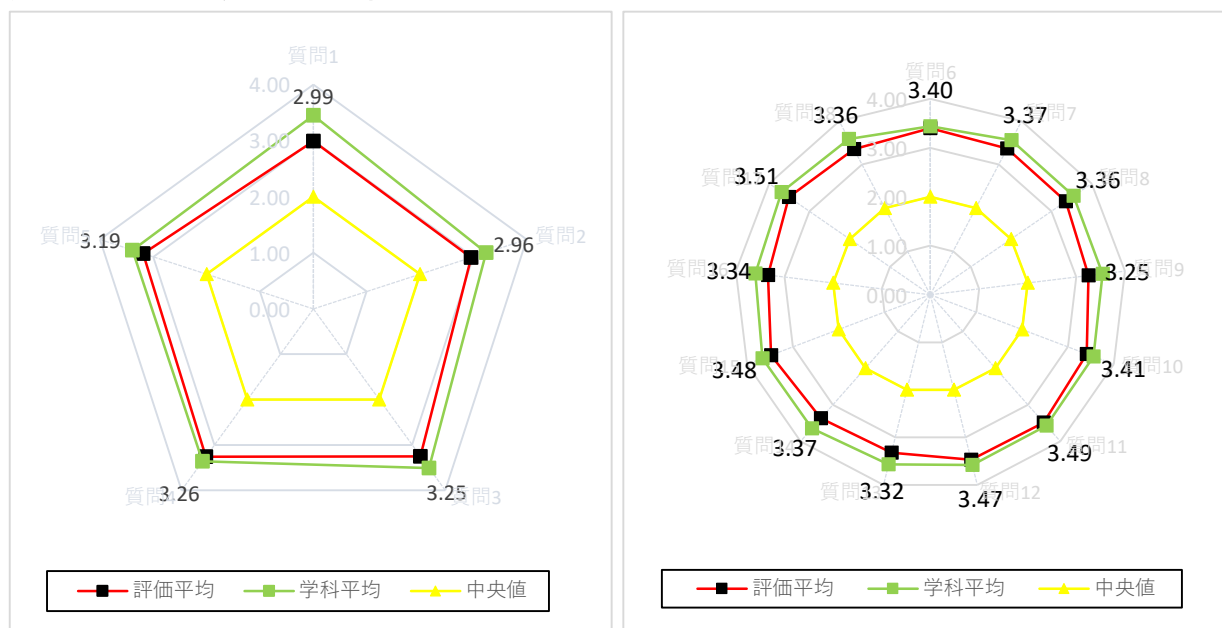
一方高位の項目は質問9、10、12、13、16、17、18であった。顕著に高かった項目は質問17「熱心に授業に取り組む」「授業の進む速さ」の項目であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

分析のところ述べたことに関連して、記述する。まずシラバスの説明をまず改善したい。昨年度に比しよりシラバスについて説明はしているが、まだ十分でないと思われる。特に留意すべきは「公平に対応する」の評価が低かったところである。思い当たる節がないではないが、それは受講者の構成に関わる場所である。この公平の評価が低位であることはこれまでにないことである。来年度にこのことに留意し、その評価を真摯に受け止めるようにしたい。また、「授業への関心興味への工夫」がやや低位であった。この項目に低位の評価があるのはこれが初めてである。留意したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		特別支援教育総論	84名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

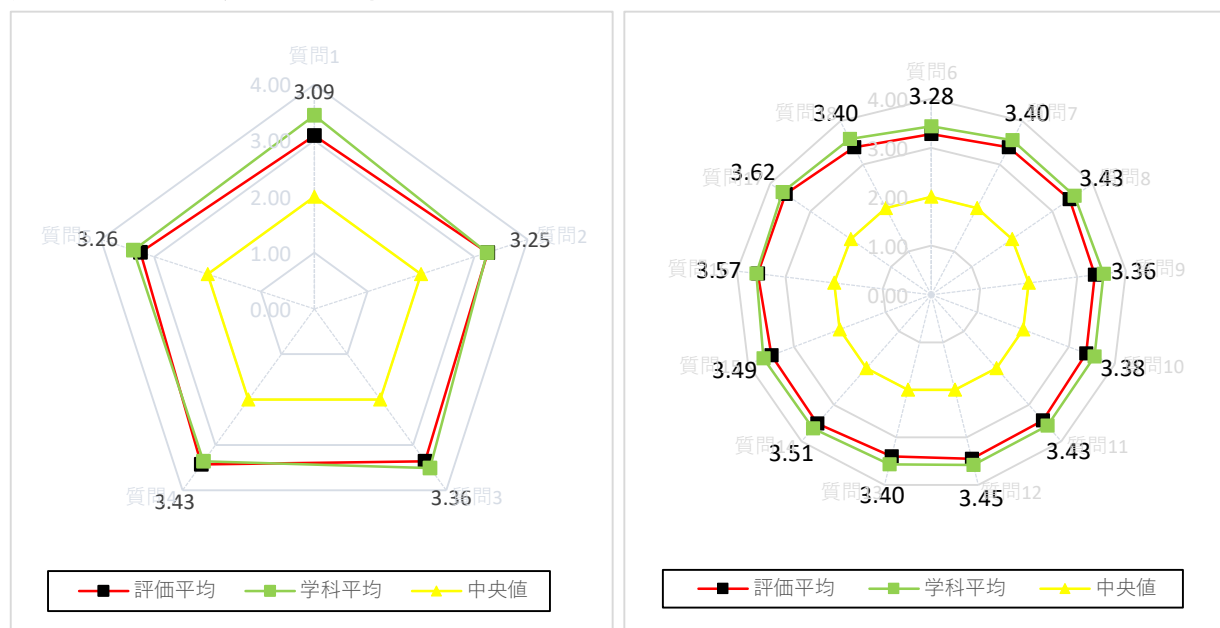
- ・評価項目間には数値のばらつきが少なく、評価結果はバランスの良いものであったと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・自由記述には、担当教員が経験した事例の話に興味・関心を持った、わかりやすかった等の意見があった。今後もできるかぎり具体的な事例の提供を行い、できるだけ障害のある子どもの支援について実感が伴う授業に努める。
- ・担当教員の話が中心で、もっと双方向の授業がよいとの意見があった。授業に取り入れていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容総論	65名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

学生の授業評価については、すべての項目で一定以上の高い評価を得ている。本年度はすべて対面授業ができたため、コロナ禍におけるオンライン授業と異なり、学生とより双方向の授業が可能となった。

一方通行の授業にならないように一人ひとりからの意見を聴くように努め、演習として手遊びをするなど工夫を行い、学生も積極的に参加することができた。双方向的な授業であるアクティブラーニングを意識して進めたことがこのような評価につながっているのではないだろうか。

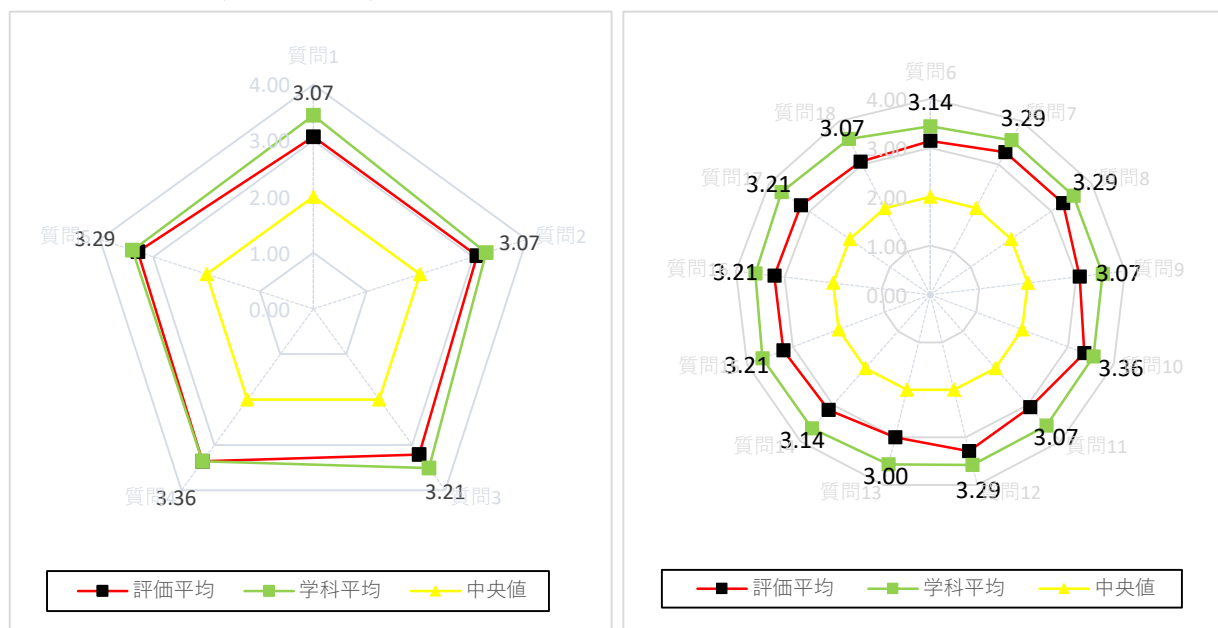
また、本授業は1年次後期の授業である。次年度には初めての実習体験をすることを視野に入れて、学生が子どもの姿や保育所・幼稚園の1日の流れをイメージできるような授業が期待されていると考える。そのため、特に保育現場で求められる「記録」の取り方については実際にワークをとおして重点的に行った。その成果は現場での実習に活かされると期待する。

(3) 次年度に向けての取り組み

令和5年度については、新型コロナウイルスもほぼ収束し、対面授業をとおしてより双方向的な授業が可能であると考え。基本的には今年度と同様の方法で授業を展開したいと考えている。実際に保育現場に実習に出る際に、その成果が発揮されるよう細かくサポートする体制が必要である。今後も、より現場に即した内容の授業ができるよう、対面授業の特性を活かし、アクティブラーニングの形で行っていききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（表現）	65名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

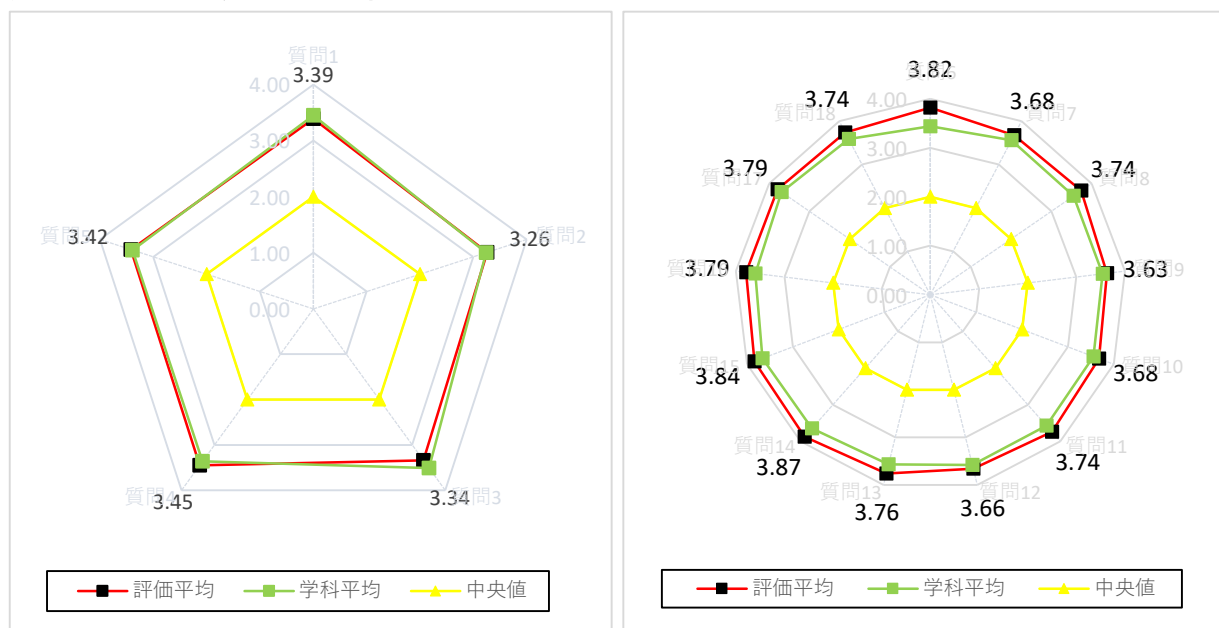
この講座では、授業担当教員2名による講義に加え、随所にグループワークを組入れながら展開していった。質問1～質問5の学生の自己評価結果を見ると、特に大きく落ち込んでいる項目は見られなかった。しかし一部の学生の中には欠席が連続するものがあったり、グループワーク時に私語をし始めるような学生もいたことから、グループワークの進捗状況がと滞りがちになるグループのあった、その際には、必要に応じて該当する学生本人に注意を促すような働きかけを行いながら指導を進めていった。学生たちは、言葉での表現、身体の動きによる表現や製作物づくりに取り組むといった諸々の表現活動に取り組んでいく。このような実技を伴う活動をグループワークとして組み入れると、その特性上、作品を創る過程では、表現に対する苦手意識が働くこともあるし、提案としての意見を述べつつも私語が加わってしまうようなことも起こりやすい。担当教員同士、この点に留意しながら連携を図りつつ指導を進めていった。質問6以降に関する評価も、極端に落ち込んでいる項目は見られなかったものの、次年度以降の講座内容の充実に向けて、教員間の連携を図りながら対処していきたい。

（３）次年度に向けての取り組み

この講座のグループワークでは、あらかじめ決められた活動内容に取り組ませるというのではなく、個々の学生の表現を取り入れながら指導内容を構成していく必要がある。次年度の受講学生たちの表現を組み入れながら授業を構成していくためには、担当教員間の連携が欠かせない。そこで次年度は、連携強化とともに、グループワーク時の課題を、より一層明確化させるような働きかけを重視して指導を進めて行く予定である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		発達心理学 I	45名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

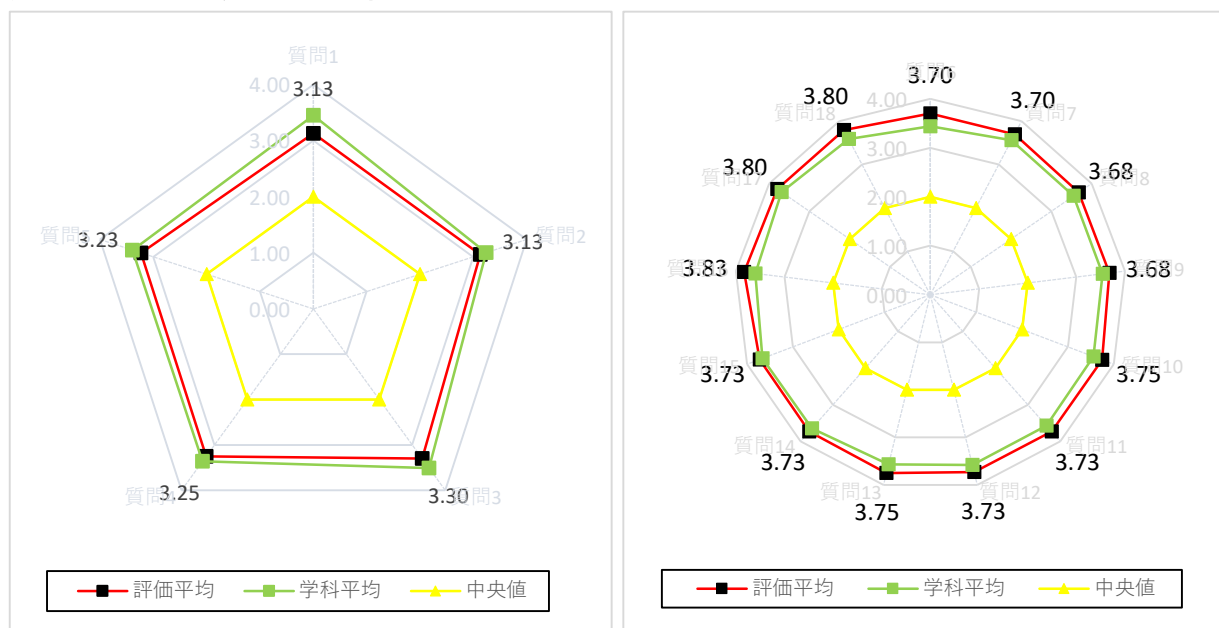
講義としては、全体的に高い評価を得ている。質問3授業中に居眠り・私語等をせず真剣に取り組みましたか。のみ点数が低い結果であった。おそらく、昼からの講義（金曜3限）であったことと関係していると思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度に向けては、この評価を維持できるように実施したい。そのうえで、映像メディアなどは最新のものに更新しながら、より良いものを提供していきたい。今後は、発表する機会等を設けることで、緊張感をもたせることも検討していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		発達心理学Ⅱ	44名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

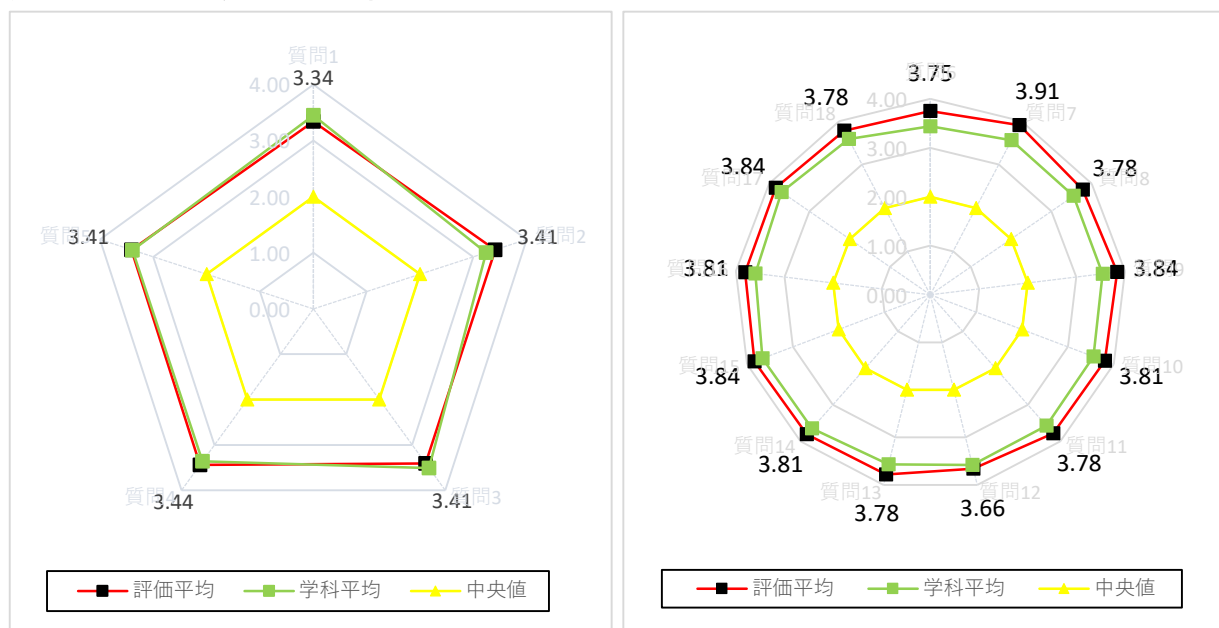
講義としては、全体的に高い評価を得ている。今年度はじめて担当した講義であり、ひとまずは、高い評価として認識していきたい。質問2シラバス（授業計画）を活用しましたか。に関しては、シラバスを用いていた。しかしながら、あまり点数が高くないということは、学生の記憶に残っていない可能性が高いと言える。これに関しては、改善点であると言える。

(3) 次年度に向けての取り組み

残念ながら、次年度は教科担当を外れることになったため、取り組みについて記載することができない。しかしながら、今後再度受け持つことになれば、シラバスに関する内容に注力して学生に説明したい。その他については、高い水準での評価が維持できるように最新の情報、研究内容を盛り込みながら講義をしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		乳幼児心理学	38名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

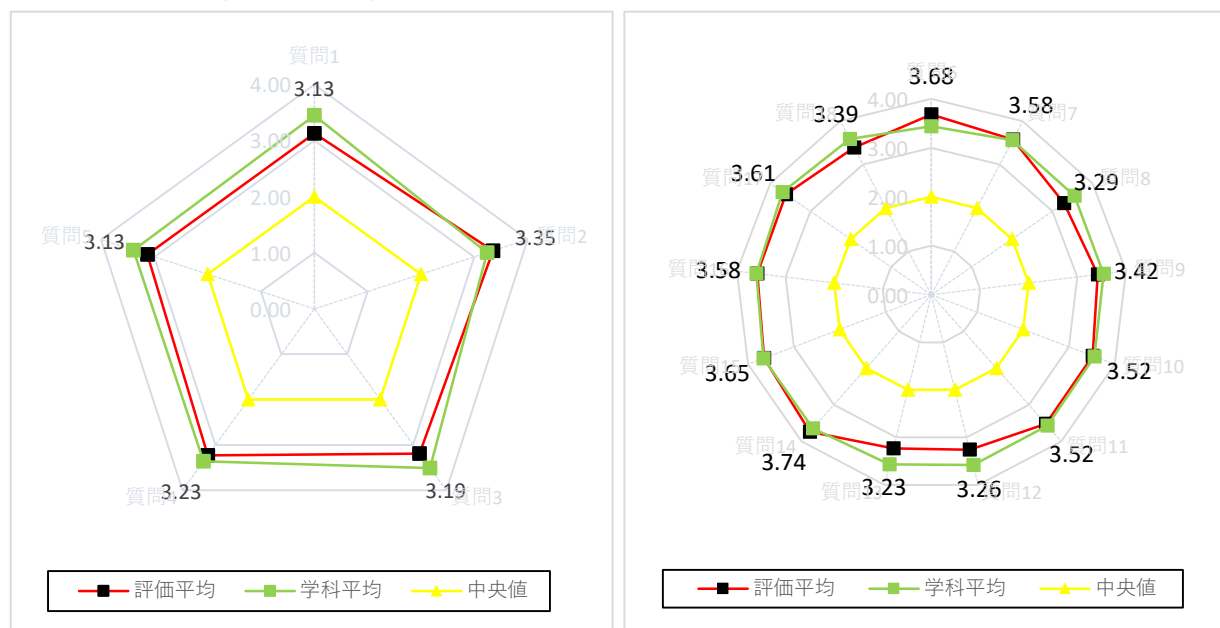
質問4以外、すべての質問において学科平均よりも高い水準となっている。特に、椎津門6～7では、シラバスに応じて到達目標を提示して、学生が意欲的に取り組むように授業に取り組んだことが影響していると考えられる。また、質問8～11では、学習への興味関心につながるような資料提示、DVD視聴などの工夫が高い評価につながったと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

教員が進める授業ではなく、学生が主体的に学習に取り組めるように、アクティブラーニングの活用など、学生が自分で工夫して考えていくプロセスを扱っていく必要があると思われる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理的アセスメント I	48名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

概ね学科平均と同程度の評価となった。重要な点を穴埋め式にした資料を配付し、講義では重要点の解説を行うことで授業に集中できる工夫を行った。更に授業外課題で理解度把握に努めるとともに、解説や質問の機会を設け、翌回に疑問点に答えることで、疑問を疑問のまま持ち越さないように配慮した。公認心理師国家試験過去問題の解説や、心理検査が研究等でどのように用いられているかをレポート課題とすることで臨床実践に興味を持たせる工夫も行った。授業進度について自由記述に一件遅いと感じるという回答を得た。学生の理解や記入速度に差がある場合があるため、余裕をもった進行としたが、学生質問12・13の回答が平均よりやや下回ったため、学生の様子を見ながら進行速度を意識していきたい。

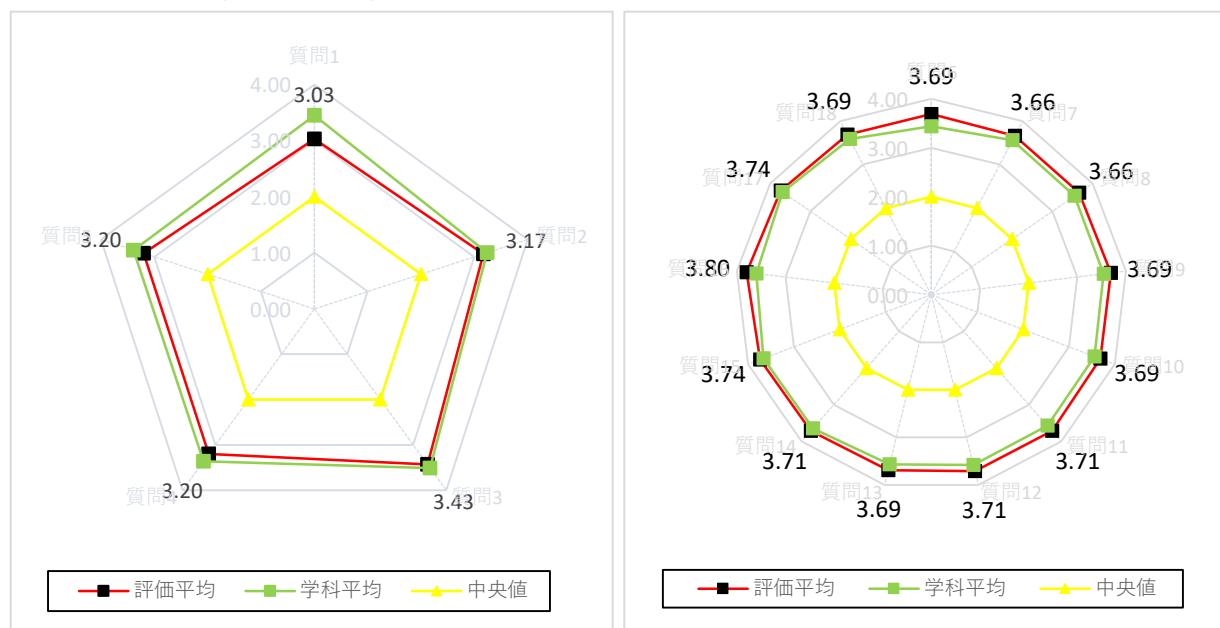
(3) 次年度に向けての取り組み

次年度においても、各回の感想・疑問を求める形式を踏襲し、授業内で生じた疑問等に適切に対応したい。資料の工夫や授業外課題等での理解度把握、公認心理師国家試験過去問題の解説や、心理検査が研究等でどのように用いられているかをレポート課題とすることで臨床実践に興味を持たせる工夫などの取り組みは次年度以降も行い、学生の理解に合わせた授業進行に留意していきたい。

コロナ禍では実施できていなかったグループによるディスカッションも次年度は行うことで、主体的な学びの機会を提供していきたいと考える。授業評価回答は4分の3程度の学生から得られたが、次年度はさらに回答を得られるよう、最終授業日の最後などに十分な回答時間を確保したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		児童臨床心理学	44名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

概ね、相対的に高い評価であった。

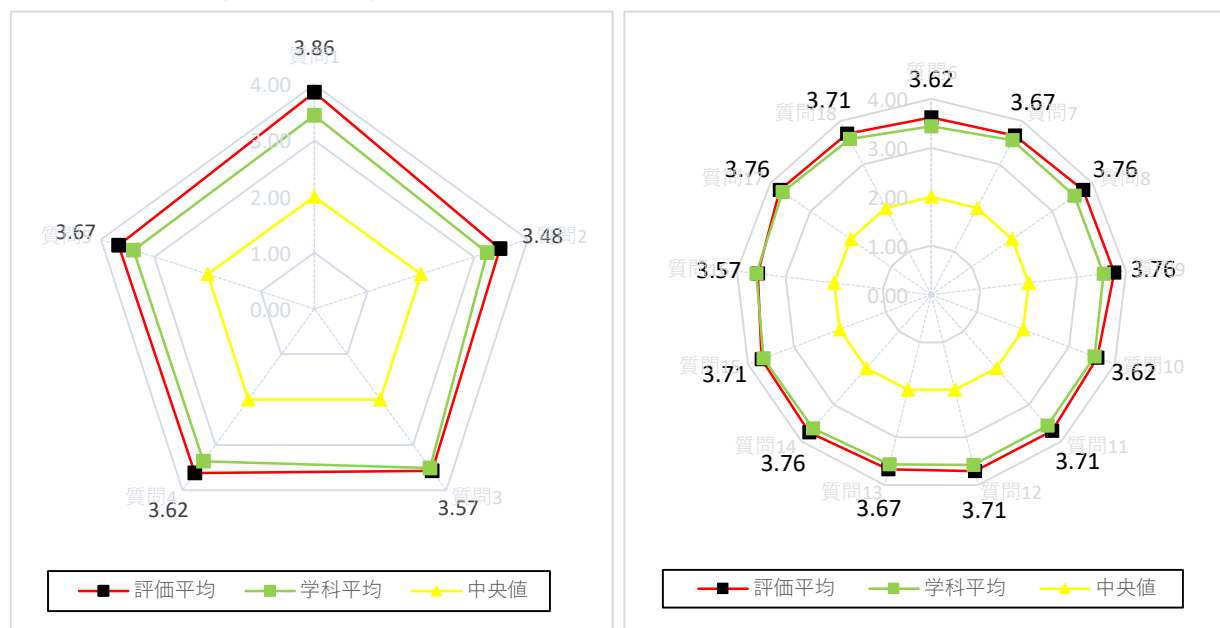
「授業を理解するための自分の工夫」については、課題を設けたり、より具体的な予習を伝えることで、さらに改善されるのではないかと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・引き続き、受講生の興味、関心が持てるような内容や授業展開を工夫していく必要がある。
- ・学生自らが主体的に学べる工夫として、具体的な予習内容の提示や振り返り問題の活用があるのではないかと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（健康）	59名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

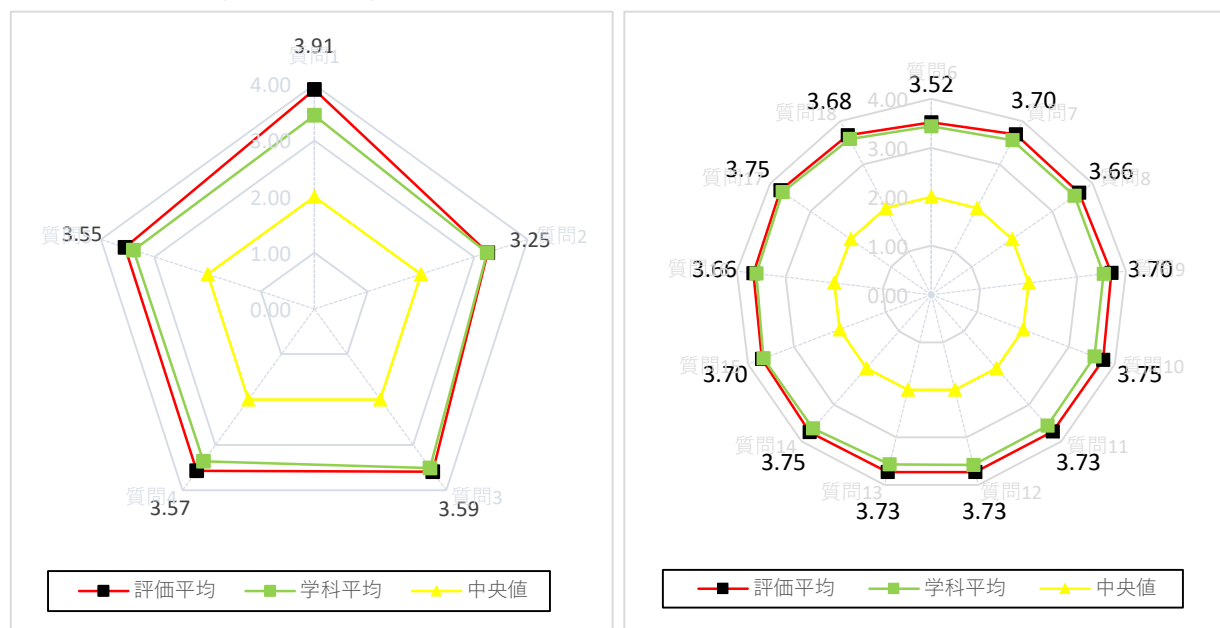
すべての項目で高評価であると捉える。来年度以降も継続していきたい。

（３）次年度に向けての取り組み

今年度は昨年度の良い部分を踏襲しつつも、学生同士のディスカッション等のALをもう少し多く取り入れて主体的な学習を促したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		特別の支援を要する子どもの理解	89名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率49% (44/89)、総合評価3.67

自由記述：いろんな質問にちゃんと受け答えて下さったので内容がより深まりました。ビデオなどを多く使ったり、先生の経験を踏まえた話を聞けてとても参考になることが多い授業だったと思います。先週の授業に対しての質問を毎回答えてくれてすごく分かりやすかった。障害についての理解も深めることができ、講義を受けて良かったと思う。この講義では、先生が自分の経験を話して下さるところが良かったです。生の意見を聞く機会は多くないので、とても良い経験になりました。イラストや図、映像など理解しやすいように工夫されていてとても助かった。

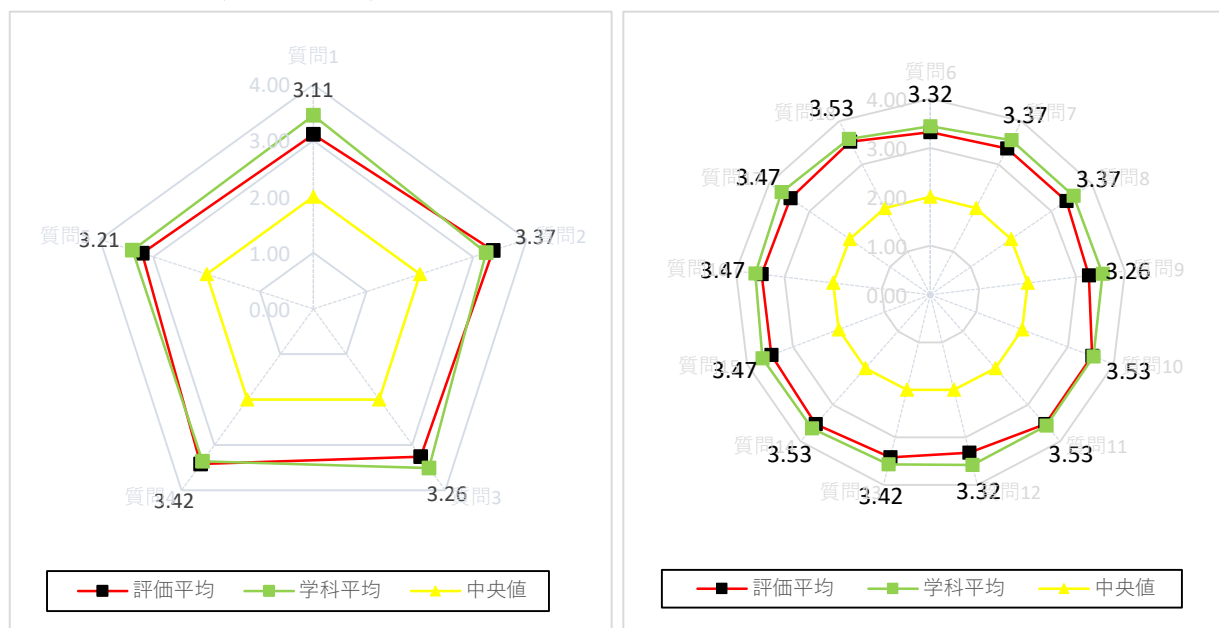
本授業の目標は、特別支援教育の理念や課題を踏まえ、特別の支援を要する子どもたちへの支援・指導の在り方についての理解を深めることである。実務経験をもとにした内容や、配布資料の工夫が評価された。質問2のシラバスの活用が3.25と最も低かった。

(3) 次年度に向けての取り組み

質問内容を、次の授業内で取り上げ、回答することについて肯定的な意見が多くあった。特別支援学校における実務経験に関する内容についても、よりわかり易く伝えたい。シラバスについては、授業中に数回取り扱いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		生活科指導法	73名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

(2) 結果の分析と評価 (300～500 字程度)

- ・ 学科平均との比較 (共通教育科目については共通教育科目全体平均との比較)
概ね、学科平均と差異は無かった。
- ・ 特に低 (高) い項目についての考察
- ・ 自由記述についての分析と評価
「配布資料が多かったため、効率の良い授業であったと感じた。」
「生活科についてよく学ぶことができました。」
「指導案を考えるのが難しかった。」の3例であった。
- ・ 本授業の目標、ねらいと照らし合わせた分析と評価
- ・ 授業全般に対する反省点
- ・ 回答率が低かった理由 など
「73人中19人提出済み」と回答率が低かった (26%)。前後半で教員が別のオムニバスであることが、その原因かもしれない。

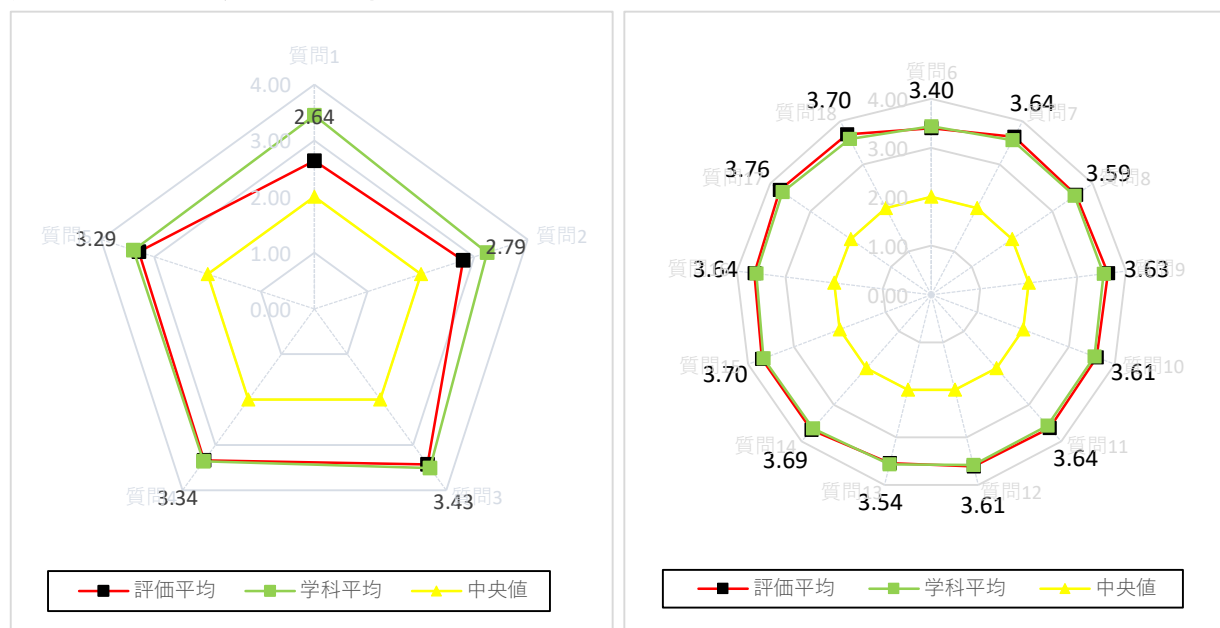
(3) 次年度に向けての取り組み

(3) 次年度に向けての取り組み (300～500 字程度)

- ・ (1) の授業評価結果で特に低かった項目に対する改善方法
特に低かった項目はない。
- ・ (2) の授業全般の反省点に対する取り組み方法
- ・ 令和5年度に新たに導入したいと思っている授業方法 など
- ・ 授業評価そのものに対する意見を含んでも可
オムニバス教科ゆえ、前半終了時、後半終了時に2度評価をすることも考えられる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育相談の基礎と方法	98名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

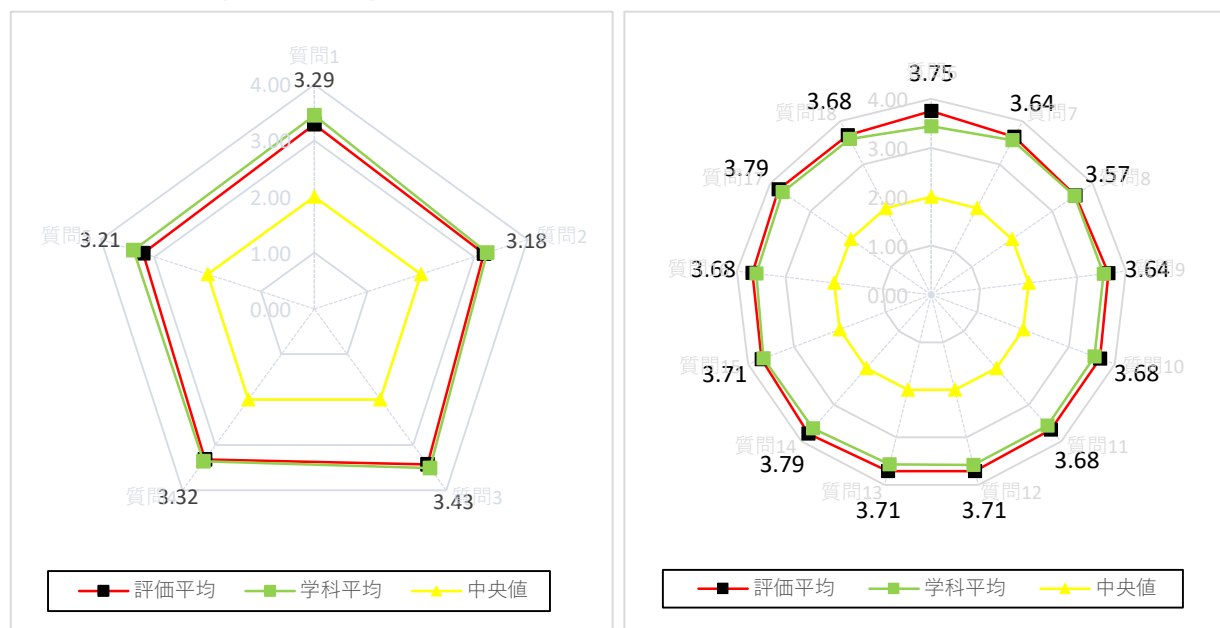
学生の授業に対する態度は、平均3.29と3点以上であり、適度なレベルであると思われる。学科平均点より低位の評価の項目は2項目であった。「質問6 シラバスについて説明がりましたか」（学科平均＝3.47 3.40）「質問13 授業の進む速さは適切でしたか」（学科平均＝3.56 3.54）であった。シラバスの説明は簡略化したため、この結果と思われる。一方進む速さについては、授業者の自覚としては「なるべく学生の理解の進む具合に応じて、解説する」との心構えをもって取り組んだが、結果が速い評価であり、今後学生の反応に注目すべきと考える。一方他の13項目については、学科平均を上回っている。特に「質問9 授業は分かりやすくする工夫がなされていましたか」「質問16 教員は双方向的なやり取りをしながら、授業を行っていましたか」「質問18 この授業を総合的に評価してください」、この3項目は学科平均に比し「0.1」高い評価を得ている。「双方向的な授業」「分かりやすい授業」日頃より授業者が心がけている点であり、これが現実学生に評価されていた。授業者の意図とその実践が裏付けられたものと評価したい。

(3) 次年度に向けての取り組み

結果と分析から、反省すべきは2点である。シラバスをしっかりと説明すること、授業の進度を適切に保つこと、この2点を改善することを考えたい。ただし、学習内容の量と進度は反対の関係にある。すなわち、進度を遅くすることは学習量を縮小することにもつながる。学習内容の厳選が必要と思われる。この事に取り組んだ後、授業展開の速さの適切化に取り組みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		思春期・青年期心理臨床	50名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

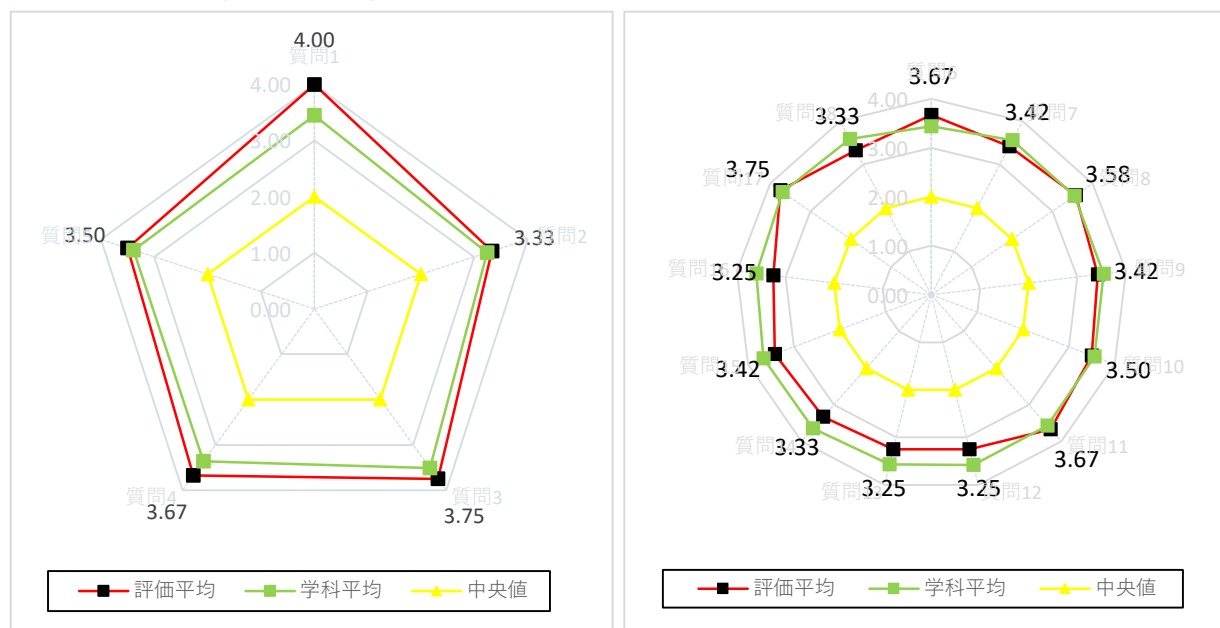
講義の最初の回で、シラバスの説明を丁寧におこなってはいるものの、毎回の講義と関連付けながら、理解させていく必要があると考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

講義の冒頭において、シラバスの内容とも重ねながら、毎回の学修のねらいや目的を丁寧に伝えていく工夫が必要。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会科指導法	94名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

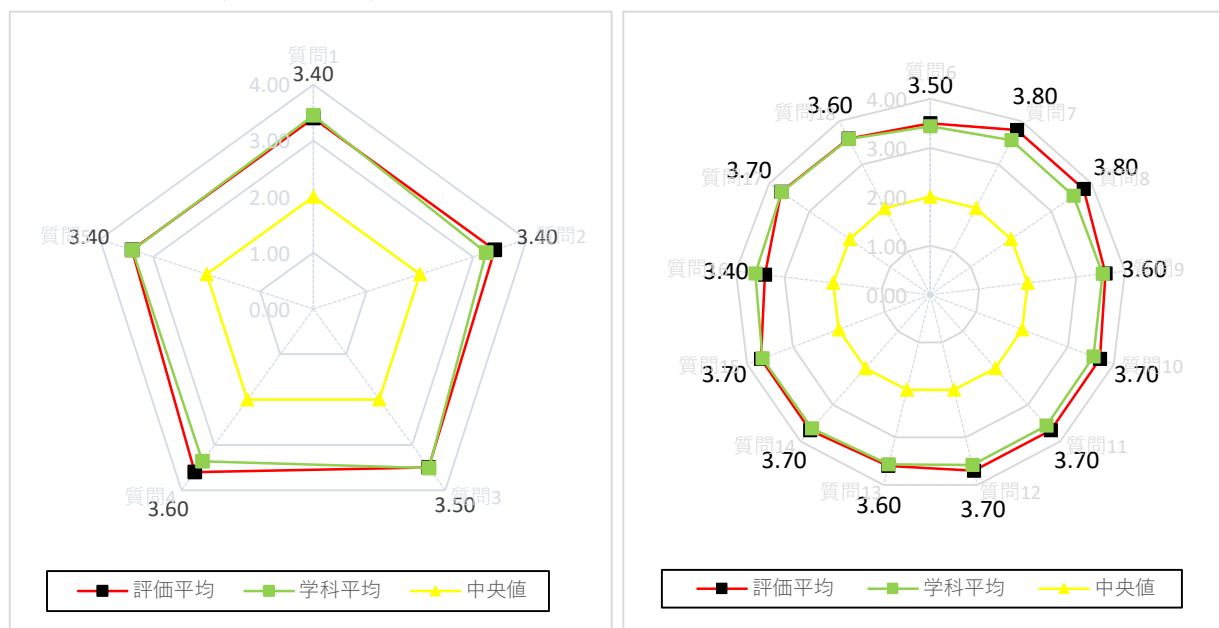
- ・ 学科平均との比較（共通教育科目については共通教育科目全体平均との比較）
質問1～6, 8, 11, 17は、学科平均を上回っていた。
質問7, 9, 10は、学科平均をわずかに下回った。
質問12～16, 18が、学科平均を0.2～0.3程度、下回っている。
- ・ 特に低（高）い項目についての考察
- ・ 自由記述についての分析と評価
「自分で指導案を書いて板書計画を書く活動は他の授業でもとても役に立ちました。ありがとうございました。」という1件の回答があった。
- ・ 本授業の目標が、社会科教育学の基礎的理解を深めるとともに、学習内容論、学習過程論、学習方法論等の指導理論を踏まえ、具体的な授業デザインの方法を身に付けることであることより、小学校実習のための実践力を育成する教科教育法として位置付けている。質問8, 11, 17は、特に留意している点であり、高評価が得られておりよかった。
- ・ 回答率が低かった理由
「94人中12人」と回収率が12.8%と低かった。授業時にアンケートに回答するよう呼びかけたが、授業中にアンケートを書かせる時間をとれなかった。

(3) 次年度に向けての取り組み

- (3) 次年度に向けての取り組み
 - ・ (1) の授業評価結果で特に低かった項目に対する改善方法
アンケートの回答者が少ないという点の改善が求められている。
94人中12人しか、回答していない。毎時間、授業時間をフルに使って授業をしている。試験もフルに使った。授業以外の時間でアンケートに答えるように再三、注意したが効果はなかったようだ。16回目の授業時にアンケートに答えさせるのも一案かもしれない。
 - ・ (2) の授業全般の反省点に対する取り組み方法
 - ・ 令和5年度に新たに導入したいと思っている授業方法 など
インターネットを活用した授業（地図データ、AIチャット等）を増やしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽科指導法	87名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

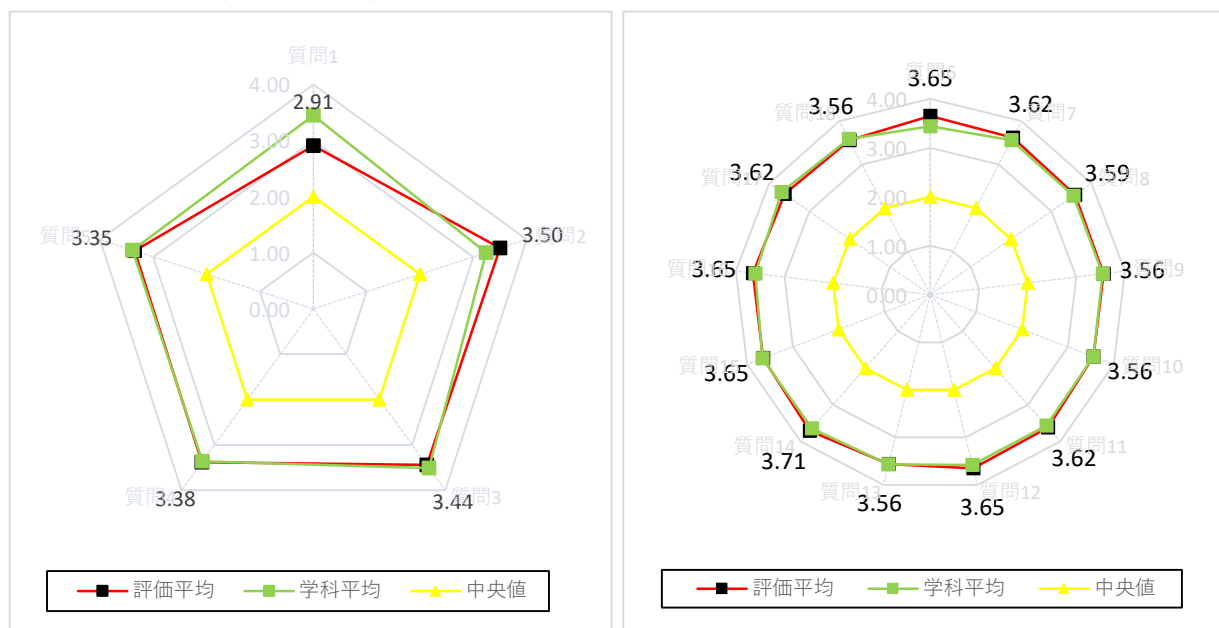
この講座は、小学校教員免許取得のための専門科目の一つである。質問1から質問5に記されている学生の自己評価にも表れているように、特に評価が落ち込んだ項目は無かった。今年度の履修学生の受講態度は良好であった。質問6から質問18についても、おおむね評価は良好であったものの、質問16の評価がやや低い。この点への対応を、次年度の課題としたい。毎時の指導は教科書に沿って進めつつ、必要に応じて資料としてのプリントを配付していった。レポート課題の記述内容からは、授業時に配布したプリントを有効に活用してくれていることが窺えた。

(3) 次年度に向けての取り組み

小学校の教育実習及び採用試験に向けて、個々の学生の実践力育成を図っていかなければならない。そのためにも毎時の授業時間中における、学生と教員との双方向的なやり取りは重要である。次年度は、この点を重点的に工夫し、学生の活発な意見を引き出せるような指導の改善を図りたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		社会・集団・家族心理学Ⅱ（家族心理学）	49名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

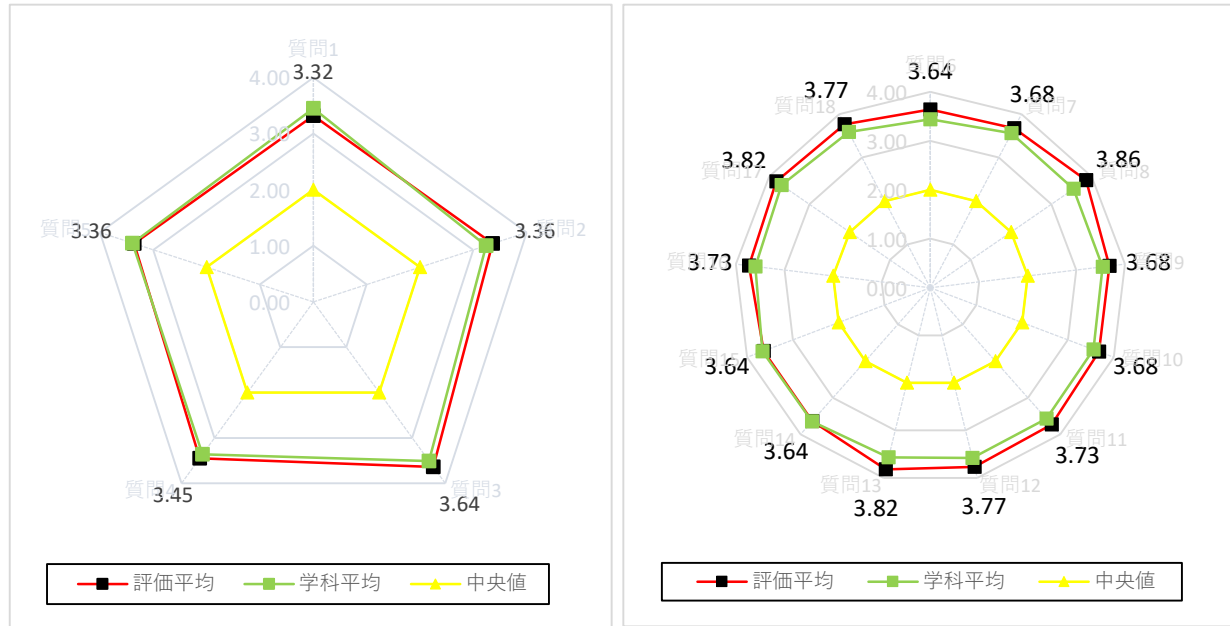
教員への評価は全ての項目で学科平均と同程度であった。家族心理学に関する様々なテーマに関して、学生が調べたことを発表し、テーマに関連するグループディスカッションを取り入れ、教員が解説を行う形で行った。授業終了時の感想では、「グループワークで色々な意見が聞けて良かった」「自分たちで調べることでより理解できた」との感想が見られていた。授業評価でも自分たちで調べて発表することでためになったとの回答も得られた。一昨年度のコメントで記載されていた発表時間と解説時間のバランスについては、初回に発表時間の目安を周知し担当表にも記載をしたことで、今年度も昨年度同様特に意見は見られなかったが、解説が一部長かったとの感想も見られていたため、時間配分および解説時の伝達量に留意したい。

（３）次年度に向けての取り組み

学生の主体的学修推進のための授業形式であることの意義を周知して授業を進めることを次年度も意識したい。グループワークの取組みは高い評価も得られており、公認心理師資格試験の過去問解説などについても、今後も継続していきたいと考える。視聴覚教材視聴時に音声トラブルが発生したが、別途視聴覚教材に関する資料を準備してため、大きな影響はなく進行できた。今後も視聴覚教材導入時などは機材トラブル等にも対応できるよう準備を行ってきたい。授業評価回答数は4分の3程度であった。さらに回答率をあげるよう、授業最終回に十分な時間をとるようにしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育科指導法	74名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

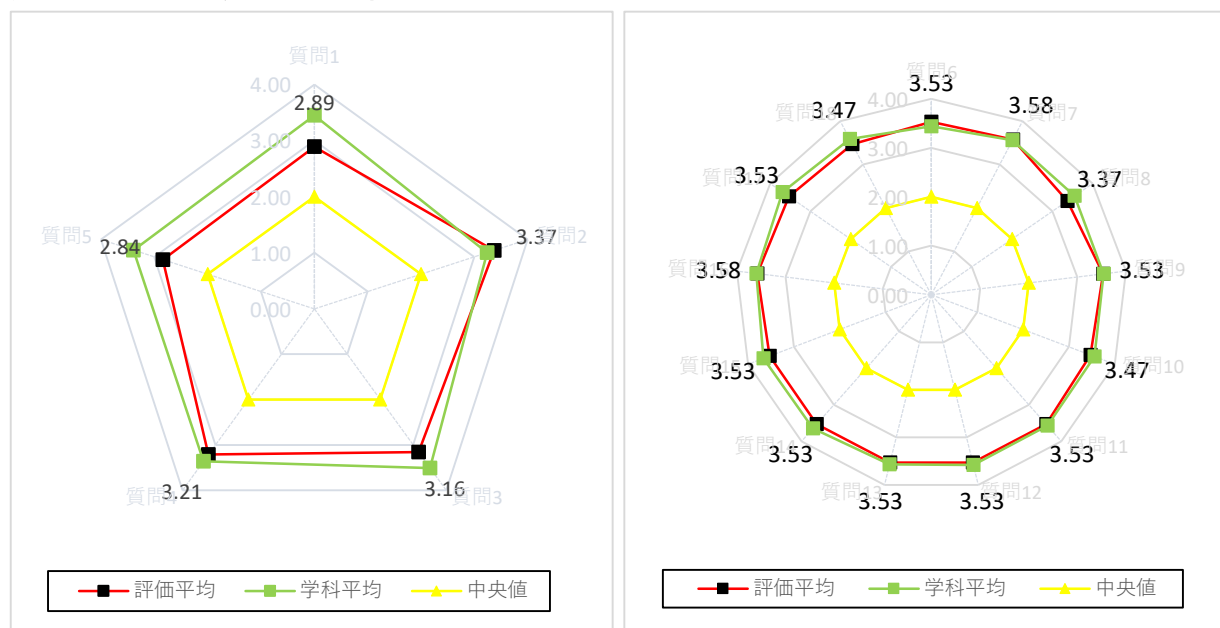
全ての項目において高評価であると捉える。今後も継続していきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度は昨年度の良い部分を踏襲しつつも、学生同士のディスカッション等のALをもう少し多く取り入れて主体的な学習を促したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		コミュニティ心理学	41名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

概ね、評価は高い結果ではあったが、受講生にとってより興味・関心が持てるよう工夫をする必要があると考える。

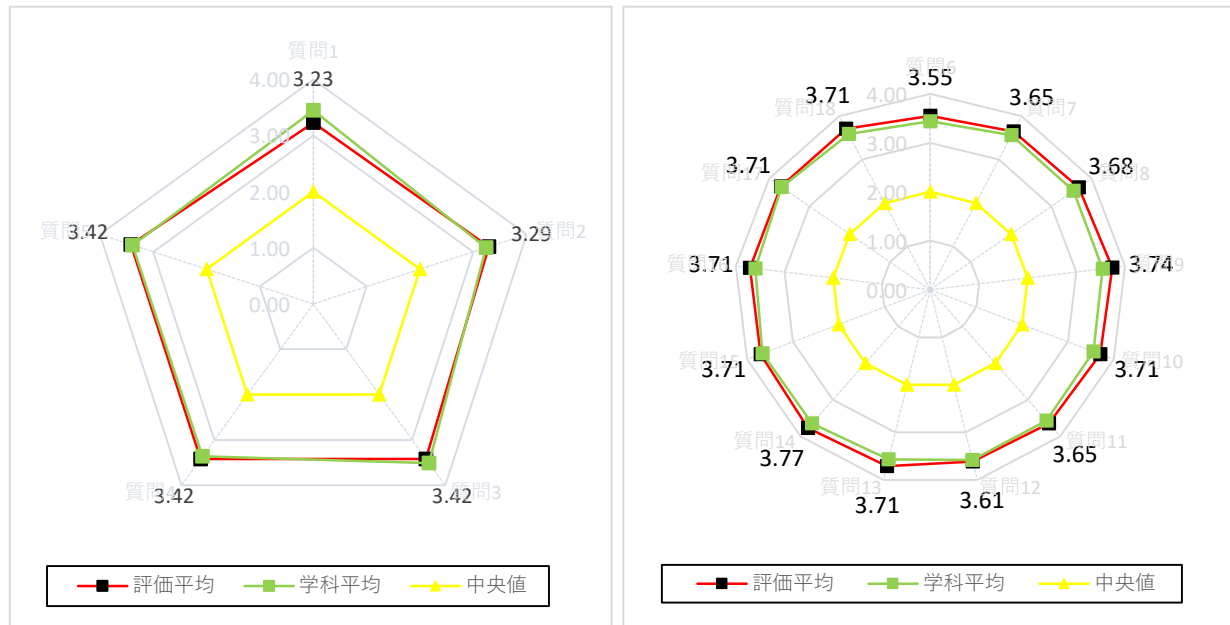
また、学生自身の総合自己評価が相対的に低いことから、受講生自らが主体的に学べるような工夫が必要であると考え。

(3) 次年度に向けての取り組み

(2)においても記述したが、「コミュニティ心理学」という発展的な科目・内容を、より受講生の身近なテーマとして興味・関心が持てるよう内容や講義展開を工夫する必要があると考える。また、グループワークや調べ学習など、受講生自らが主体的に学べる時間をもう少し設けてもいいかとも感じた。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		教育・学校心理学	53名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

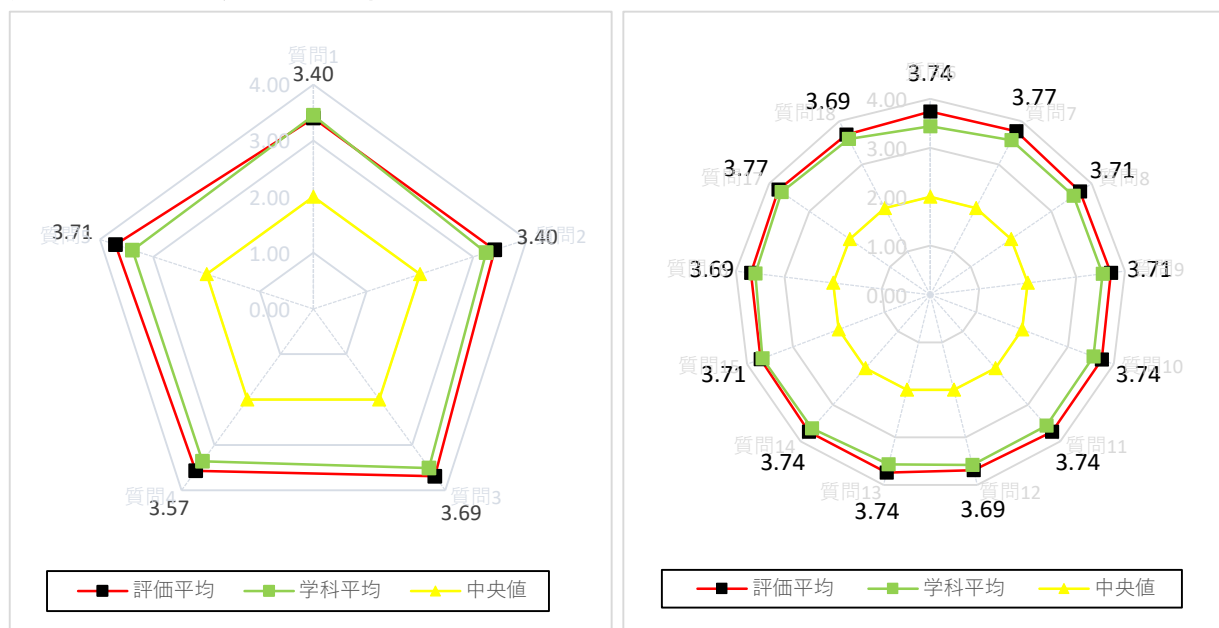
講義としては、全体的に高い評価を得ている。今年度はじめて担当した講義であり、ひとまずは、高い評価として認識していきたい。映像の更新や研究内容に関しても新しいものを取り入れて、講義を行っていききたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度に向けては、上記でも記載したように高い評価を維持していきたい。また、最新の情報（研究成果を含む）ものも取り入れながら、講義を行っていききたい。また、好評であった個別ワークに関しても、引き続き行っていききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育・教職実践演習 (幼・小)	81名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

(2) 結果の分析と評価 (300～500 字程度)

- ・ 学科平均との比較 (共通教育科目については共通教育科目全体平均との比較)
- ・ 特に低 (高) い項目についての考察
いづれの項目も、学科平均よりも、やや高かった。
- ・ 自由記述についての分析と評価
「教育者としてやるべきことは何なのかを深く追求することができた。」
「教育実践演習なので講義ではなく、実践できる授業内容の方が良かった。」
の2つであった。後者の感想は、やや的外れの感がある。講義+実習で、各回の授業は構成されていた。
- ・ 本授業の目標、ねらいと照らし合わせた分析と評価
- ・ 授業全般に対する反省点
- ・ 回答率が低かった理由 など
81人中35人提出済みと過半数を割った。授業中にアンケートを書く時間を確保していないからかもしれない。

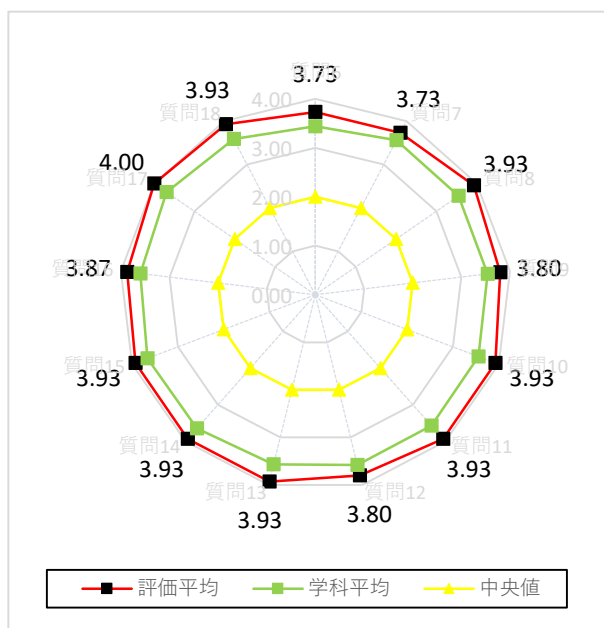
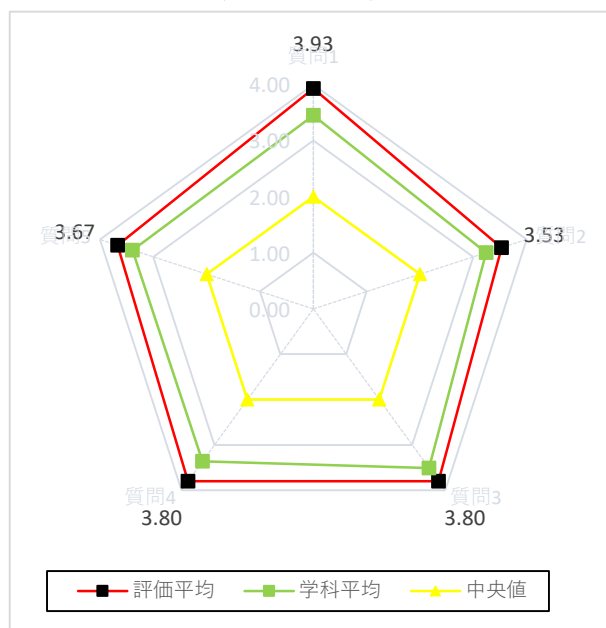
(3) 次年度に向けての取り組み

(3) 次年度に向けての取り組み (300～500 字程度)

- ・ (1) の授業評価結果で特に低かった項目に対する改善方法
- ・ (2) の授業全般の反省点に対する取り組み方法
- ・ 令和5年度に新たに導入したいと思っている授業方法 など
- ・ 授業評価そのものに対する意見を含んでも可
特に、大きな変更は不要と考えられる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		知的障害者の心理・生理・病理	58名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率25% (15/58) 、総合評価3.85

自由記述：また新たにたくさんを知ることができ、今後に生かしていきたい。 専門知識など、詳しく知ることができました。とてもよかったです。

本授業は、知的障害心理に関する基礎知識や、心理機能と発達支援、知的障害児(者)に対する心理検査やアセスメントについて理解することを目的とした。

質問6～18の評価については、3.73～4.00 (平均3.88) であり、昨年度の評価より高い結果となった。

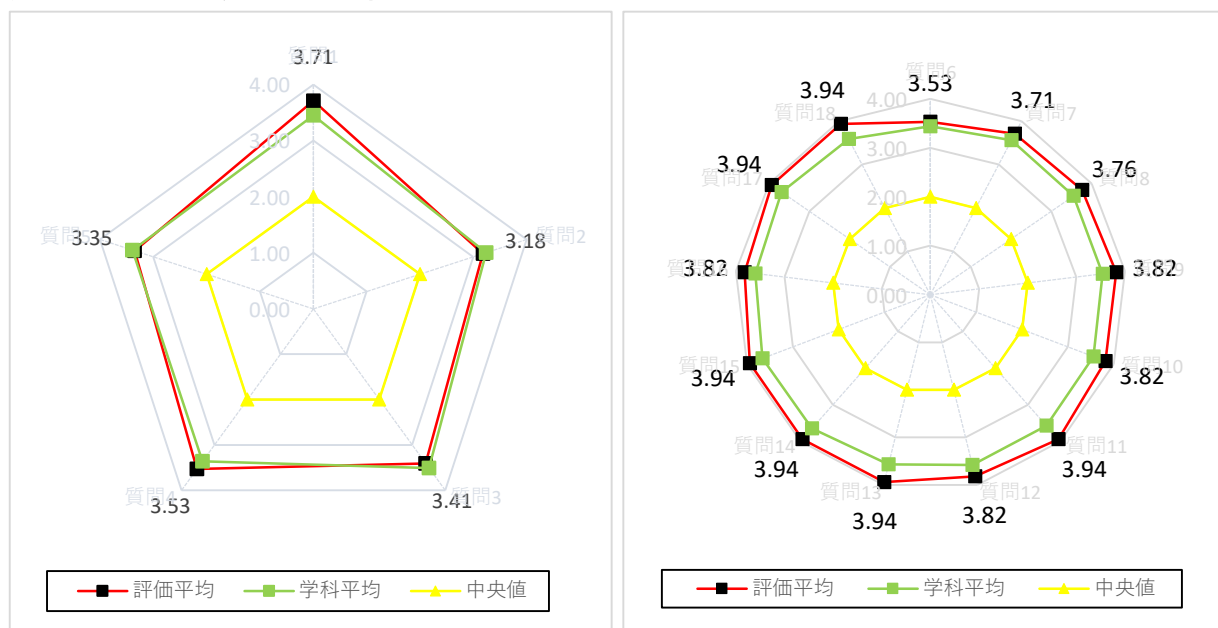
質問17：教員は熱心に取り組んだかの質問については、4.00であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

オムニバス形式の授業のため、評価についての分析には課題がある。
大学で実施する授業評価の時期を早めてもらいたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		肢体不自由者教育	53名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

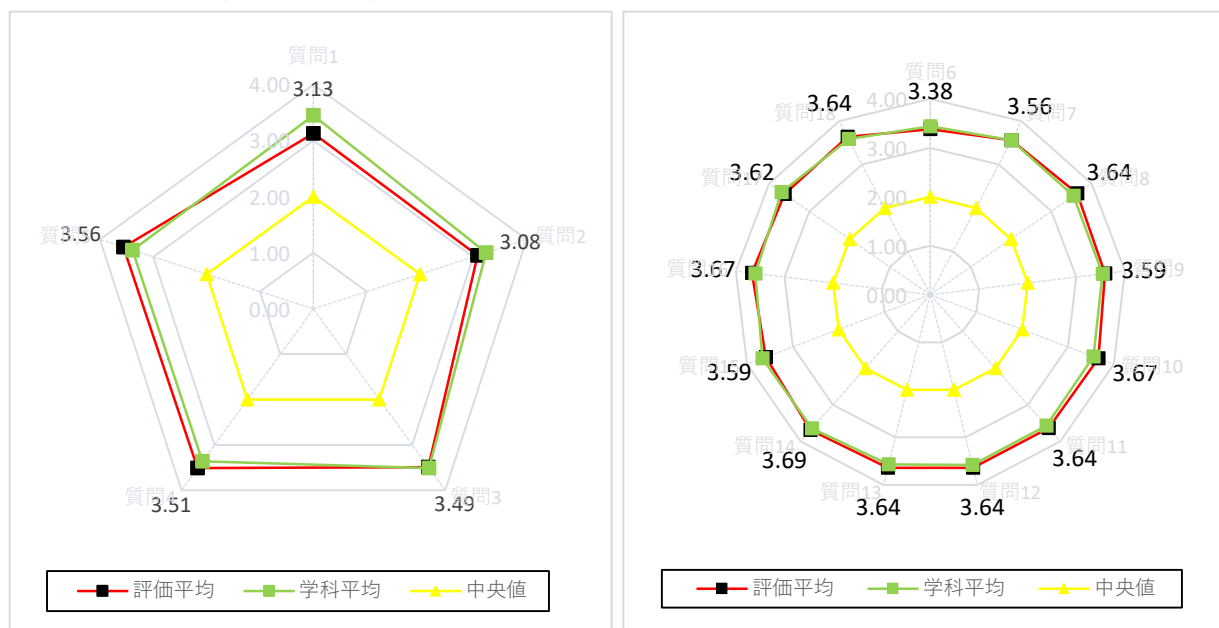
- ・本講義の授業評価の回答率が少なかった件については次の2点であると考える。
 - ①授業中に回答のための十分な時間設定をとらなかったこと。
 - ②周知に関して、回答締め切りのお知らせはしたがその後、回答状況に関しての確認、再度の周知を行わなかったこと、である。
- ・回答結果、自由記述の結果に関しては回答母数の少なさはあるが、概ね、学生は意欲的に学ぶことができたのではないかと考える。
- ・本授業は特別支援学校教諭免許取得に関する講義であり、ある意味「実務的な講義」である。しかし、大学で学ぶということに焦点をあてた時に、免許取得、採用試験のための知識のみならず、「障がい特性」「経年病変」「社会参加と自立」「医療と福祉及び教育」等における幅広い知識を学生が学ぶ機会でもあると考える。そのためのより深い知識を学ぶというアカデミック的な学びを実現させることの重要性を感じる。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・概ね授業形態、授業内容等は学生の評価を得ることができたと考えられることもあり、本年度の授業内容をベースにして、よりアカデミックな面を取り入れていくことを意識した授業としていきたい。
- ・ただし、実務的なこと（体験活動、教育実習、教育ボランティア等）にも十分に活かすことができるような取り組みとしていきたい。
- ・回答率の向上に関しては結果の分析と評価項目に記述したことを活かしていくこととする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		肢体不自由者教育の理論と実際	46名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

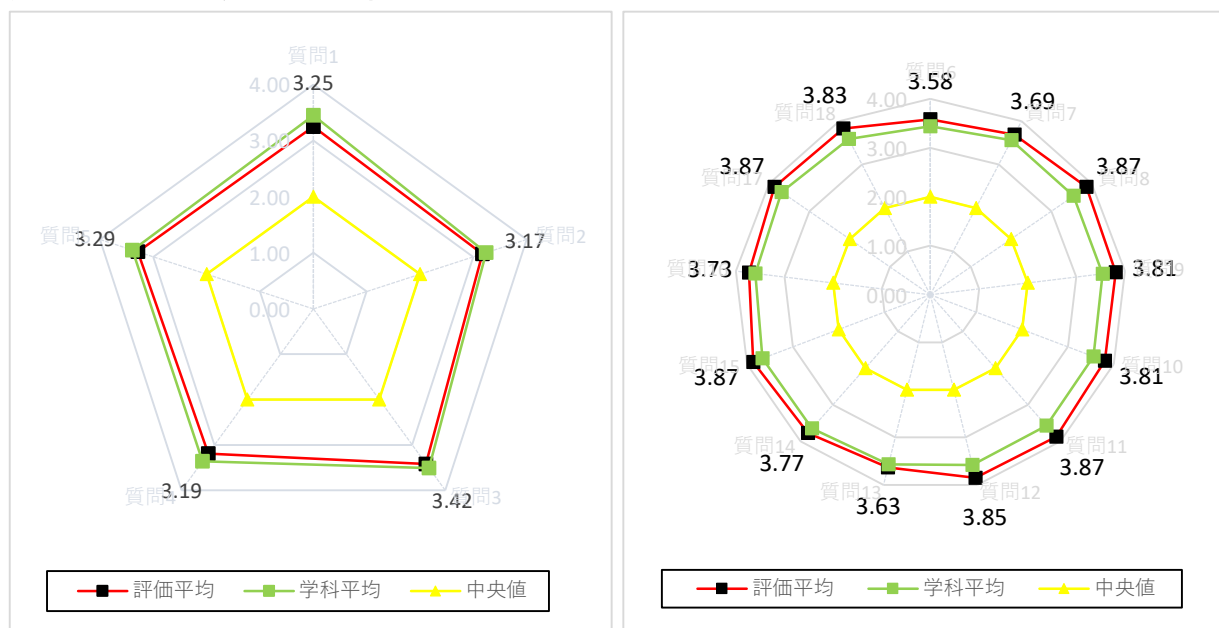
- ・本講義は前半8週を講義形式、後半7週を実技形式という組み立てで2名の教員で前半、後半を分担して開講した。
- ・この講義形式は学生の学ぶ意欲、ゴールまでの見通しの立てやすさ、学びの満足度等においてよかったと思われる。
- ・後半は集中講義形式（実技）で広い講義室を使用したのが、例年より受講生が多く、感染症等の対策も含めての環境として考えた時に、よりゆとりのある教室環境が必要であったのではないと思われる。次年度も後期に予定されている授業であり、冬季の授業となり、同じことが十分に起こる可能性もあることから、実施に際しては工夫が必要かと思われる（二教室に分ける、広い環境の講義室を確保する等）。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・次年度も本年度の講義形式を継続する。
- ・前半の講義においては、後半の実技に繋がるように本年度同様に組み立ていくこととする。
- ・前半の講義に関しては、可能な限り現在の特別支援学校（特に肢体不自由教育の特別支援学校）及び義務制小中学校等における特別な教育を行う学級で取り扱われている技法等を中心に実際の場面をイメージできるように進めていく。
- ・肢体不自由教育を行う特別支援学校は、特に医療的な面との関連が大きく、そこで用いられる用語等にもある程度触れ知識として学生が獲得して実習を含めた現場にでていくことも必要である。これは医療との関係だけではなく、肢体不自由のある子どもを育てる保護者との連携をとるときにも大切となってくるものである（保護者は子どもが誕生した時点から医療と深く継続的に関わり続ける必要性から、専門的な知識も豊富である場合が少なくない）。この点についても配慮したものとしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		知的障害者教育総論	63名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

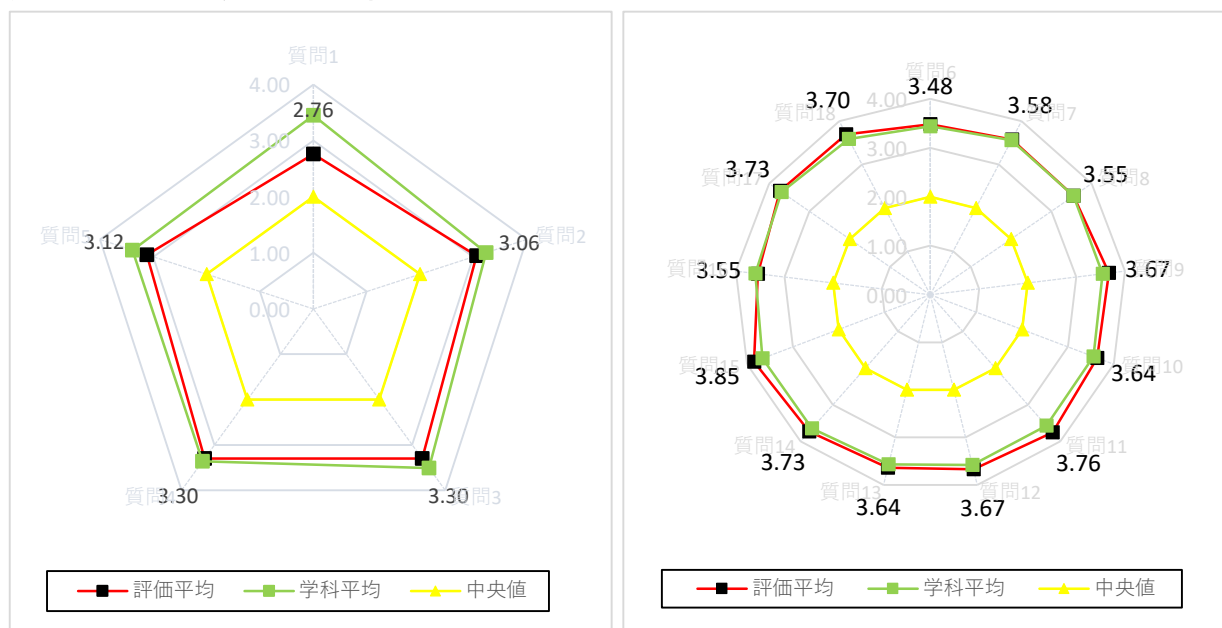
・評価結果はおおむねどれも学科平均を上回っており、また評価項目間には数値のばらつきが少なく、評価結果はバランスの良いものであったと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

・具体的な事例を取り上げた講義がわかりやすかった、対応の仕方などをグループで話し合いを行うことで意見共有ができて良かった、などの意見が寄せられていた。これらを引き続き授業で取り扱い、授業の充実を図りたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学的支援法	47名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

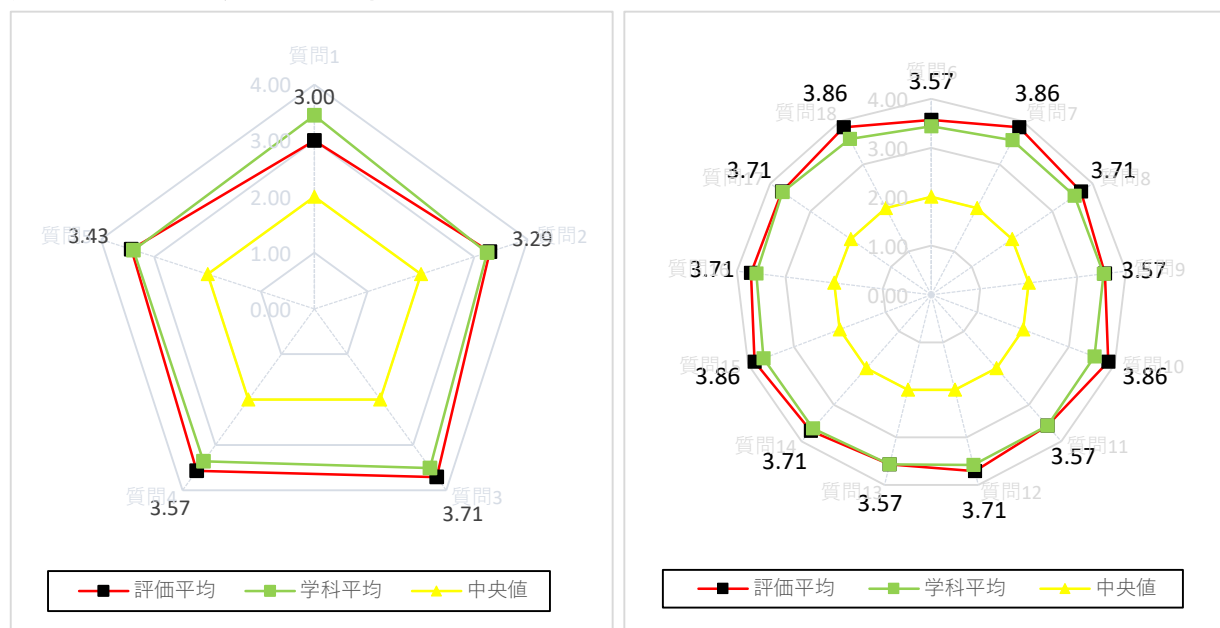
- 1) どの質問にも中央値以上なので、今回のような講義の方法で良いのではと感じる。
- 2) 「双方向の授業」では、マイクを学生に回したかったが、感染防止の観点から、消毒の準備ができなかったので、十分に双方向にならなかったことは残念であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

- 1) さらに双方向の授業や、視聴覚機器を用いて、学生が積極的に参加できるようにしていきたい。
- 2) 学生のなかに、講義を欠席する学生や、遅刻してくる学生もいたので、次からはしっかり把握し、成績との関連なども検討していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		乳児保育Ⅰ	37名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

近年の保育所等における3歳未満児の子どもの就園率が高くなり、それに伴って乳児保育の重要性が指摘されている。令和3年度から「乳児保育」が「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」に分けられ、Ⅰは主に概論、Ⅱは実践の形式で行われた。Ⅱについては保育現場経験が豊富な教員が担当し、Ⅰの概論について担当した。

たまたま同日に「乳児保育Ⅱ」が対面授業の形で行われ、対象学生が同じであったため、「乳児保育Ⅰ」についても対面形式で行った。テキストを用いながら、配布資料等も適切に準備し、状況に応じて視聴覚教材も使用しながら進めた。

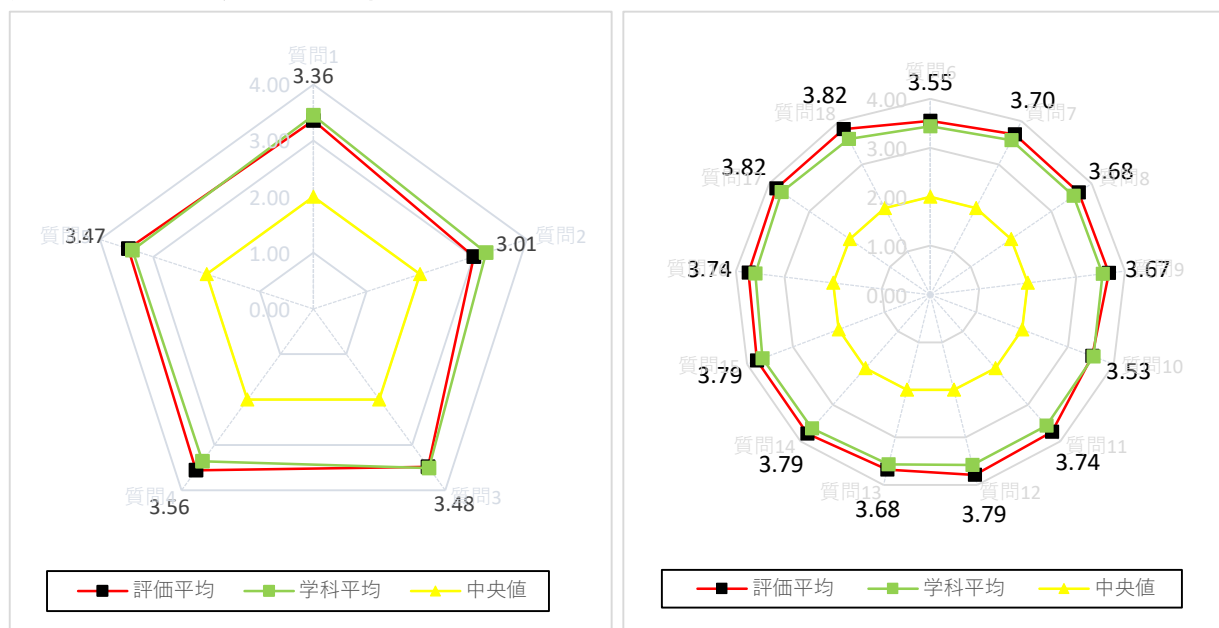
学生からの授業評価についてはすべての質問項目について一定以上の評価を得ている。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も保育現場における「乳児保育」の重要性に鑑み、保育現場経験が非常に豊富な教員による「乳児保育Ⅱ」とできるだけ情報を共有しながら進めていくことによって、学生が保育現場の実習等で乳児についてしっかりと学んだ状態で臨めるような深い学びを促したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽	83名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

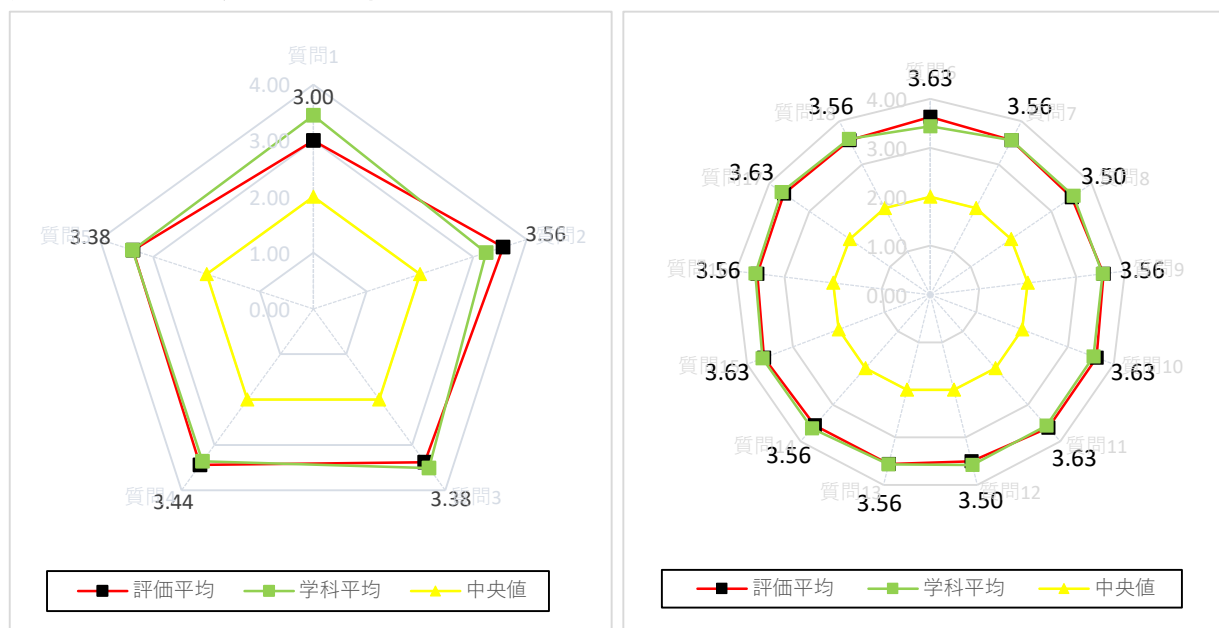
この講座は、1年次生対象に前期に開講している。質問2の学生自身のシラバス活用に関する評価項目の評価がやや低い、毎時の授業において教員が伝えていことが影響している可能性がある。教員の授業評価については、特に大きな課題は見当たらないと判断している。

(3) 次年度に向けての取り組み

音楽に関しては、例年、苦手意識を抱く学生が一定数いる。このことを念頭に入れて、細やかな指導を心掛けていく必要があると考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		感情・人格心理学	44名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

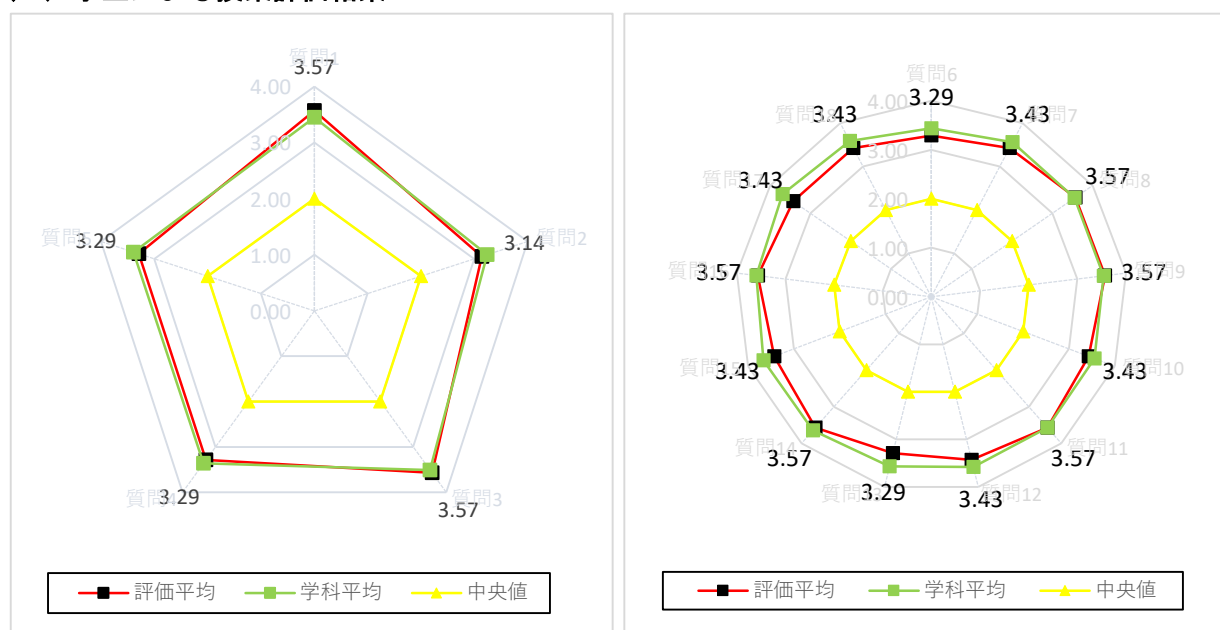
授業評価回答数が少なかったことが課題である。おおむね、学科平均と同程度の結果となった。重要な点を穴埋め式にした資料を事前配付し、講義では重要点の解説を行うことで授業に集中できる工夫を行った。各界授業後のミニレポートで感想や疑問の提出を求め、疑問点については翌回以降に回答することで、学生が疑問を持ち越さないよう留意した。更に授業外課題でも理解度把握を行った。今後も授業内容や課題に対する解説を細やかに行い、また質問等への誠実な対応を行うことで学生が理解を深められるような授業を進めていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度においても、各回の感想・疑問を求める形式を踏襲し、授業内で生じた疑問等に適切に対応したい。配付資料の工夫や授業外課題等での理解度把握などの取組みは次年度以降も行い、学生の理解に合わせた授業進行に留意していきたい。今後も授業内容や課題に対する解説を細やかに行い、また質問等への誠実な対応を行うことで学生が理解を深められるような授業を進めたいと考える。コロナ禍では、ディスカッションの機会が提供できなかったが、今後はディスカッションなども取り入れながら主体的な学びの機会を提供していきたい。脳機能に関する視聴覚教材などは、引き続きより分かりやすい資料を検討していく。今回、授業評価の回答数が少なかったことが課題として挙げられるため、次年度は最終回の講義内での授業評価回答時間を確保していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		障害児保育	49名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率14% (7/48)、総合評価3.44

大雪による休講のため、授業内でのアンケート回答の場が設定できずに低い回答率となった。別に実施したアンケート(匿名)では、37名からの回答を得た。配布資料や、演習、ワークシートによる授業内容の工夫が評価された。以下、自由記述の内容。

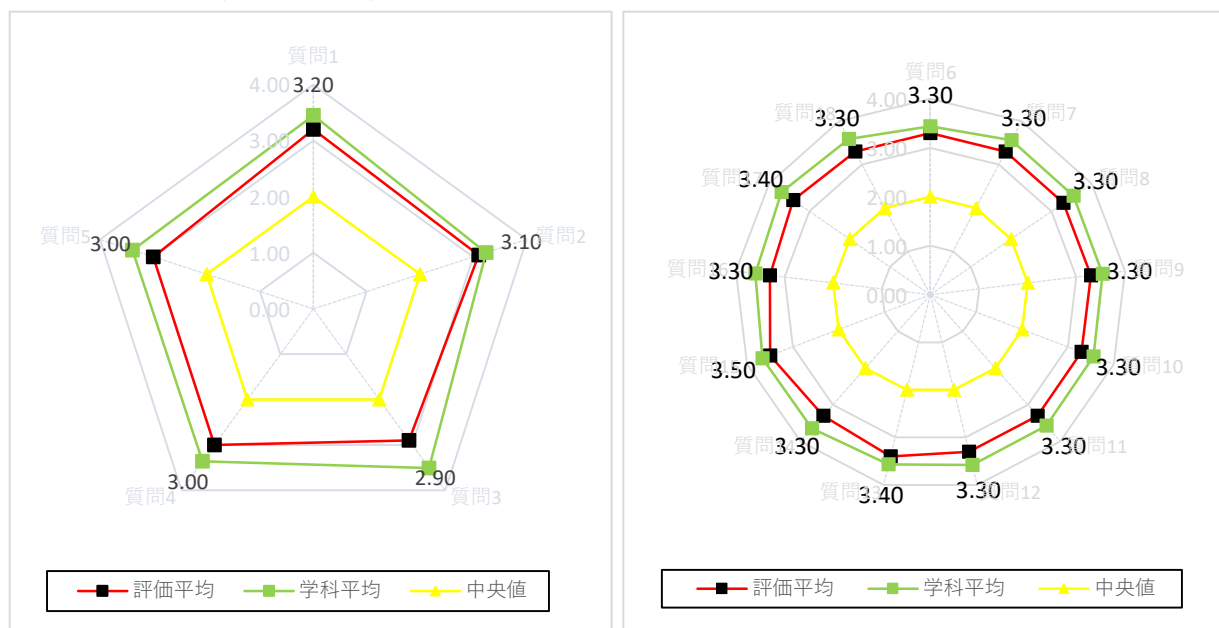
自由記述：配布プリントがあってすごく分かりやすかったです。ワークシートがあり、色んな人と意見交流ができて、その中で学べることも多かったです。とても楽しい授業でした。2年生後期の授業のなかで、1番分かりやすく、1番興味を持って受講することができました。わかりやすく説明していただけてとても理解しやすかったです。また、わからないことがあったら机間指導でヒントを頂けて問題に取り組むことができ、良かったです。授業がとても丁寧で、生徒への配慮もあり、質問なども次の時間にスライドと口頭での説明をされていて、とても充実した講義でした。

(3) 次年度に向けての取り組み

質問13の授業の進む速さが3.29と最も低い結果となった。配布資料や提示資料を工夫し、ゆっくりと進めるよう心掛けたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼児と健康	66名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

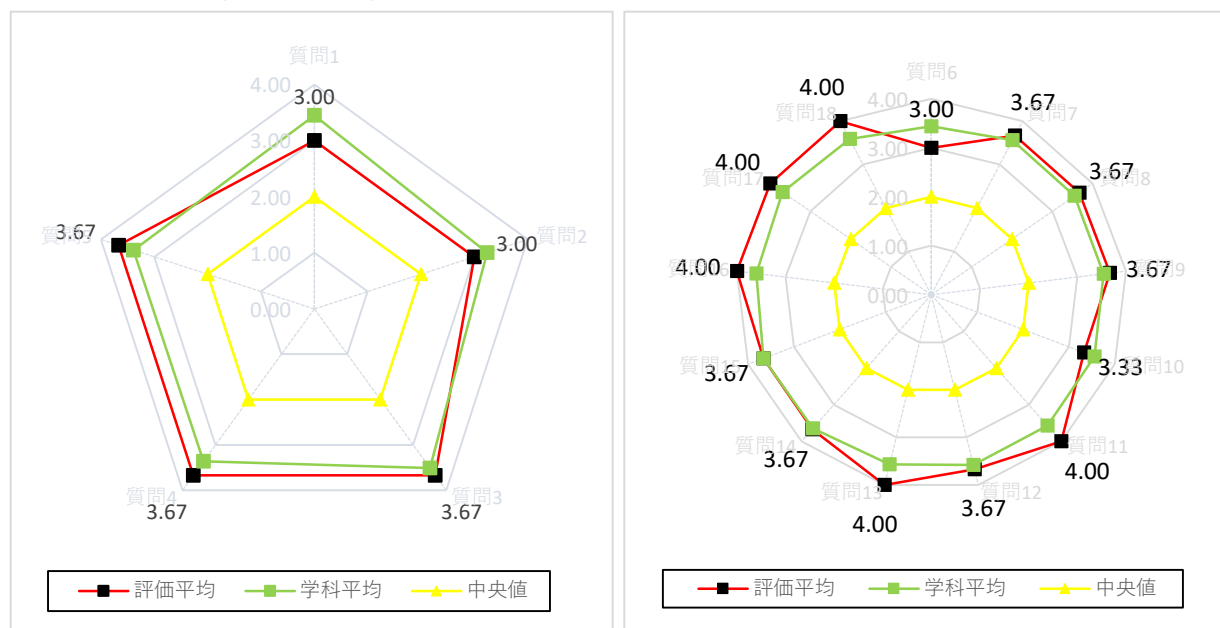
項目において概ね学科平均を下回ってしまあったことは反省である。もちろん個別の点数は低くはないが、授業改善を検討していきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度は昨年度の反省を活かし、学生同士のディスカッション等のALをもう少し多く取り入れて主体的な学習を促したい。また評価の方法も改めて検討したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	5名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

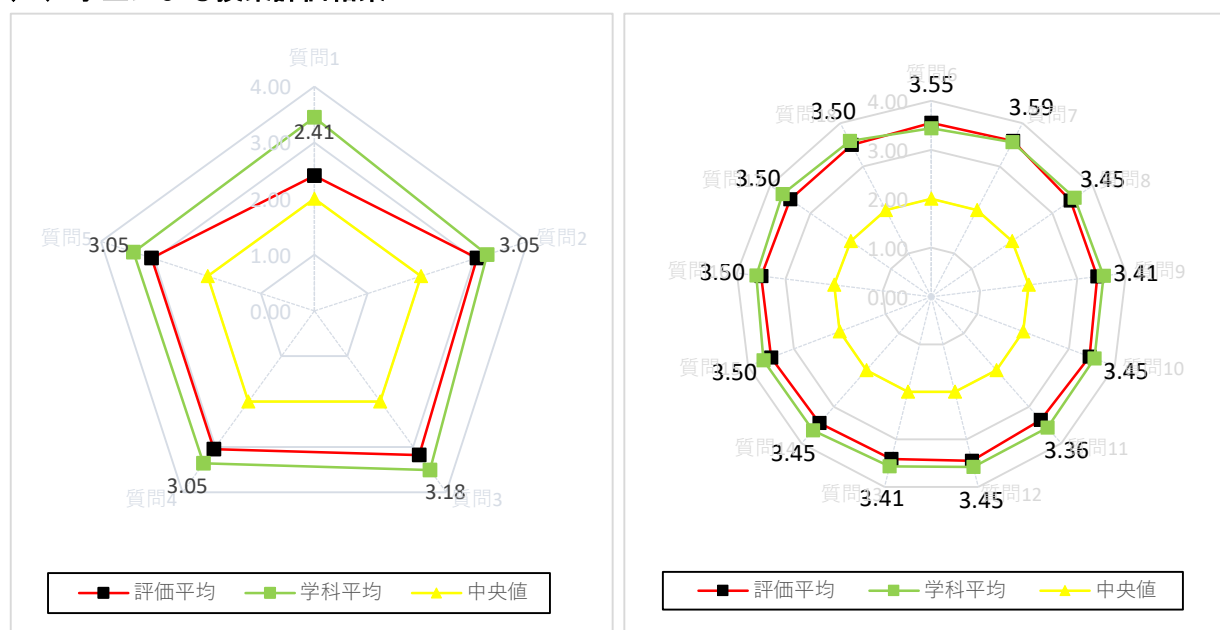
このようなすべての授業に一律の授業評価の形式が、卒業研究の指導を評価する上で適切な質問項目かどうか、特に問われると思う。ここでは、学生は、シラバスの活用について低い評価をしている。つけようがないのであろう。学生自身が研究を進めるわけだから、シラバスに従ってという発想自体が理解できないのではないだろうか。授業者は常に計画を学生とともに作成し、修正することを繰り返して、研究を進めるように指導したが、そのようなことを評価する視点を持つことができないのがこの評価様式である。本授業では、学生たちはしっかりと学習に取り組み主体的に研究を進めた。しかも共同研究を成し遂げるという困難にも挑戦した。よい学習態度であり、成果も上がった。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業評価の様式にとらわれず、学生がやり遂げたと感じることができるような研究を成し遂げるように、対話を繰り返し、取り組んでいきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学文献講読Ⅱ	29名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

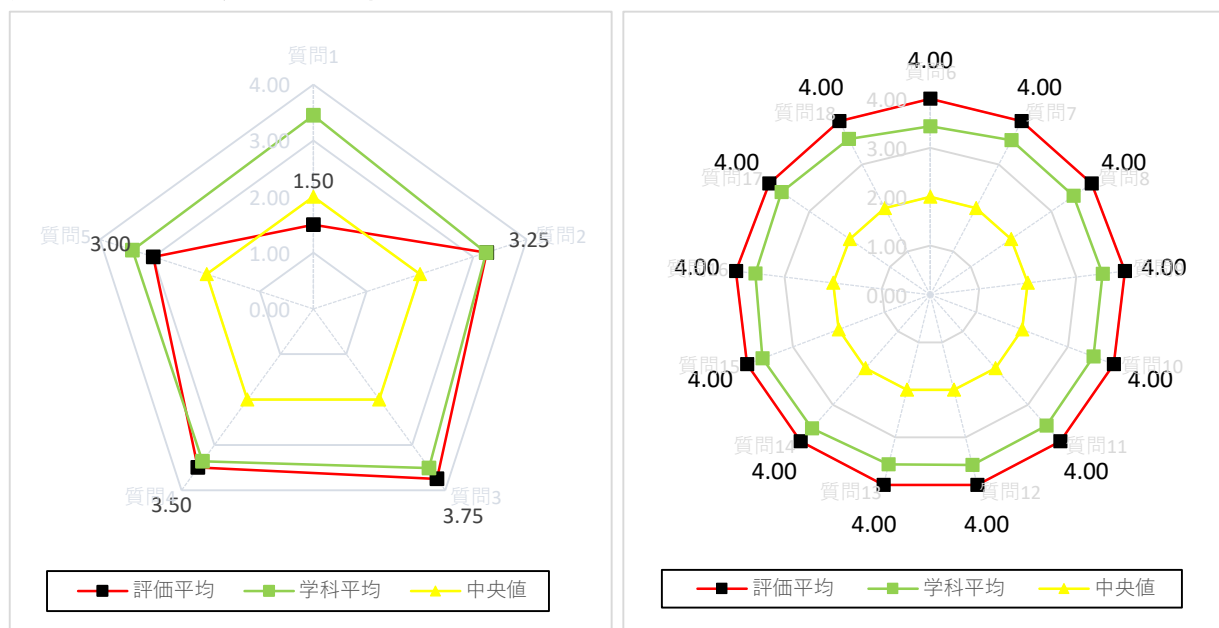
平均に比べて、総じてやや低い結果となった。おそらく、各学生が調べたことを個人別で発表する講義形式であることが大きな要因であると考えられる。それぞれの発表に関して、教員がコメントを述べるが、学生全員にコメントを求めるため、教員のコメントは時間が限られている。講義の大部分を学生の発表や質問、コメントに費やしてしまうからである。また、学生の発表する研究内容には、偏りがあることも珍しくない。そのため、興味のない学生にとっては、あまり入り込めない可能性もある。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、講義の性質上、学生が発表することには変えることはできない。しかし、評価の高い発表に関しては、Youtubeに挙げることを検討するなどして、学生の積極的な意欲関心を高めていくことを検討したい。また、学生同士で討論できる時間を設けるなどして、主体的に取り組む時間も設けたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

学生の自己評価においては、就職活動や体調等で欠席が複数回生じた学生が複数いたため質問1の回答に影響したと思われる。

教員の授業への評価はすべての項目で学科平均を上回っていた。

各回授業で学生の進捗状況を細かく確認し、次回までの課題を伝え、学生が取り組んだ事柄を評価、必要な場合添削するというような取り組みを1年間行ったことで、指導に対する高評価につながったと思われる。

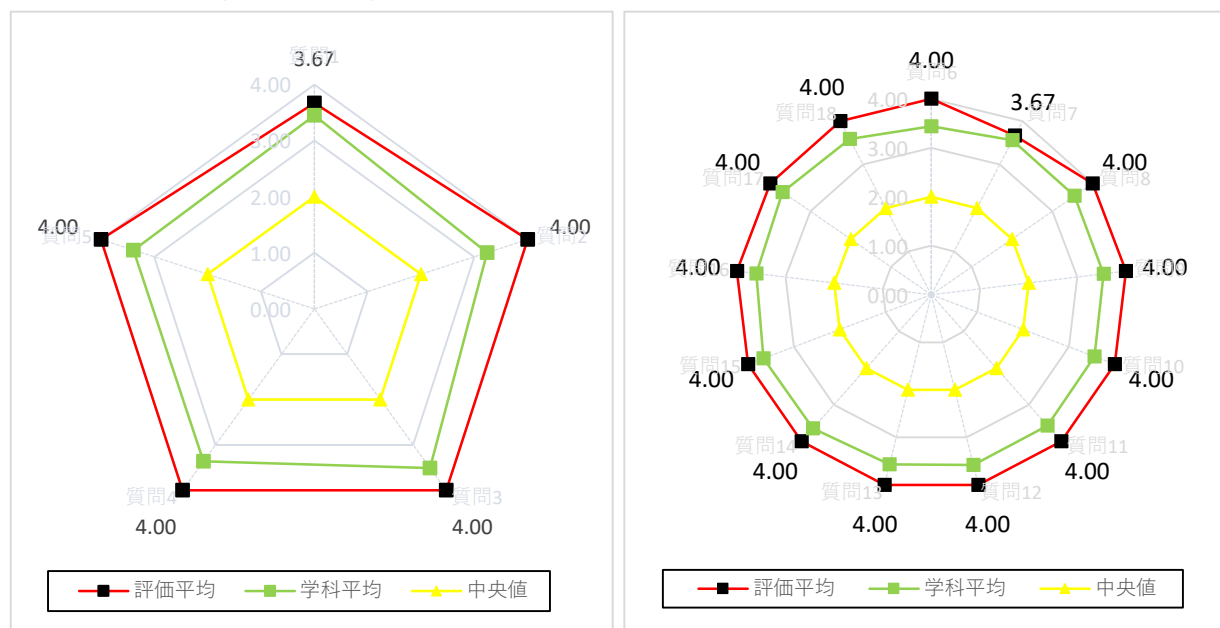
(3) 次年度に向けての取り組み

次年度以降も、各回授業で学生の進捗状況を細かく確認し、次回までの課題を伝え、学生が取り組んだ事柄を評価、必要な場合添削するというような取り組みを継続し、また学生への公平な対応も意識しながら指導を行っていきたいと考える。

一部学生の授業評価が得られなかったため、授業最終回などに十分に時間をとって評価を行う時間を作り、授業評価の回答率を上げていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

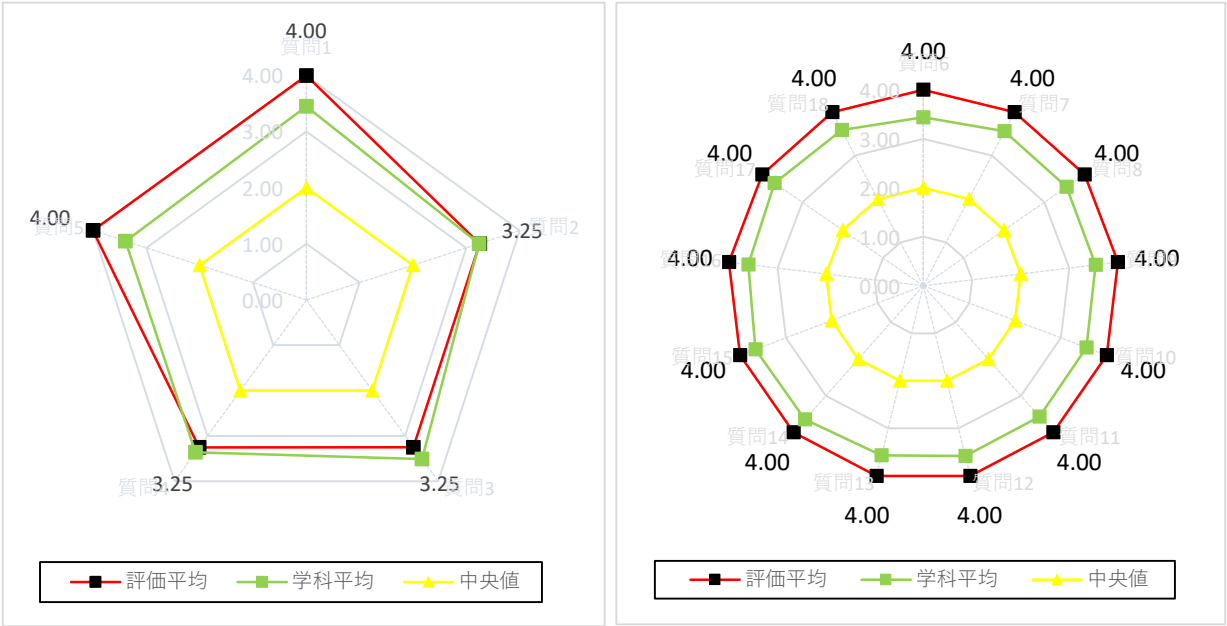
授業評価について質問7を除きすべてが「4.0」であった。また学生の自己評価についても質問1を除き、すべてが「4.0」であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業目的をより明確に解説し、学生に確認したうえで授業を展開するようにしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

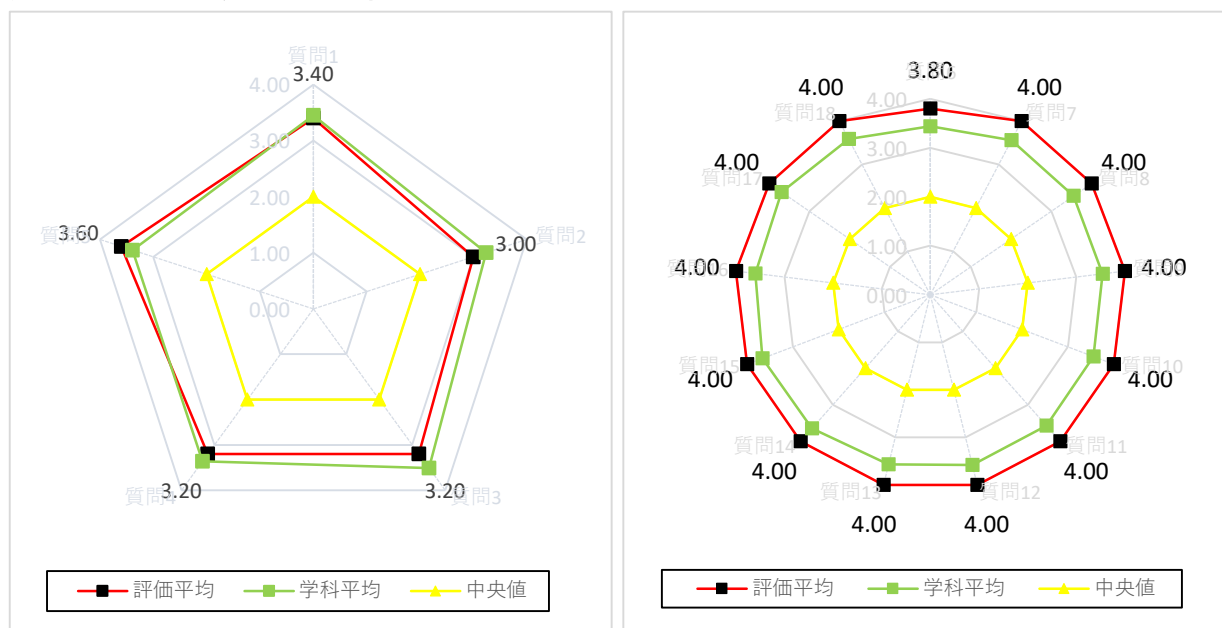
高評価であると捉える。今後も継続したい。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業評価は高評価であるが、卒論の内容は検討の余地がある。卒業論文の質を向上すべくより丁寧な指導にあたる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	5名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率 100% (5/5) 総合評価 3.79

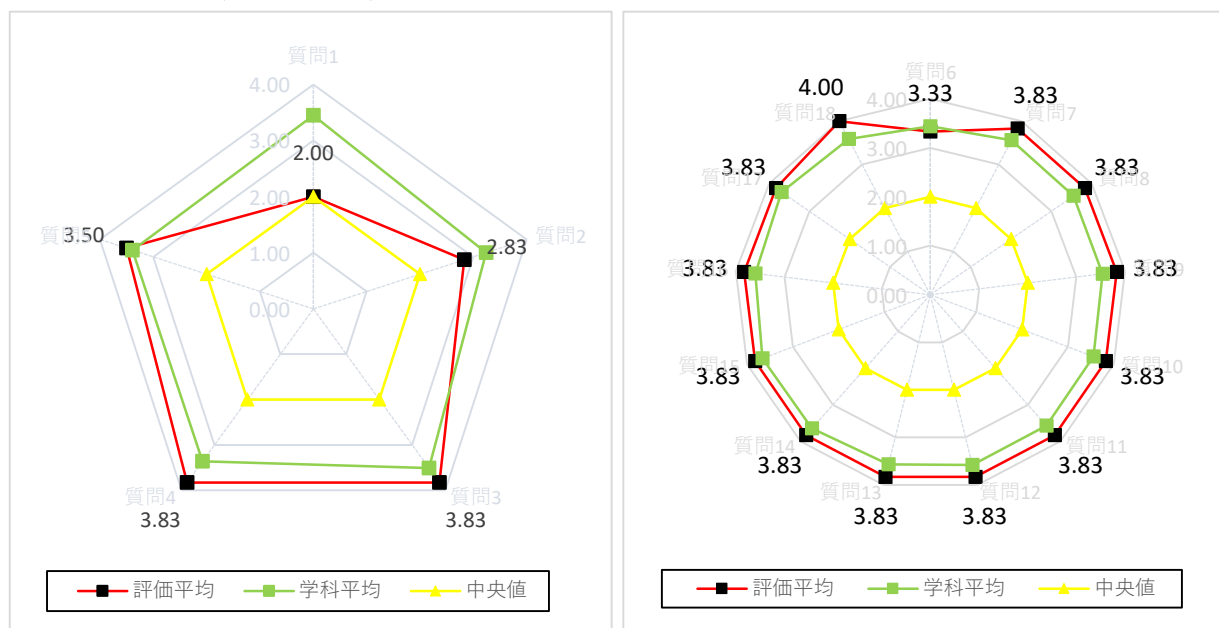
質問7～18の項目で4.0の評価を得た。一人ひとりの実態に応じた指導を行った結果と考えられる。
シラバスの活用に課題がある。

(3) 次年度に向けての取り組み

卒業研究（通年）のため、授業初回のみだけでなく、数回に渡ってシラバスや到達目標を伝える必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

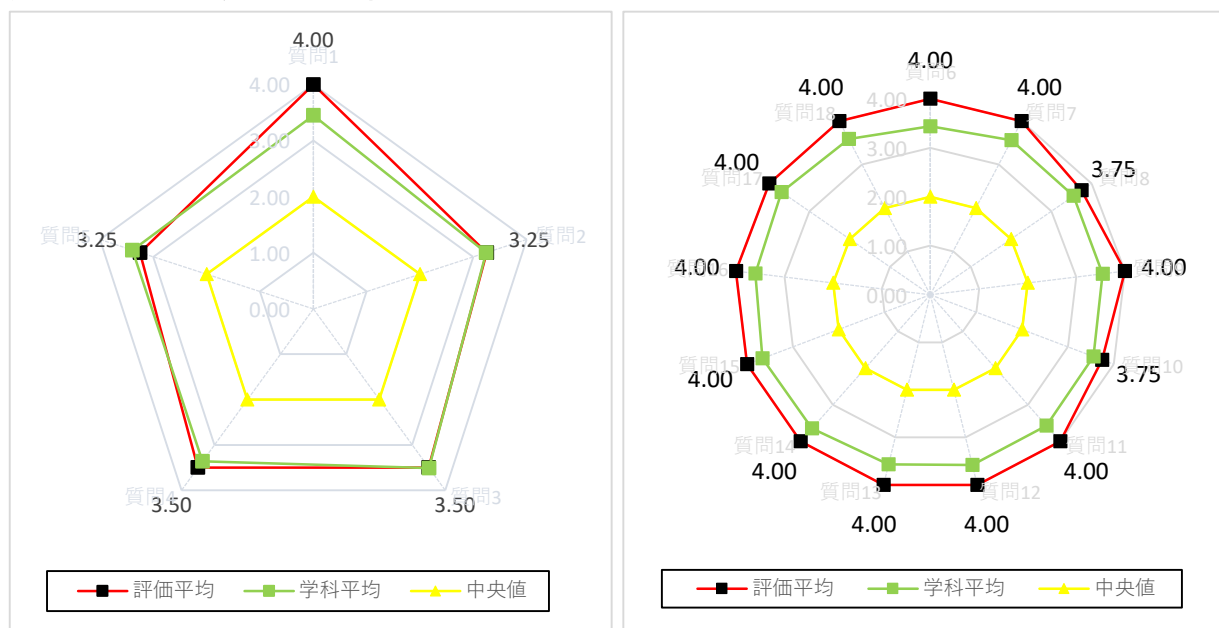
講義としては、全体的に高い評価を得ている。ひとまずは、高い評価として認識していきたい。しかしながら、質問6シラバス（授業計画）について説明がありましたか。の項目のみ、やや低い結果となっている。初回オリエンテーション時に説明しているが、情報量が多すぎたのかもしれない。就職活動のこと、卒業研究のことなどいろいろと多忙な時期であったことも要因かもしれない。

(3) 次年度に向けての取り組み

上記で述べたことと関連するが、次年度は質問6シラバス（授業計画）について説明がありましたか。について、丁寧に行っていきたい。全体的見通しを持てるように、出来るだけ丁寧にかつ、適切な情報量を選択しながら、学生に寄り添った形を求めている。まち、年度により学生の質は異なるため、学生の様子を見ながら、繰り返し説明することも必要であろう。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

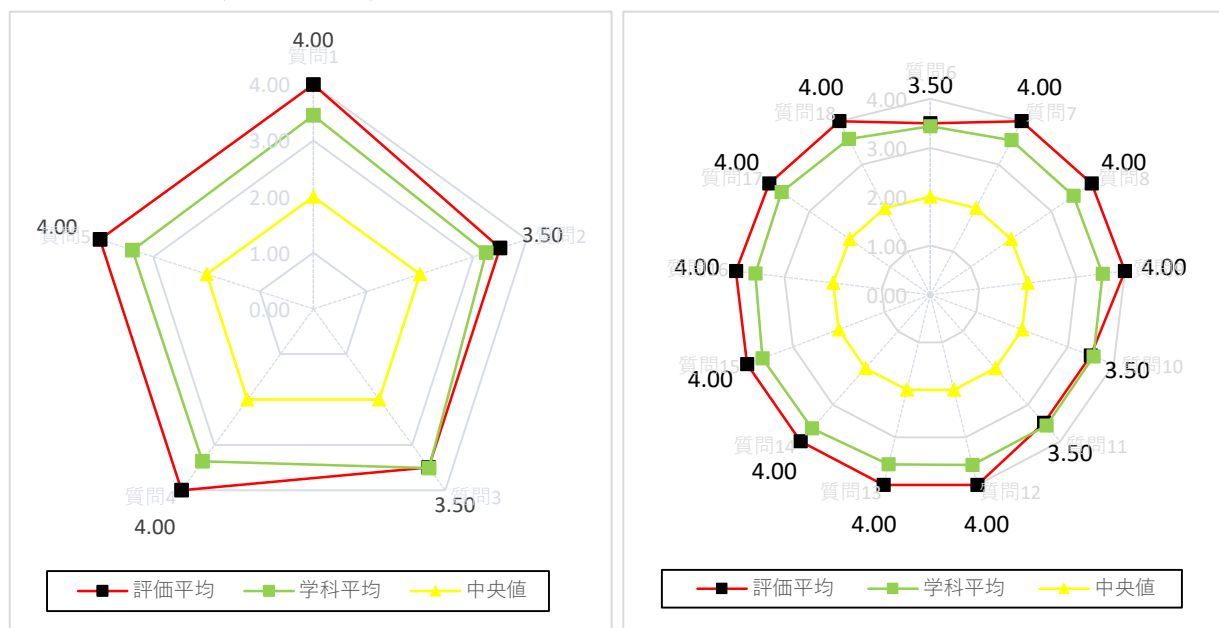
- ・評価はほぼ4点となっており、授業の充実度がうかがえる結果となっている。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・引き続き、各学生の卒業研究のテーマに沿い、各自が主体的な研究に取り組めるような環境づくりに努める。
- ・4年時に教育実習に赴く学生の研究スケジュールについて、早い段階で策定することにより、見通しを持った取り組みが行われるようにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

「子ども学」領域において、各分野・学問に応じた教育研究や学術研究等を遂行し、その結果を提出・報告することが求められている。本ゼミにおいては「子どもの環境と文化」に視点を置き、さまざまな角度からアプローチして疑問に思ったこと、もっと知りたいと思ったことなど、身近な内容で興味や関心をもった研究テーマを各自選択し、深めている。

集大成である「卒業論文」作成については、昨年度と異なり、本年度は新型コロナウイルス感染拡大も落ち着き、主に対面授業で行うことができた。しかしながらコロナ禍で身に着けたオンライン授業もうまく取り入れながら進めることもできた。ただ、例年はアンケート調査を夏休み前に行い余裕をもって分析・考察することができたが、昨年同様に積極的に進めるのが難しかった。その結果、7名の学生の取り組みの姿勢や進度に大きな個人差が見られた。結果としては何とか論文を完成し、発表まで行うことができたことは学生の努力によるものであった。

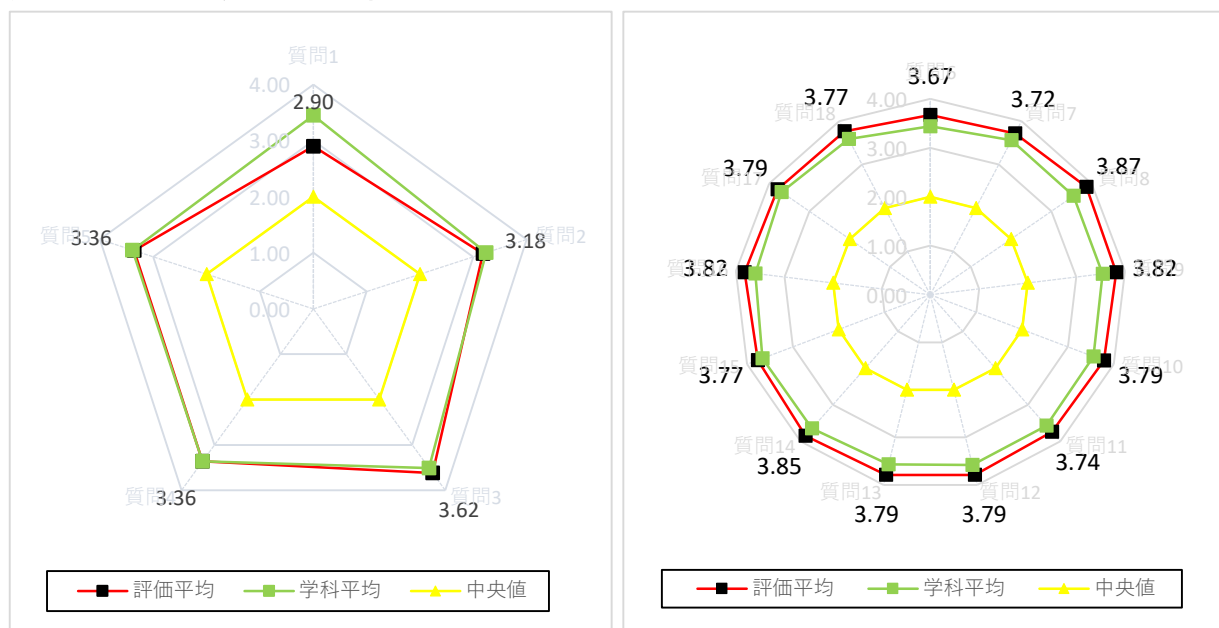
授業評価については、すべての項目について非常に高い評価を得ている。

(3) 次年度に向けての取り組み

令和5年度は、さらに新型コロナウイルスの感染拡大についてほぼ収束に向かうと考えられる。可能な限り対面授業しかも個別指導を中心に、オンライン授業も取り入れ工夫しながら行えるよう臨機応変な対応をしたい。3年生の段階からすでに仮のテーマを設定し、先行研究についてもある程度深め、ゼミ全体で中間的な発表も行っている。今後は、学生が自らの「卒業論文」に対して主体的に取り組み、無理のないスケジュールで完成に至ることができるようしっかりとサポートをしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カルチャーと心	42名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

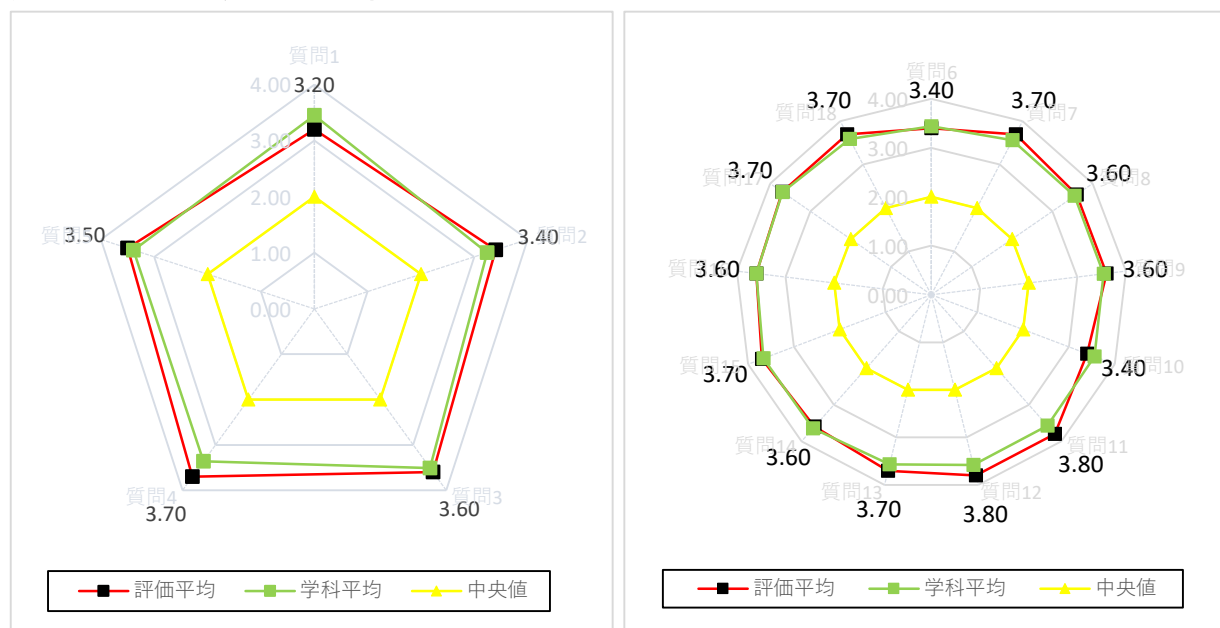
講義としては、全体的に高い評価を得ている。今年度はじめて担当した講義であり、ひとまずは、高い評価として認識していきたい。映像の更新や講義内容に関しても新しいものを取り入れて、講義を行っていききたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度に向けては、上記でも記載したように高い評価を維持していきたい。また、最新のアニメや映像（研究成果を含む）ものも取り入れながら、講義を行っていききたい。また、好評であった個別課題に関しても、引き続き行っていききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導 I	37名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

昨年度までと異なり、本年度は新型コロナウイルス感染拡大も落ち着き、すべて対面授業での指導が可能であった。実習指導については遠隔授業では伝えきれない部分も多いので、対面授業ができたことは非常に有意義であった。

初めての外部実習である施設・保育所実習に向けて、実習の意義・目的・心構えを学習するとともに、対象となる子どもや利用者の年齢や状況に応じた保育・支援、また指導計画・支援計画立案等さまざまな内容を習得できる指導を行うよう心がけた。特に学生にとっては、経験のない未満児や障がいをもつ利用者についての理解が非常に難しいため、視聴覚教材等を適切に使用したり、保育現場の保育者や指導員を招へいし、具体的な指導を盛り込むなどの工夫をしている。

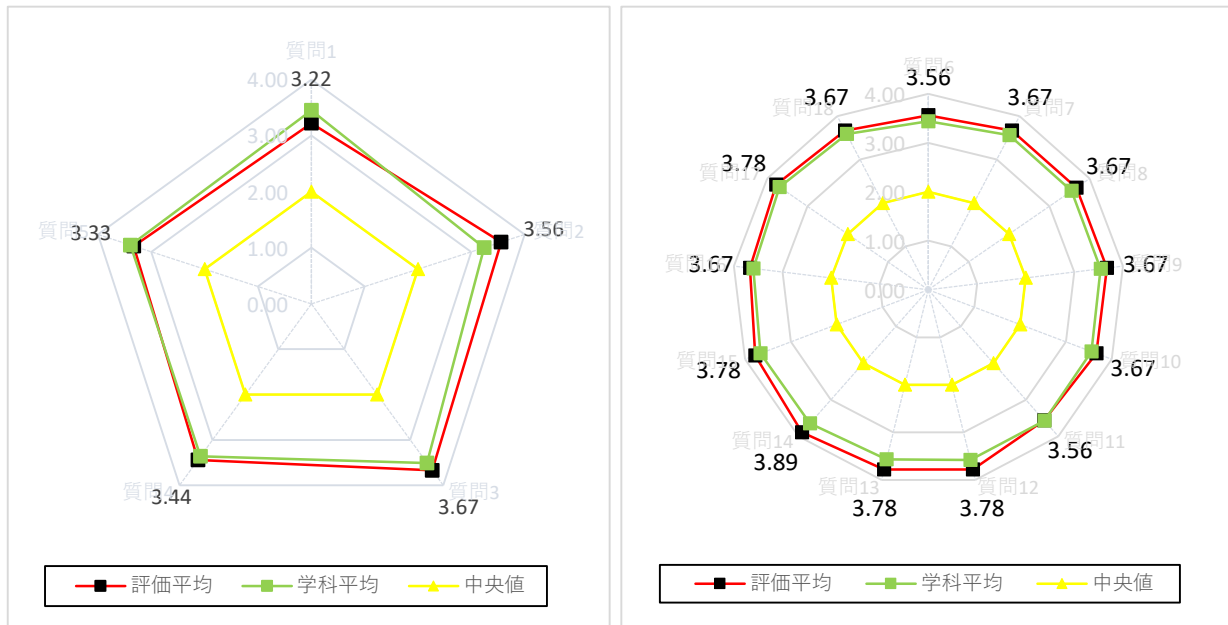
授業評価については一定以上の高い評価を得ている。学生も不安を抱えながらではあったが、より以上に真剣に取り組むことが高い授業評価につながっていると考ええる。

(3) 次年度に向けての取り組み

令和5年度は、より新型コロナウイルス感染拡大については落ち着き、収束に向かうと考えられる。実習担当者として臨機応変に対応できるよう心がけたい。学生が日頃あまり経験のない未満児や障がいをもつ利用者についてしっかりと理解した上で実習に臨めるような工夫が必要である。また、記録や指導計画・支援計画等の書き物については、書くことが苦手な学生も多くいるため、「書く」というたくさんの経験ができるように視聴覚教材等の適切な使用も含め、工夫して授業を進めていきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育	67名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

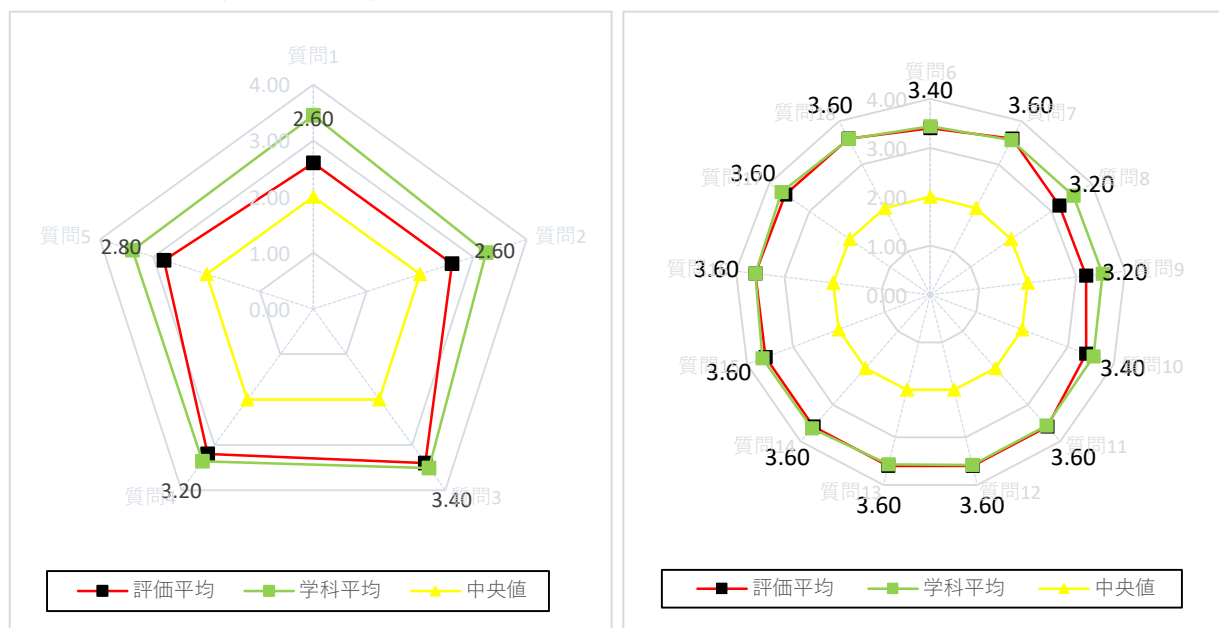
高評価であると捉える。今後も継続したい。

(3) 次年度に向けての取り組み

実技中心の科目であるため、怪我等にはいっそう注意して指導を行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナール I	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

全体のガイダンスにてシラバスの説明はされていたが、「シラバスの活用の低さ」「シラバスの説明に関する低さ」の結果から、ゼミ単位においても毎回の講義の冒頭でシラバスと関連付けながら繰り返し、説明する必要があると考えた。

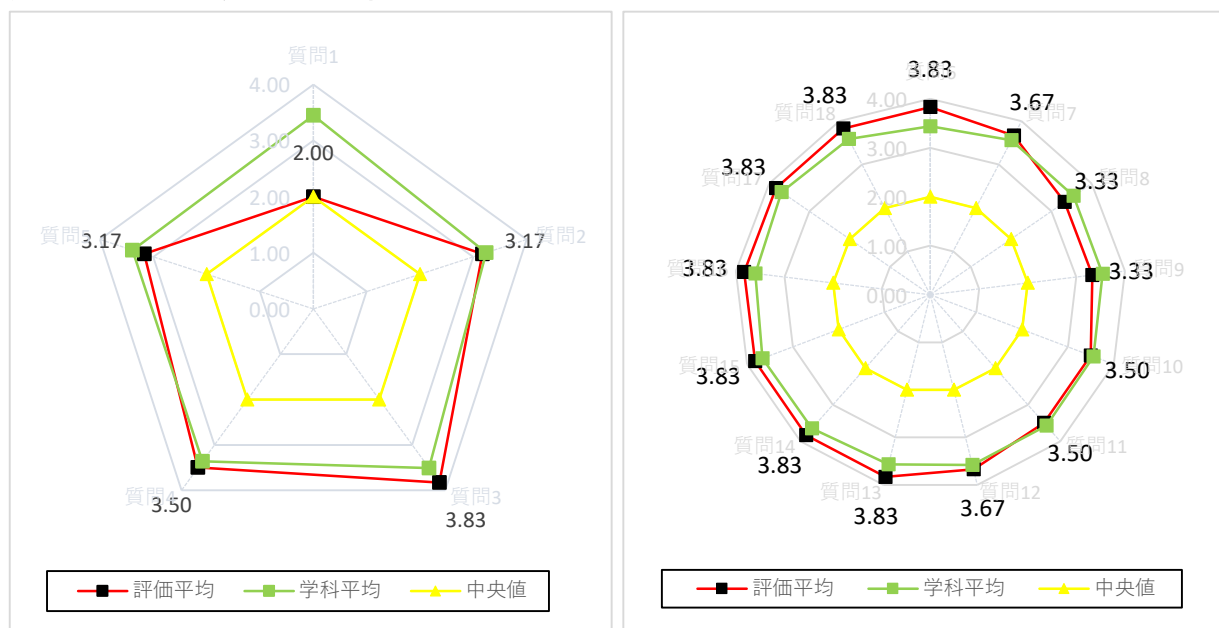
また、「興味・関心が持てる工夫」「わかりやすくする工夫」が相対的に低いことから、先述した説明を加え学習の意欲を高めていくとともに、取り組む内容をより分かりやすく伝えていく工夫も必要であると考えた。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・ゼミ単位においても、講義（ゼミ）の冒頭でシラバスと連動づけながら説明をおこなう。
- ・学習意欲を高める工夫（なぜ、このテーマに取り組むのか、それが今後の何に繋がるのか…等、分かりやすく伝える工夫をおこなう）
- ・学習意欲が低下している受講生（欠席が目立つ、提出物が出せない学生等）については、個別に丁寧に指導していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理専門ゼミナール	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

2名を除く回答を得た。授業最終回の個別指導の待ち時間に学生に回答を促したことで一定数の評価を得たと思われる。

教員に対する評価については多くの項目で学科平均を上回り、双方向性や公平性、速やかな連絡などに留意しながら指導を行ったことが結果に反映していると考えられる。質問8、9については、学生の取り組んだ課題への添削指導が中心だったことが評価に関係していると思われる。提出した課題や発表の際などに適切なフィードバックを行うことを意識して指導を行ったことも評価につながったと考えられる。

前期前半は研究論文を書くにあたってのアカデミックライティングの復習や研究の留意点について文献購読を行った後、前期後半から後期は学生が自分の関心あるテーマについてレポートや発表資料をまとめ発表するという授業を主軸に行った。学生自身の主体的取り組みが求められる授業であったことが質問3に影響したと思われるが、複数回欠席した学生が多かったことが質問1に影響したと思われる。

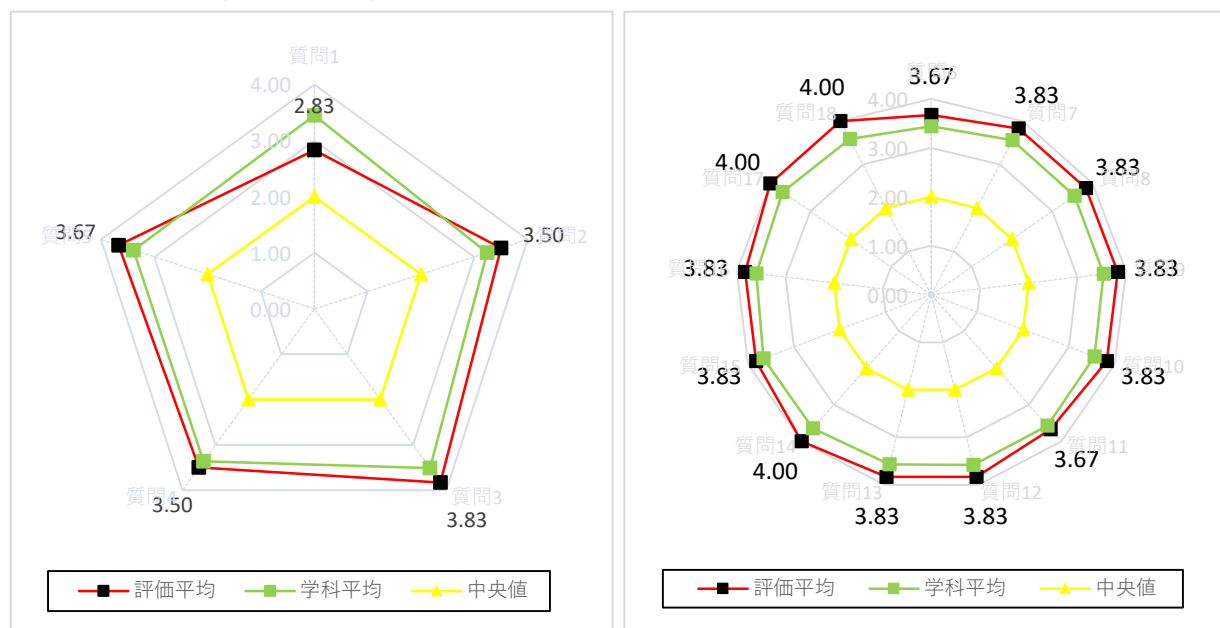
(3) 次年度に向けての取り組み

授業最終回の個別指導の待ち時間に学生に回答を促したことで一定数の評価を得たため、次年度以降も授業最終回到授業評価に取り組む時間を確保することを意識したい。

次年度も今年度同様に双方向性や公平性、速やかな連絡などに留意しながら指導を行っていきたい。また、集団指導と個別指導のバランスを取りながら、効果的な指導を行うことを意識したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理専門ゼミナール	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

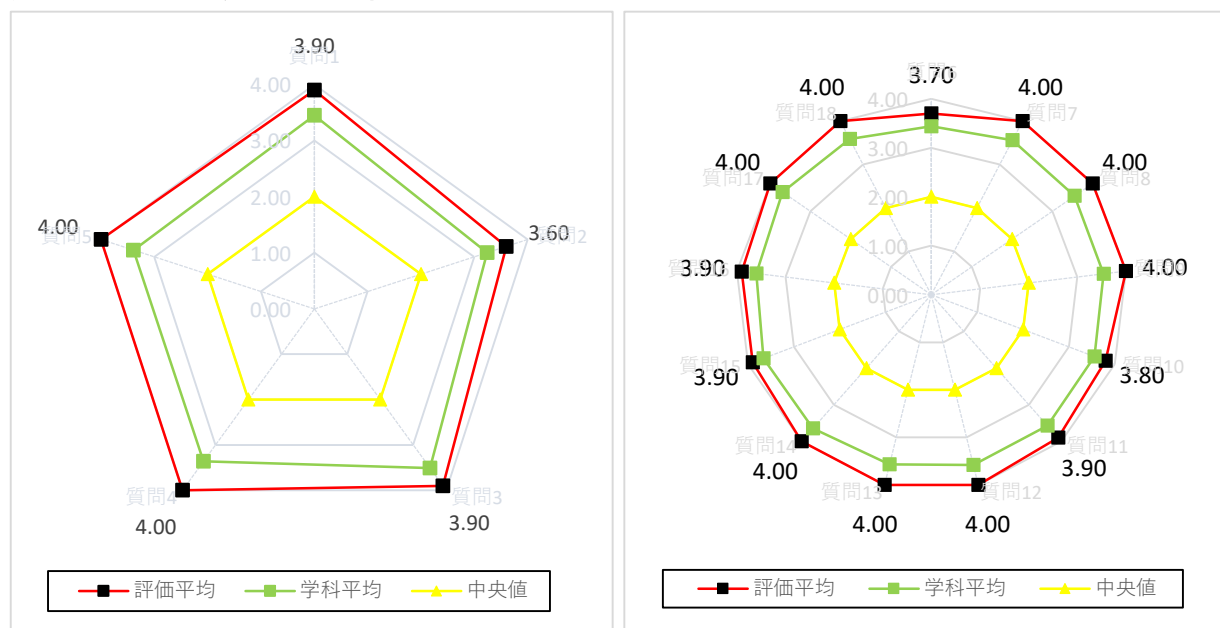
講義としては、全体的に高い評価を得ている。今年度はじめて担当した講義であり、ひとまずは、高い評価として認識していきたい。講義内容に関しては、研究内容に関しても新しいものを取り入れて、講義を行っていききたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度に向けては、上記でも記載したように高い評価を維持していきたい。また、最新の情報（研究成果を含む）ものも取り入れながら、講義を行っていききたい。また、好評であった夏休みのゼミ活動（学童保育へのボランティア活動）に関しても、引き続き行っていききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅱ（保育所）	29名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

保育実習Ⅱでは、保育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各保育所の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観や倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。

本年度は昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、実習を断られるケースは少なかったもののPCR検査やワクチン接種を条件とする受け入れが多かった。また、受け入れ先の保育所でコロナ感染者が発生し、実習時期が大きく変更されるケースも散見された。しかしながら、実習を希望する学生の全員が実習を終了することができた。学生にとっても不安を感じながらの実習であったが、実習をさせていただけに感謝の気持ちが大きく、その気持ちをもって行動することができた。この評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価をしたものであるが、質問内容が実習そのものにはあまりそぐわない内容ではあるものの、おおむね一定以上の評価をしている。

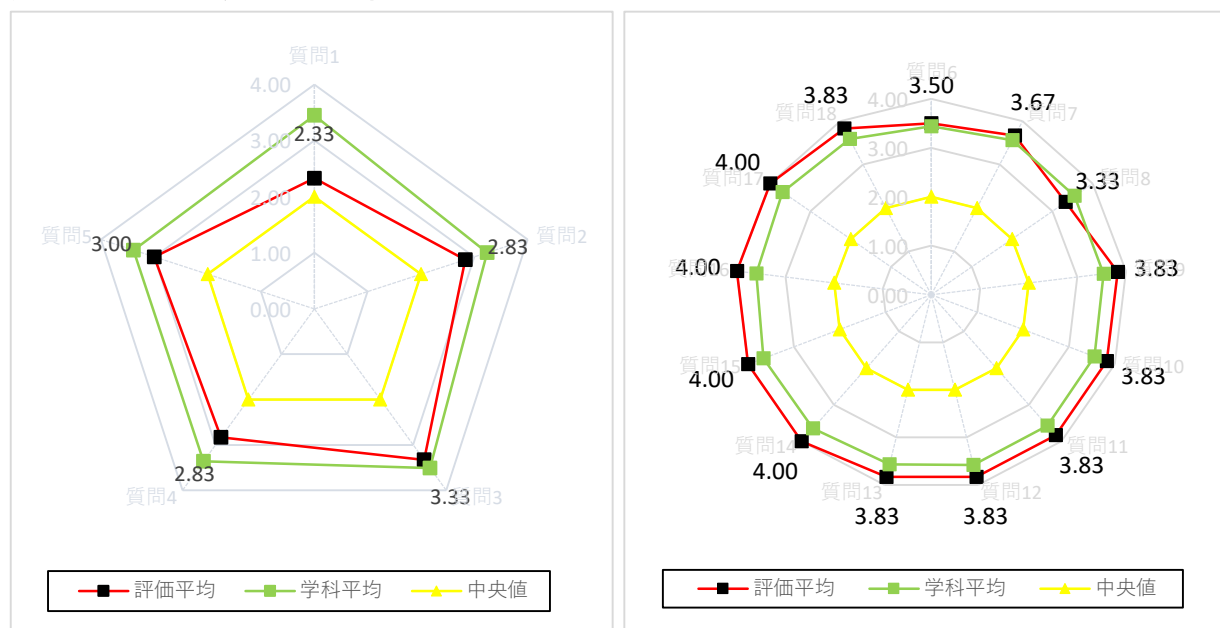
（３）次年度に向けての取り組み

令和5年度については、新型コロナウイルスの状況も落ち着き、収束に向かうと考えられる。しかしながら対象児には未満児もいるため、今まで以上に学生にも配慮するよう指導する必要がある。実習担当者として臨機応変に対応できるよう心がけたい。保育実習Ⅱは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定めるうえでも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解やその実践についての学習、さらには、さまざまな社会資源との連携の実践などについても学習することが求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、令和5年度は実習園ともさらに連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立して行けるよう、サポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナール I	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本講義はゼミ指導・個人指導と学科全体での授業形式とが混在しており、ゼミ指導においても各教員の指導体制が揃うよう、事前に調整を行って授業が行われた。評価として、学科平均を上回る評価を得た項目が多かった。

ゼミ指導で使用した教材はアカデミック・スキルの向上を目指すものであったが、卒業論文とのつながりなどモチベーションを上げる言葉かけなどを意識した。

学生自身のセルフマネジメント能力を高めるための取組みとその指導や、学生自らの興味関心がある文献の収集や分析等を行う課題など、学生の主体的な取り組みとそれに対する個別指導を行う授業内容が主であり、主体的にテーマを追う学生とテーマ設定に悩んだ学生との差があったと思われ、その影響が、学生の自己評価等が平均を下回ったことにつながったと考えられる。

授業評価回答数は、最終回での評価を求めたことで、欠席者以外からは回答が得られたため、次年度以降も最終回に評価のための十分な時間をとれるよう授業計画を行っていききたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度同様授業担当するすべての教員で授業内容や教授方法などについて十分話し合いコンセンサスを得る時間をとることで、より分かりやすい授業構成につなげたい。また、より適切な教材の検討や実施内容の時期の検討などさらなる工夫を行えるよう準備していききたい。

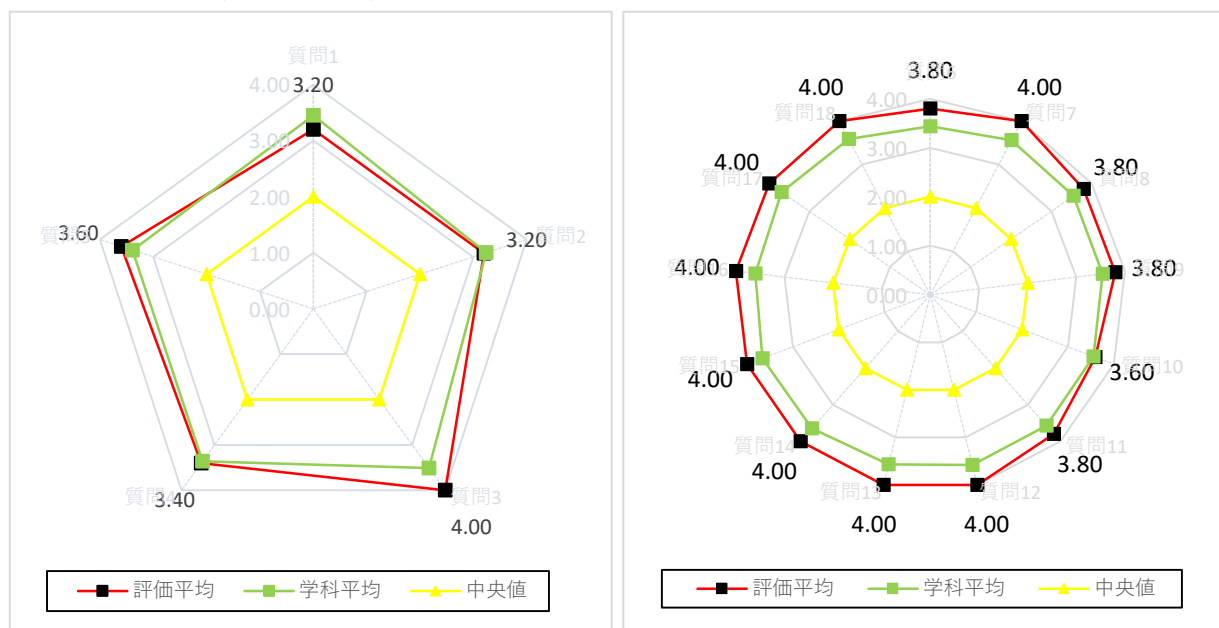
ゼミ指導内では、上記にも述べたように、個別ゼミ指導で使用した教材が卒業論文に向けてどのように関連するかなどを見通しを詳細に伝えることで、課題に取り組むモチベーションを上げるよう工夫したい。

対面授業・遠隔授業どちらにおいても、資料提示の工夫や全体指導・個別指導、授業外課題などをバランスよく行うことで学生の学修の向上につなげたいと考える。

授業評価回答数は、最終回での評価を求めたことで、欠席者以外からは回答が得られたため、次年度以降も最終回に評価のための十分な時間をとれるよう授業計画を行っていききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナール I	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

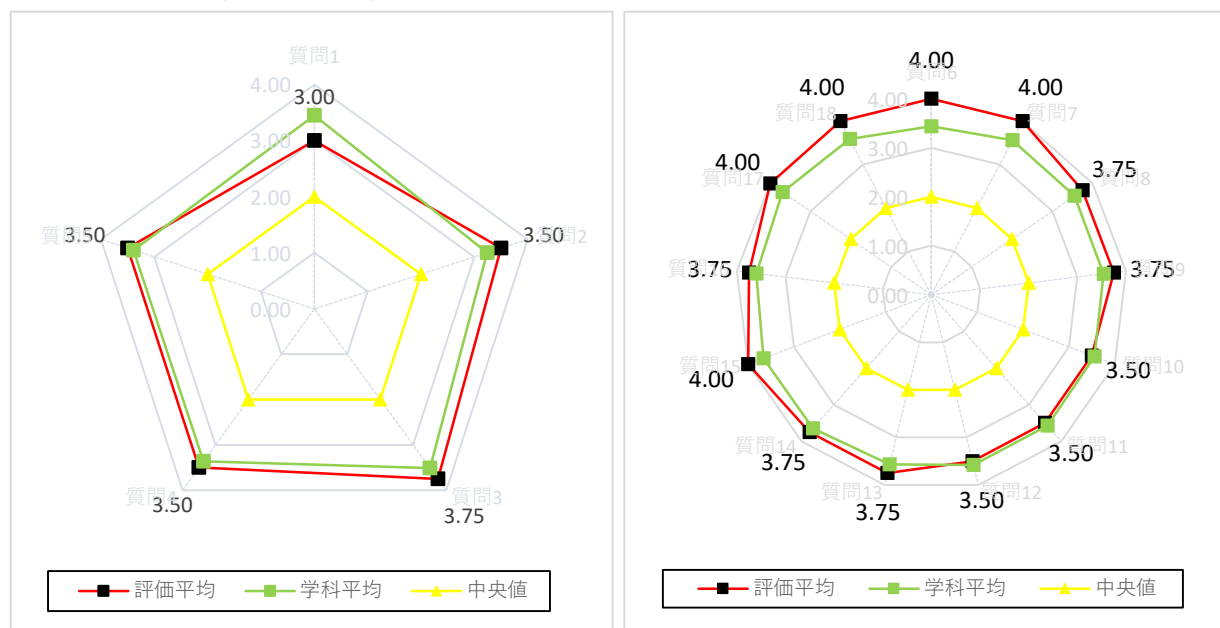
質問1, 2以外、すべてにおいて学科平均より高い水準となっている。特に、質問16に関しては、レポート課題などの取り組みもあり、学生と教員との双方向のやりとりを行いながら、学生がレポート課題に実直に取り組むように指導をしたことが影響したと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生自身が自分で課題を見つけ、レポート課題などに取り組むなど、学生の学習への興味関心が広がるように指導を継続していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナール I	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

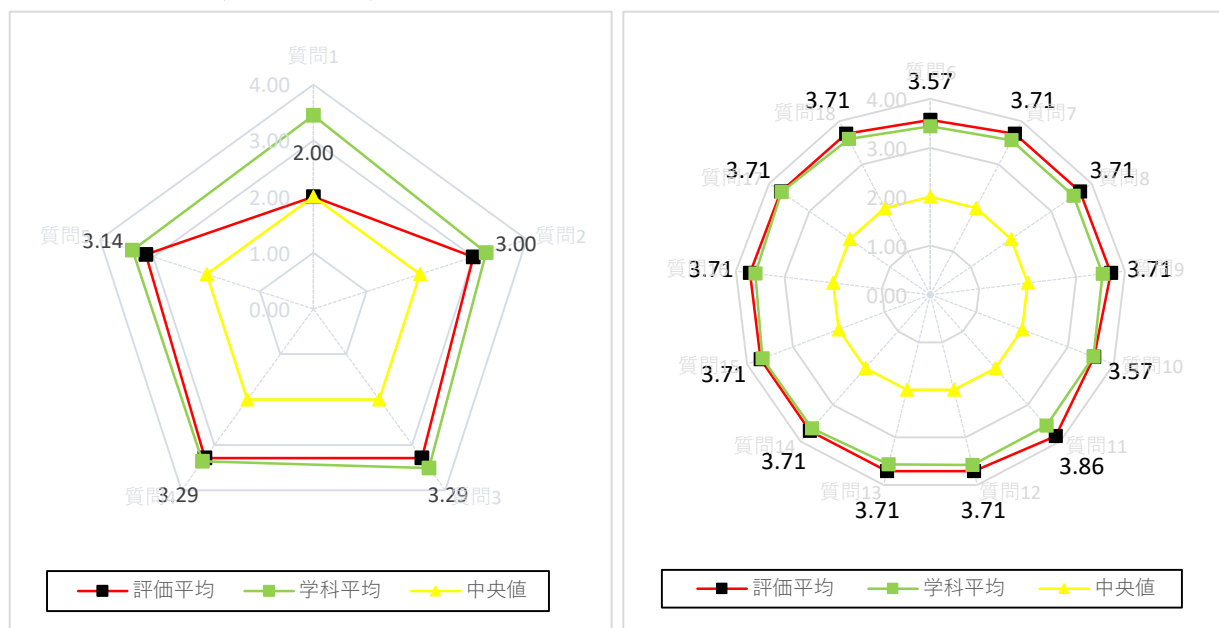
講義としては、全体的に高い評価を得ている。今年度はじめて担当した講義であり、ひとまずは、高い評価として認識していきたい。一部オムニバスで行われる講義形態であるため、すべての評価を受け入れることは難しいかもしれない。いくつか学科平均点より低いため、留意する箇所はある。

(3) 次年度に向けての取り組み

質問10 視聴覚機器や板書の使い方は適切でしたか。質問11 教科書・配布資料等は役に立ちましたか。質問12 声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか。の3つの質問に関しては、学科平均点より下回っている。上記と同様であるが、オムニバス形式の講義でもあるため、一人の改善でどれだけの変化が期待できるのか、不明な点はある。しかしながら、3つの点に関しては留意して行うことは可能であるため、実施したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

前期の「セルフマネジメントゼミナールⅠ」よりは、全体的な評価は高かったが、欠席が目立つ学生が多かった。

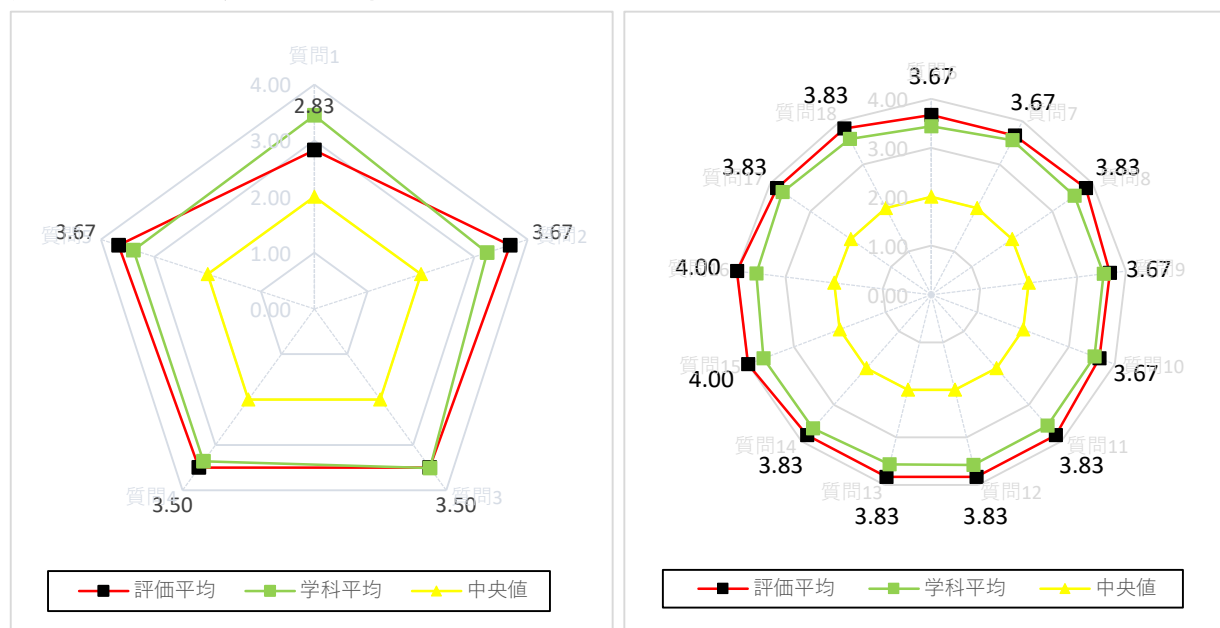
前期と比べると後期は、個々で取り組む内容が多く、それぞれのペースもさまざまである。一人ひとりの進捗状況に目を向け、学習意欲が持続する関わりや指導が必要であるとする。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・ 個々の研究（課題）指導を、より丁寧に行う必要がある。
ゼミ生一人ひとりの進捗状況を把握し、個々に応じた指導や関わりをしていく中で、目的意識をもって主体的に課題に取り組める意欲（モチベーション）をつくっていく工夫が必要。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

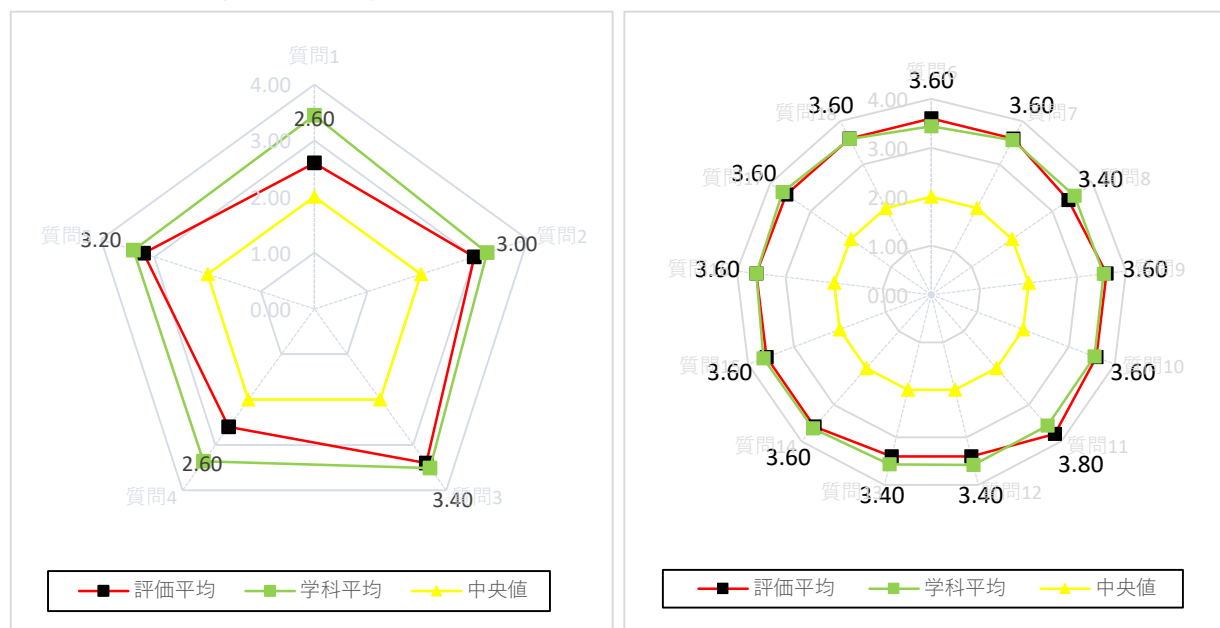
後期では、コロナなど感染症による欠席が目立ったことが、質問1に大きく影響していると考えられる。ゼミその他、全てにおいて学科平均より高い水準になっている。後期では、レポートに取り組むことが大きな課題となっており、個人の興味関心、かつ、個人のペース、に沿って指導を進めたことが高い評価に影響していると考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

後期では、レポート課題への取り組むことがメインとなるため、学生の興味関心をレポート課題に活かせるよう、文献・図書などの検索の仕方などを適切に指導していく必要があると思われる。また、興味・関心が広がるような助言を行い、学生の能動的な学習の取り組みを支えていくことが大切だと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本講義はゼミ指導・個人指導と学科全体での授業形式とが混在しており、ゼミ指導においても各教員の指導体制が揃うよう、事前に調整を行って授業が行われた。後期は、学生が自らの興味があるテーマについてのレポートのまとめや発表を行うための指導の時間と全体でのキャリアプランニングのための授業とが大きな柱であり、各学生の主体的な取り組みを求めることが多かったため、学生による取り組みの差が学生の自己評価に影響したと考えられる。一方で、教員が授業教材等を準備して行うような授業ではなかったため、教員に対する評価としては、一部回答しづらい項目もあったと思われる。

質問12については、情報伝達の際に時間の関係上早口になるような場面もあったため、伝達事項については十分な時間の余裕をもって行うよう心掛けたい。

授業評価回答数は、最終回に評価時間を設けた。今後も授業最終回に十分な時間をとって授業評価に取り組めるよう、計画を立てていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度同様授業担当するすべての教員で授業内容や教授方法などについて十分話し合いコンセンサスを得る時間をとることで、より分かりやすい授業構成につなげたい。また、学生のためになる、より適切な教材の検討などさらなる内容の工夫を行えるよう準備を行っていききたい。

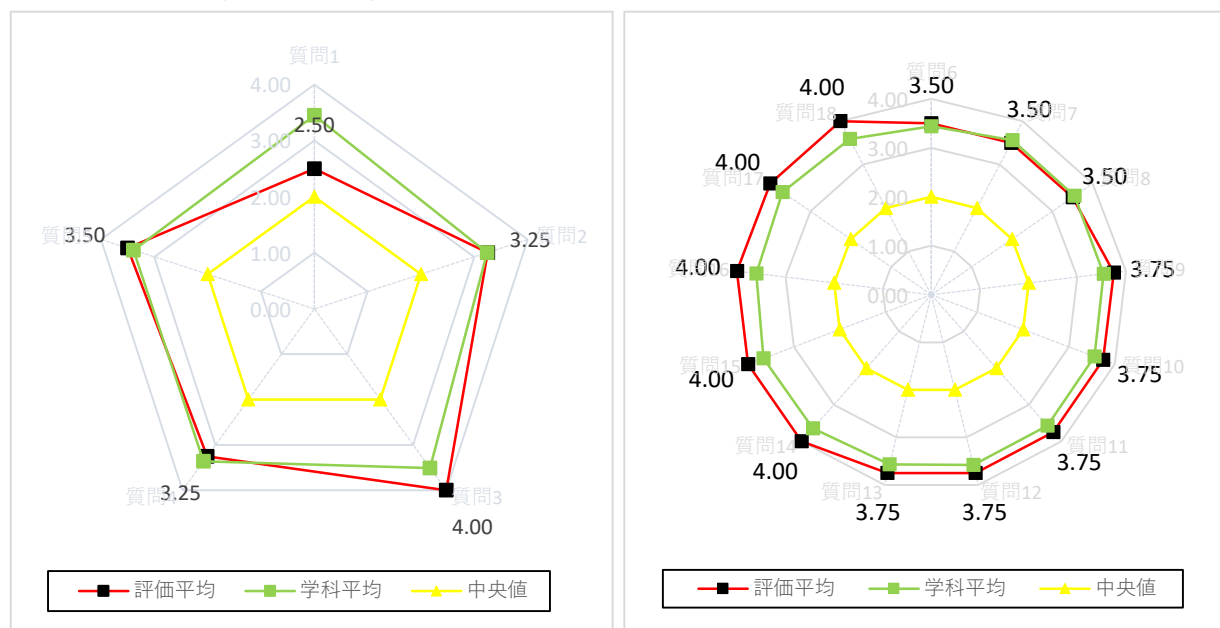
ゼミ指導内では、上記にも述べたように、個別ゼミ指導で使用した教材が卒業論文に向けてどのように関連するかなどの見通しを詳細に伝えることで、課題に取り組むモチベーションを上げるよう工夫したい。

対面授業による個別指導を細やかに行うことができたが、学生の取り組み状況に影響される部分もあったため、モチベーションを高めるような働きかけを行って生きたい。資料提示の工夫や全体指導・個別指導、授業外課題などをバランスよく行うことで学生の学修の向上につなげたいと考える。

授業評価回答数は、最終回での評価を求めたことで、比較的回答数を確保できたため、次年度以降も最終回に評価のための十分な時間をとれるよう授業計画を行っていききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

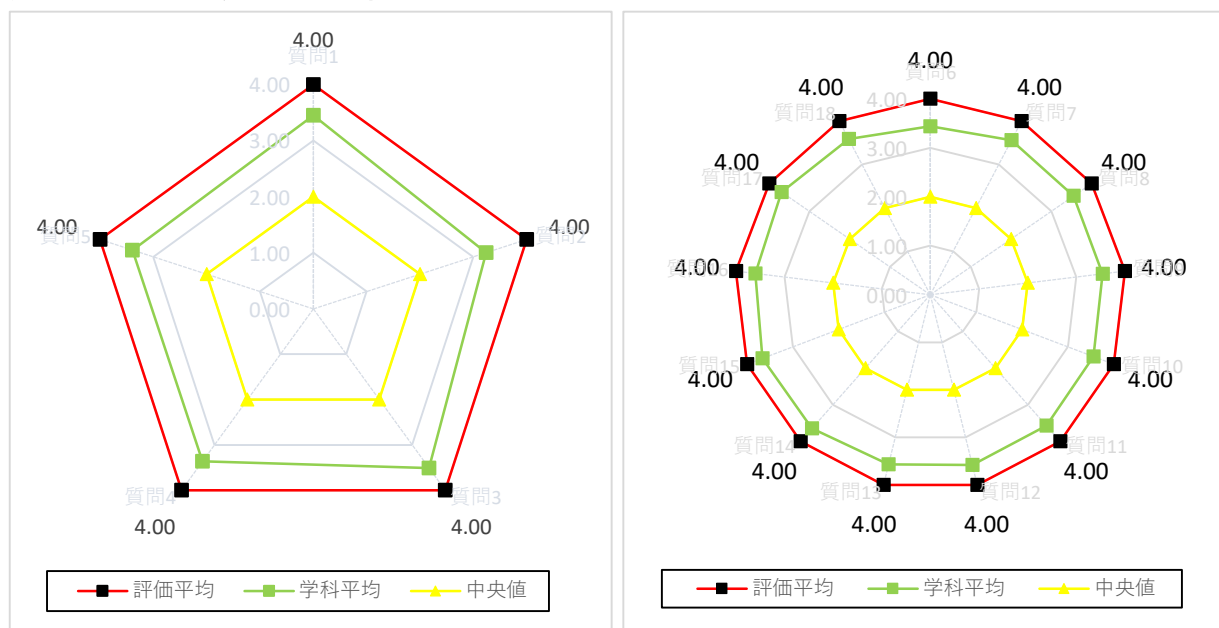
講義としては、全体的に高い評価を得ている。今年度はじめて担当した講義であり、ひとまずは、高い評価として認識していきたい。一部オムニバスで行われる講義形態であるため、すべての評価を受け入れることは難しいかもしれない。いくつか学科平均点より低いため、留意する箇所はある。

(3) 次年度に向けての取り組み

質問7教員は授業の到達目標を明確にして、授業を展開していましたか。質問8授業は興味・関心が持てる工夫がされていたか。上記の2つの項目に関しては、やや平均点より低い結果となった。後期は、各学生が研究内容に関して、調べ、まとめて発表する形式であった。そのことを今まで以上に明確にすべきであったかもしれない。また、具体例などを提示して、興味関心を抱きやすく工夫することも検討していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅲ	3名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育実習指導Ⅲについては、対象となる学生が3名と少ないため、ゼミ形式で授業を進めている。

本年度は新型コロナウイルス感染状況も落ち着き、対面授業で行うことができた。それによって遠隔授業では伝えきれない細かい部分も十分に伝えることができた。実習先施設の種別としては、今回の受講生の実習先はいずれもこども発達支援センターであった。そこで、特にこども発達支援センターを中心に、その他の種別についても学べるよう配慮して進めた。

授業評価については、自らの学びについての評価も授業についての評価も高い。

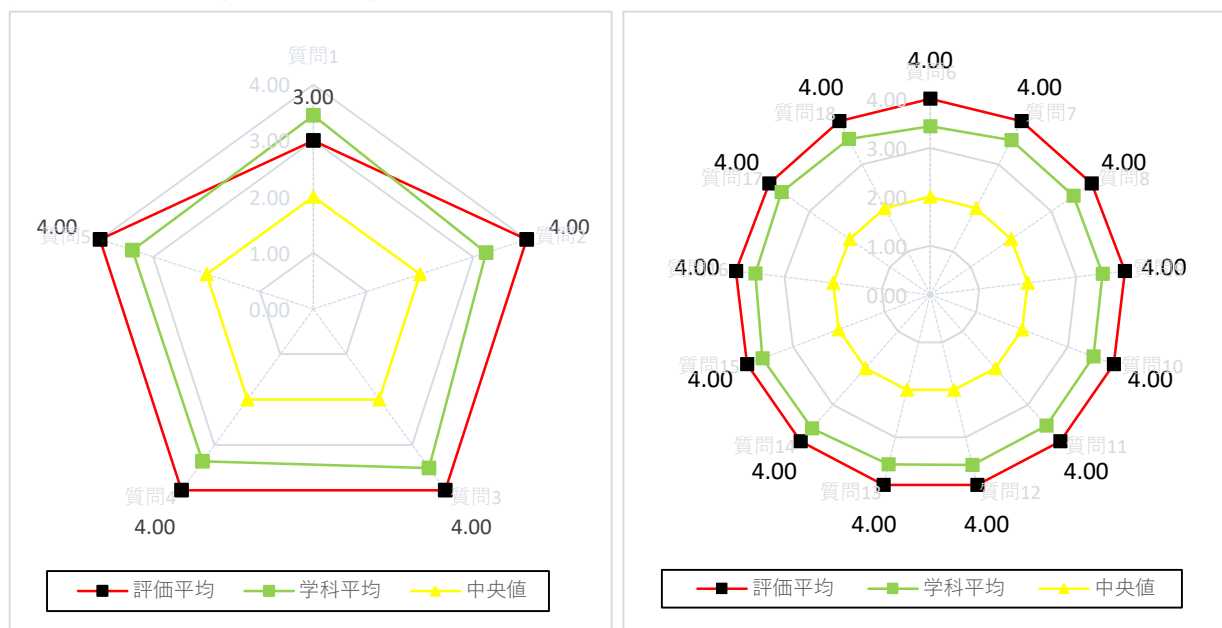
(3) 次年度に向けての取り組み

令和5年度は、さらに新型コロナウイルス感染状況も落ち着き、収束に向かうと考えられる。対象学生は例年に比べるとやや多く8名である。しかしながら基本的にはゼミ形式で進めるとともに、一人ひとりの学生の学びを受講者で共有できるようアクティブラーニングの形で進めていきたいと考える。

そのためには、学生それぞれが実習に臨むうえで事前に調べたことや、実習後に学んだことを報告する機会を設けて、学生間で双方向的に学習できるような環境を整える必要がある。また、教員もその環境の中に存在することによって適切な指導やサポートができるよう努力したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅲ（施設）	3名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

保育実習Ⅲでは、保育実習Ⅰ（施設）における経験と自らの課題を踏まえ、各施設の特性や一人ひとりの利用者の実態、保護者の状況、各社会資源との連携等について理解し、利用者に対する適切な支援を行うことが目標になっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観・倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。

本年度は昨年度と同様に、新型コロナウイルス感染拡大防止のため時期の変更やPCR検査、ワクチン接種を求められることに対してなど臨機応変な対応が必要であった。そのような中であったが、学生は感謝して実習に臨むという気持ちが強く、授業評価が高いことにつながっていると考えられる。

仕上げの実習として、大学において振り返りを行い、課題や問題点を解決し、社会に出ていけるよう各自が努力していくこと、さらには教員としてそれをサポートしていくことが必要であると考えられる。

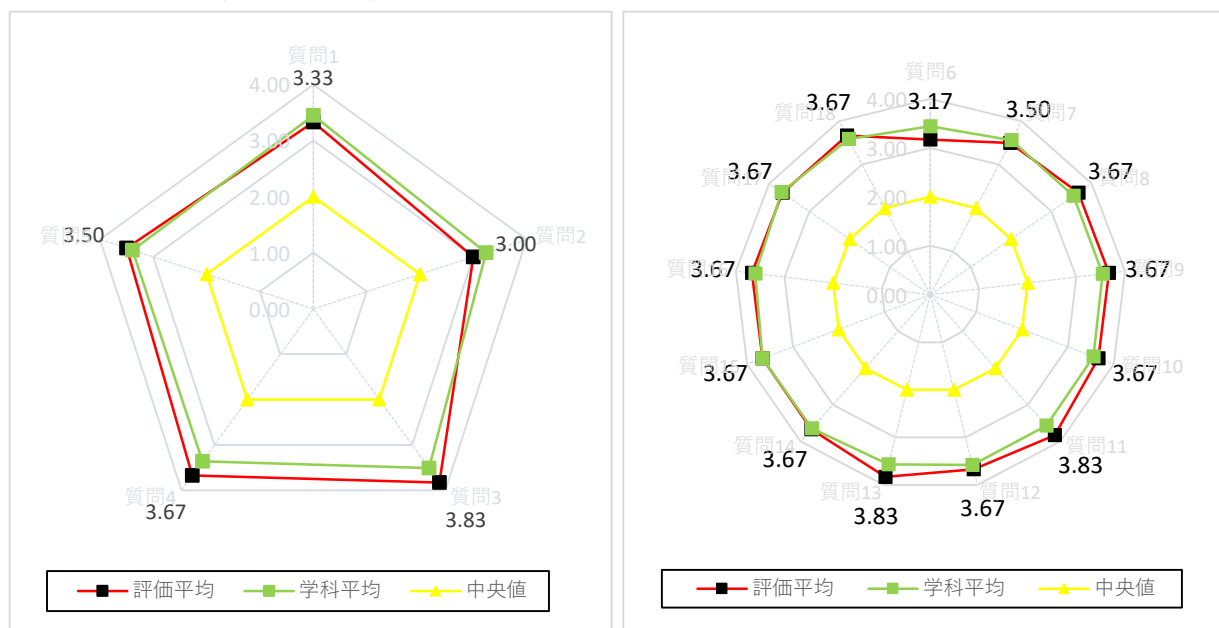
（３）次年度に向けての取り組み

令和5年度は、新型コロナウイルス感染拡大の状況も落ち着き、収束に向かうと考えられる。実習担当者として臨機応変に対応できるよう心がけたい。保育実習Ⅲは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定める上でも非常に重要な実習であると言える。特に支援を必要とする利用者に対する個別支援や地域社会における支援の現状、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、令和5年度もなお一層実習施設とも連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立していけるようサポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習Ⅱ	47名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

幼稚園教育実習Ⅱでは、幼稚園教育実習Ⅰにおける経験と自らの課題を踏まえ、各幼稚園の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての幼稚園教諭の役割や職務内容を理解し、自らの保育観や倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。

昨年度に引き続き、コロナ禍における実習はさまざまな制限があり、求められることも多い。

この授業評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価したものであるが、質問内容が実習そのものにはあまりそぐわない内容となっている。しかしながら、一定以上の高い評価をしており、この経験が学生にすばらしい影響を与えていると考えられる。

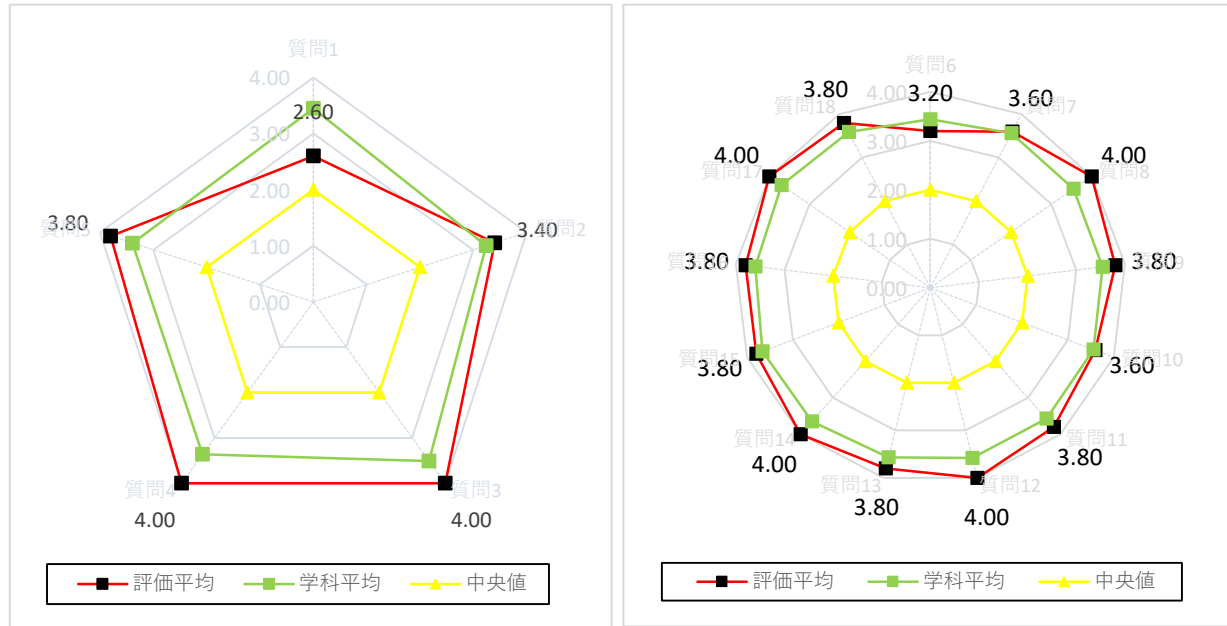
(3) 次年度に向けての取り組み

幼稚園教育実習Ⅱは、3年生で行われる幼稚園教育実習の仕上げの実習である。自らの今後の進路を定めるうえでも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、令和3年度は実習園ともなお一層連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立していけるよう努力しサポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		小学校教育実習指導	65名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

(2) 結果の分析と評価 (300～500 字程度)

- ・ 学科平均との比較 (共通教育科目については共通教育科目全体平均との比較)
 - ・ 特に低 (高) い項目についての考察
 - ・ 自由記述についての分析と評価
自由記述なし。
 - ・ 本授業の目標、ねらいと照らし合わせた分析と評価
 - ・ 授業全般に対する反省点
 - ・ 回答率が低かった理由 など
- 65人中5人提出済みと、極めて回答率が低かった。

(3) 次年度に向けての取り組み

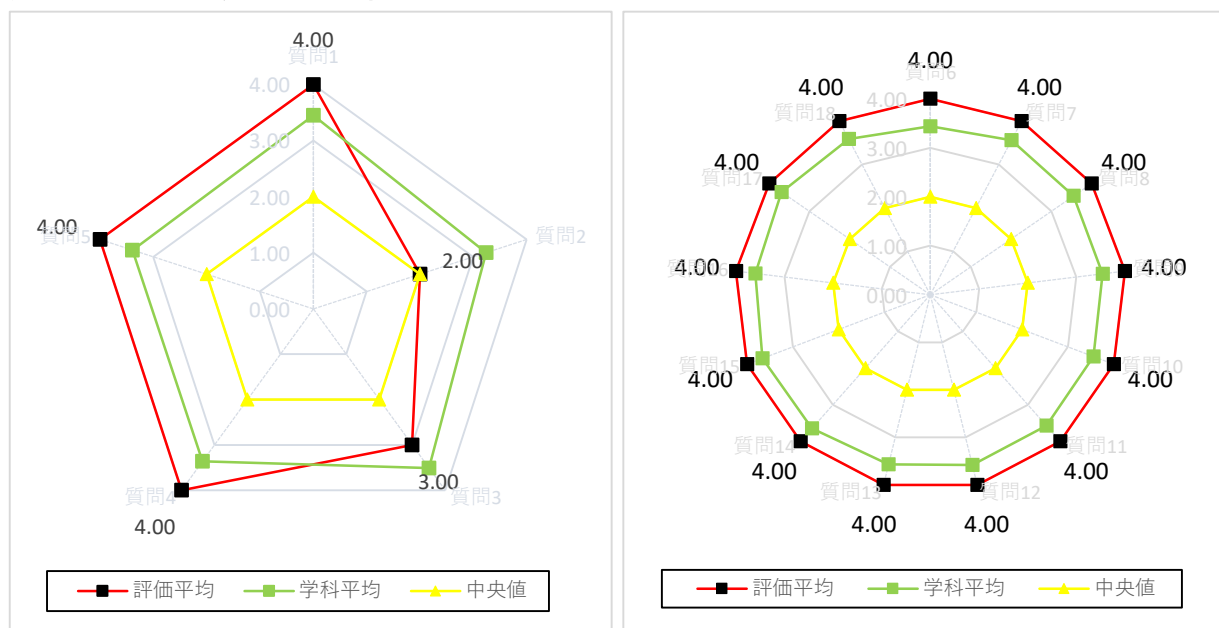
(3) 次年度に向けての取り組み (300～500 字程度)

- ・ (1) の授業評価結果で特に低かった項目に対する改善方法
- ・ (2) の授業全般の反省点に対する取り組み方法
- ・ 令和5年度に新たに導入したいと思っている授業方法 など
- ・ 授業評価そのものに対する意見を含んでも可

教育実習の準備の科目という意識が強いため、教育実習によって学生の意識が完結してしまうため、アンケートが少ないと思われる。次年度以降、教育実習が4年から3年に変更するので、回答率が上がることが期待できるかもしれない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽（応用）	13名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

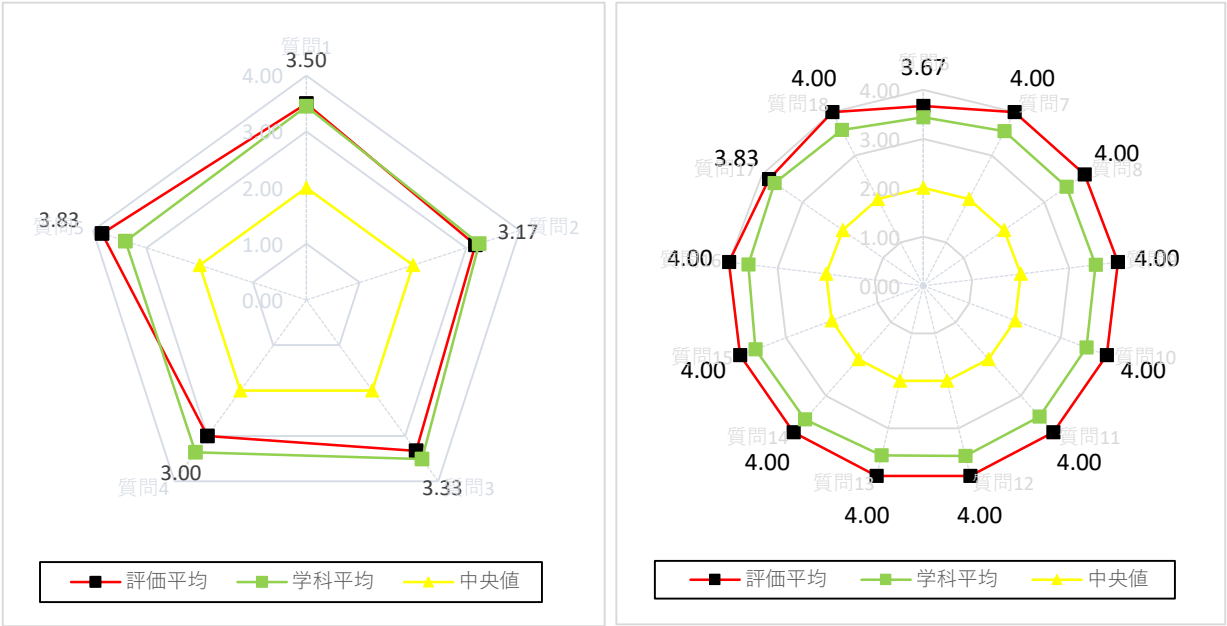
学生の自己評価の質問1から質問5のうち、質問2のシラバスの活用の評価が他の項目に比べて低い。これは、毎時の授業時間内に、その日の課題や次回の予告等を教員が伝えていたことによるものと考えられる。学生に不都合は生じてはいない。

（３）次年度に向けての取り組み

今年度より、単独での担当となった科目である。今回の教員の授業評価は、全ての項目において高評価であった。次年度以降も、より一層、学生への指導の充実を図っていきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育（応用）	27名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

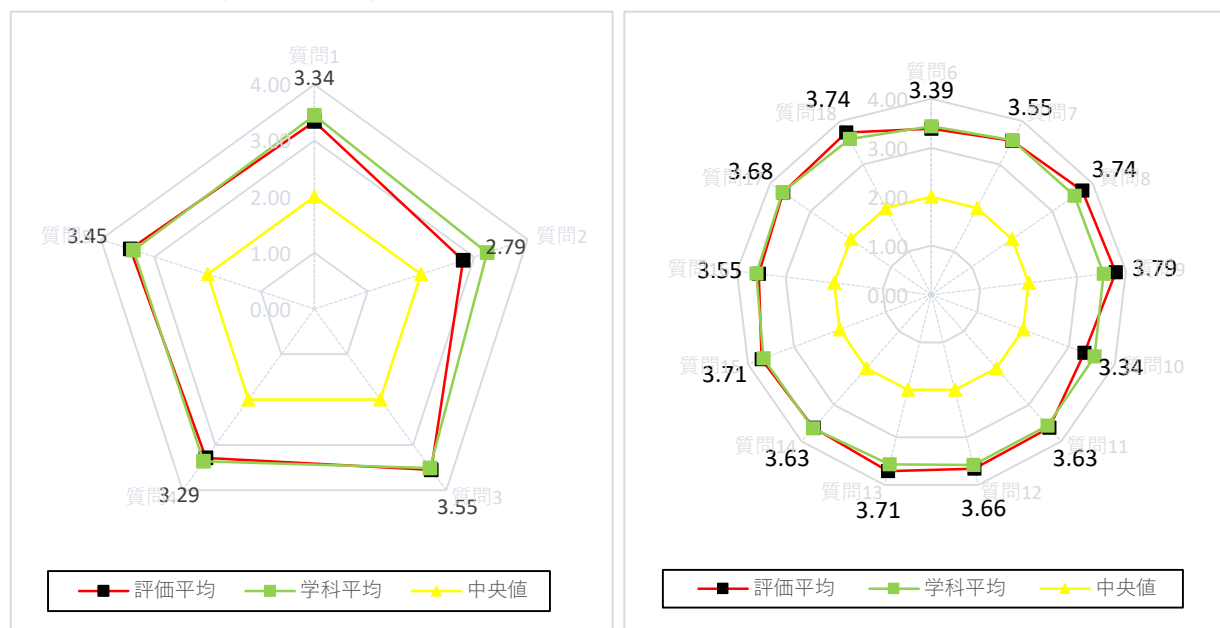
全ての項目において高評価であると捉える。今後も継続していきたい。

（３）次年度に向けての取り組み

実技中心であるので怪我等により一層注意したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽表現指導法	52名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

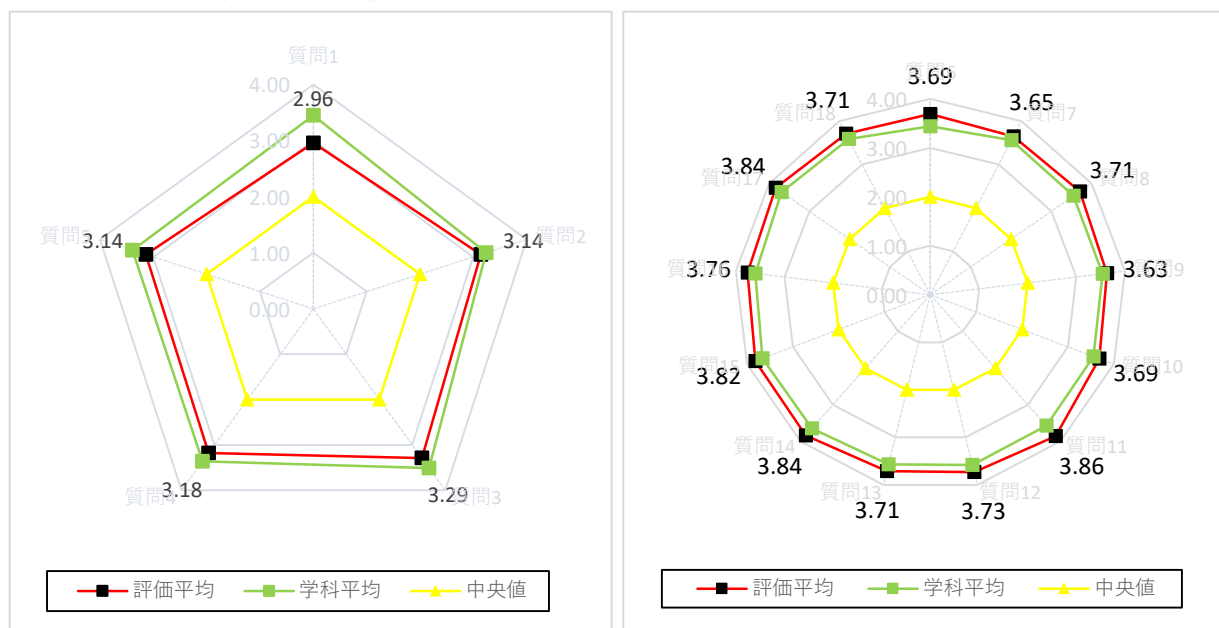
この講座は、幼稚園教諭と保育士資格取得のための専門教育科目の一つである。質問2のシラバスに関する評価がやや低かった。これについては、毎回の授業時間中に教員から伝えているため、学生が自分でシラバスを確認する必要が無かったことによるものであると考えられる。自己評価が低かったとはいえ、特段、学生に不都合生じることはなかった。

(3) 次年度に向けての取り組み

この科目の受講者は、保育現場に就職したいという学生と、小学校教諭や特別支援学校教諭を目指している学生とが混在している。乳幼児対象の音楽表現活動で保育者が配慮すべき点は、幼小接続期の教育にとっても重要である。このことを踏まえ、次年度の学生たちの実態を考慮しながら、彼らの実践力向上を図っていきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		発達障害者教育総論	52名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率：94% (49/52)、総合評価3.58

自由記述：配布資料をもとに説明されたのが、とても分かりやすかった。また、支援の具体的な話が多かったので、とても参考になった。小テストで法律や定義について復習できたのがとても良かった。覚えておくべき知識がしっかり明確に示されていたので、復習がしやすかった。授業の途中に演習があり、グループ活動が多かったので、楽しく授業を受けることができた。この授業の配布資料はどの授業のものよりも見やすく作ってある。授業の初めに生徒からの質問に答える時間があって、自分では気づかなかった部分に気づけることもあって良かった。配布資料があり、見返す時とかにすごく助かった。他の授業では頑張って書いたレポートに返信が来ることは少ないが、この授業はコメントだったり、授業で質問に答えてくれたりと自分たちの意見を聞いてくれていることが嬉しく、やる気に繋がった。火曜日は一限の授業が辛かったが、この講義があるおかげで学校に来ようと思えた。

小テストや、演習、配布資料に関して肯定的な評価が多くあった。

質問9：授業を分かりやすくする工夫が3.63と最も低かった。

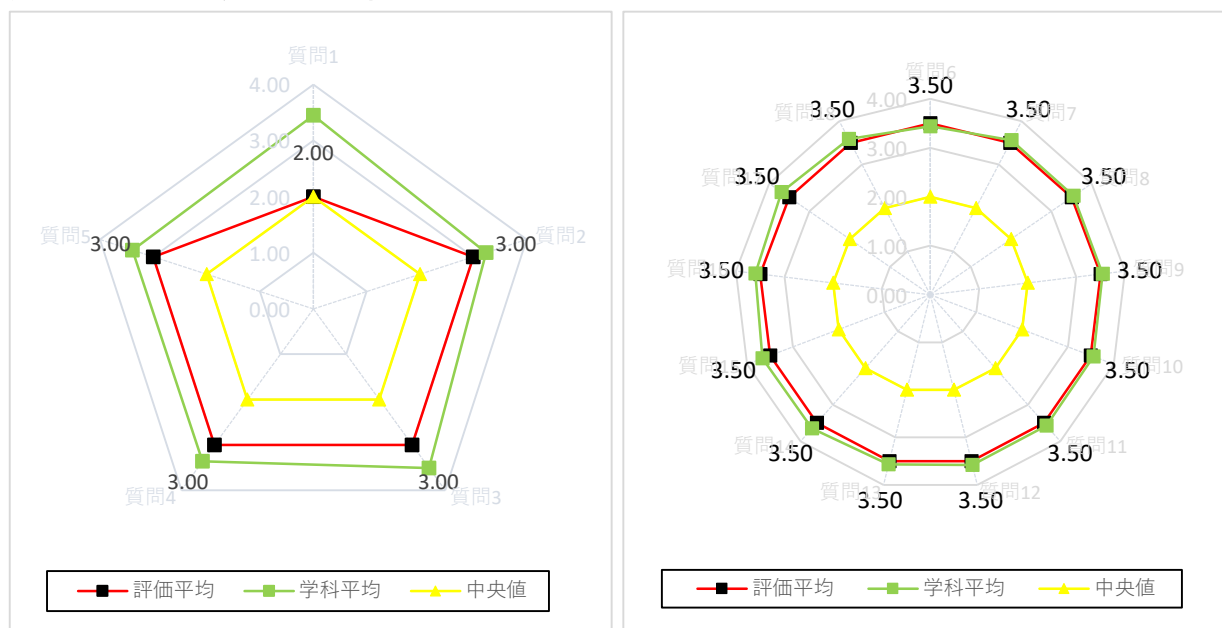
(3) 次年度に向けての取り組み

初めて担当する科目であったため、手探りであったが、配布資料や授業内容の工夫は評価されたと考える。一方で、授業を分かりやすくする工夫については、次年度の課題としたい。

次年度も、授業内で十分時間を取って授業アンケートを実施したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	3名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

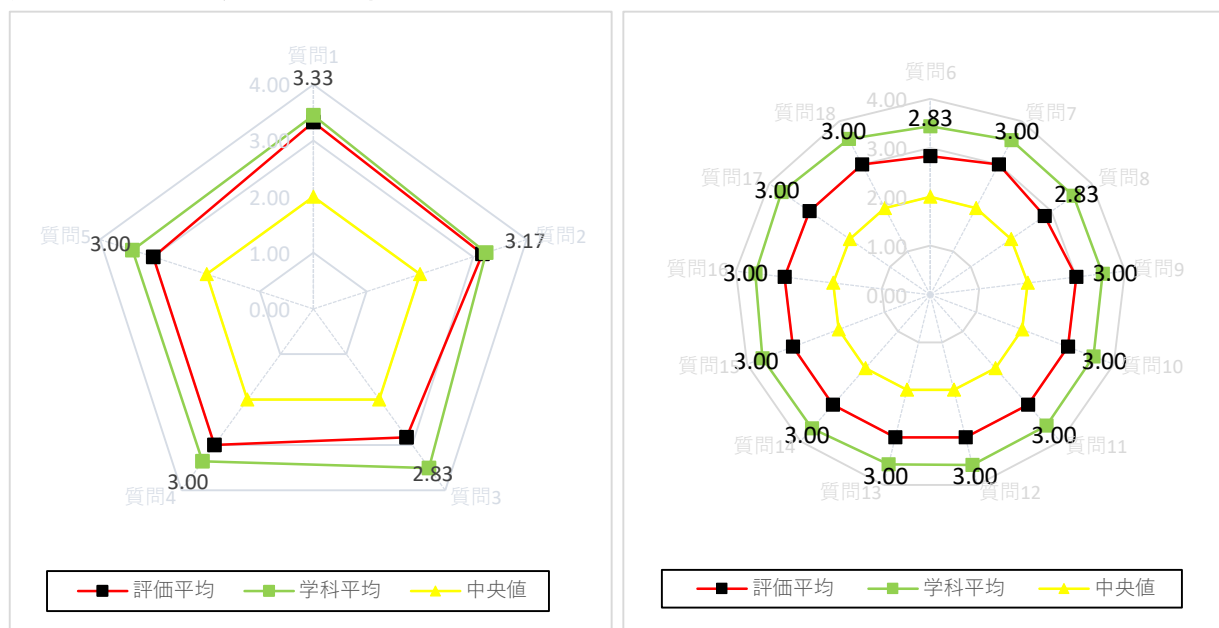
本授業は、ゼミでの主体的な学習を進めるものであるもので、この授業評価形式が妥当かどうか、問題はあるが、学生は一応の評価を行っている。ゼミ生は3名であるが、いずれも授業を欠席することも割と多いという課題を抱えており、質問1は極端に低い。しかし、欠席をしても各自がそれなりのペースで学習に取り組んだことを授業者は認めている。また、場合によっては、リモート参加を工夫するなどした。学生の状況に応じて指導を試みており、授業評価には反映されない工夫と取り組みを行った。無事、3名とも単位取得できる成果を出したことが何よりである。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生の学習意欲を引き出すためにどうすればよいか、試行錯誤をするのがこの科目である。授業評価の形式にとらわれず、学生に寄り添った指導と、学生の主体的な学びが実現するように、授業のやり方を工夫することに挑戦するのが大事だと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

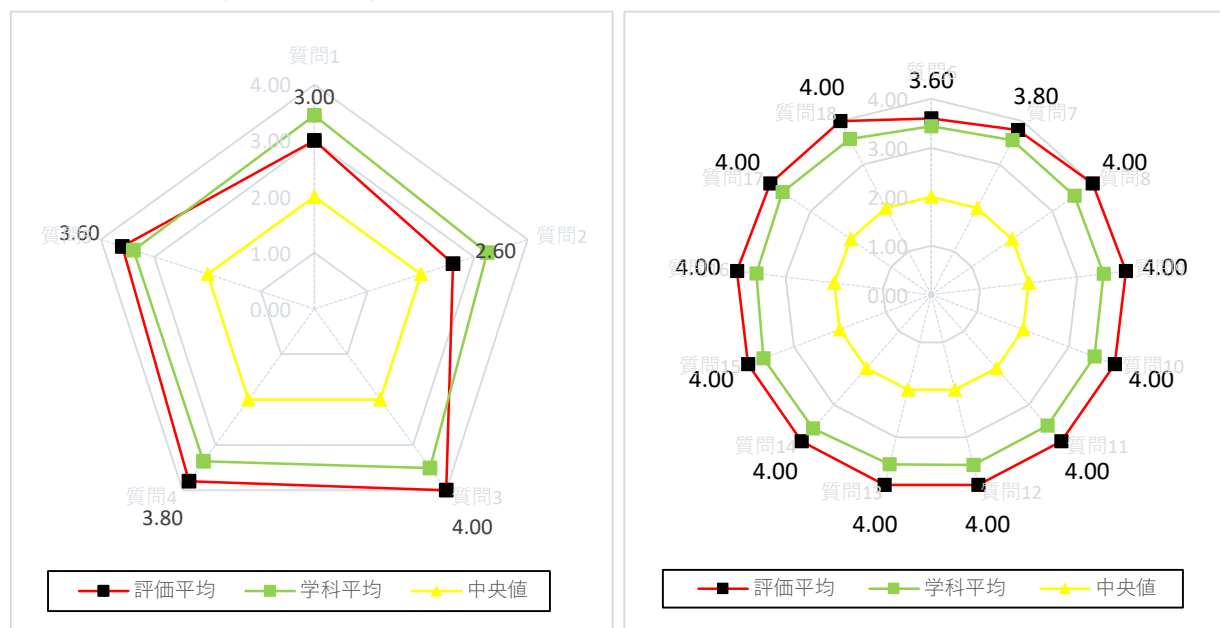
- ・評価点は、すべての項目で3点であった。評価結果はバランスの良いものであったと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・ゼミ科目であり、引き続き、学生の関心に応じた柔軟な授業の展開を工夫する。学生の学びのニーズを常にゼミ全体で共有することにより、授業の目的や学生個人の目標を確認し、主体的な学修につなげるようにする。
- ・可能な限り障害者・保護者の団体の方々との交流活動の場の確保に努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

すべての項目について、一定以上の高い評価を得ている。昨年度と異なり、本年度は新型コロナウイルス感染拡大も落ち着き、対面授業による発表をとおして学生相互でテーマを共有し意見を出し合うなど、できる限り双方向的な授業が可能となった。「子ども学演習」については、4年次の卒業研究の基礎になるものであり、論文作成に向けてさまざまな工夫をしているところである。現在は仮テーマを設定し、それに基づいた先行研究検索やその内容について検討しレジュメを作成し、中間発表を行った段階である。学生にとっては、自分が興味ある分野において自らテーマを設定し文章を書くという経験があまりないため、かなり細かい部分まで指導する必要があった。

これらのことを踏まえると、一人ひとりの学生の個性や能力に応じた個別対応が不可欠であり、細やかな配慮が求められていると考える。

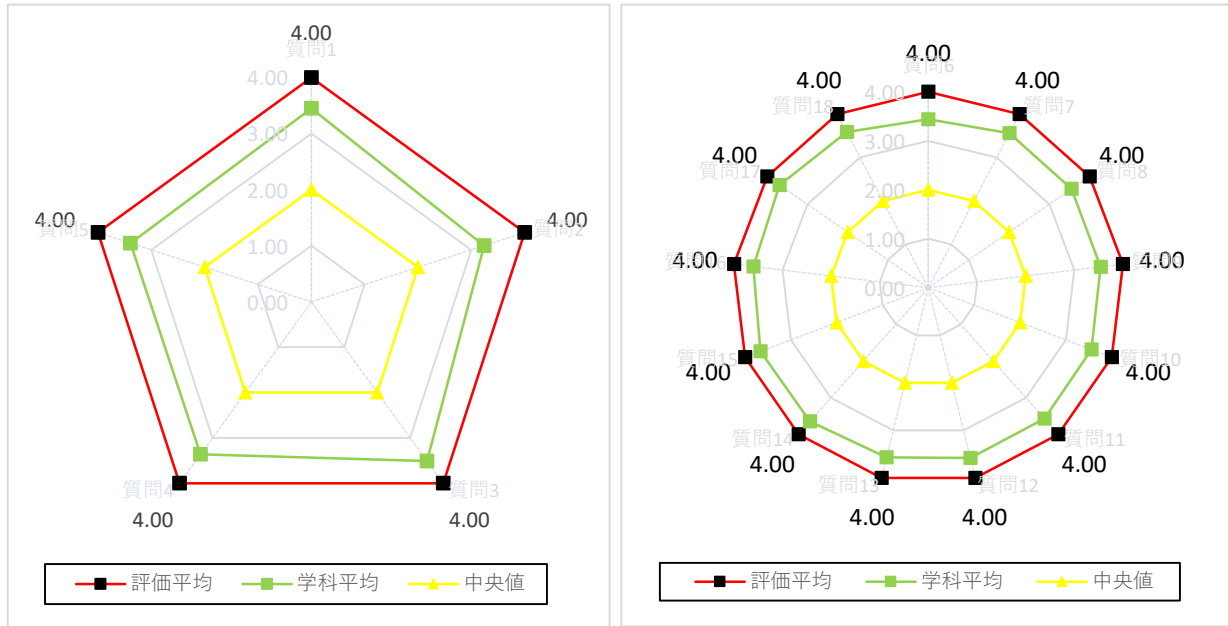
(3) 次年度に向けての取り組み

一人ひとりの学生の状況に応じた細やかな配慮を怠らず、学生が自分の考えをまとめて文章で表現したり、他人に対して自分の意見を発表するスキルを身に着け、4年次の卒業研究にすすむことができるようしっかりと指導をしていきたい。

さらには、それぞれの考え方や研究成果をゼミの学生間で共有できるようにアクティブラーニング的な授業を進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答者1/7

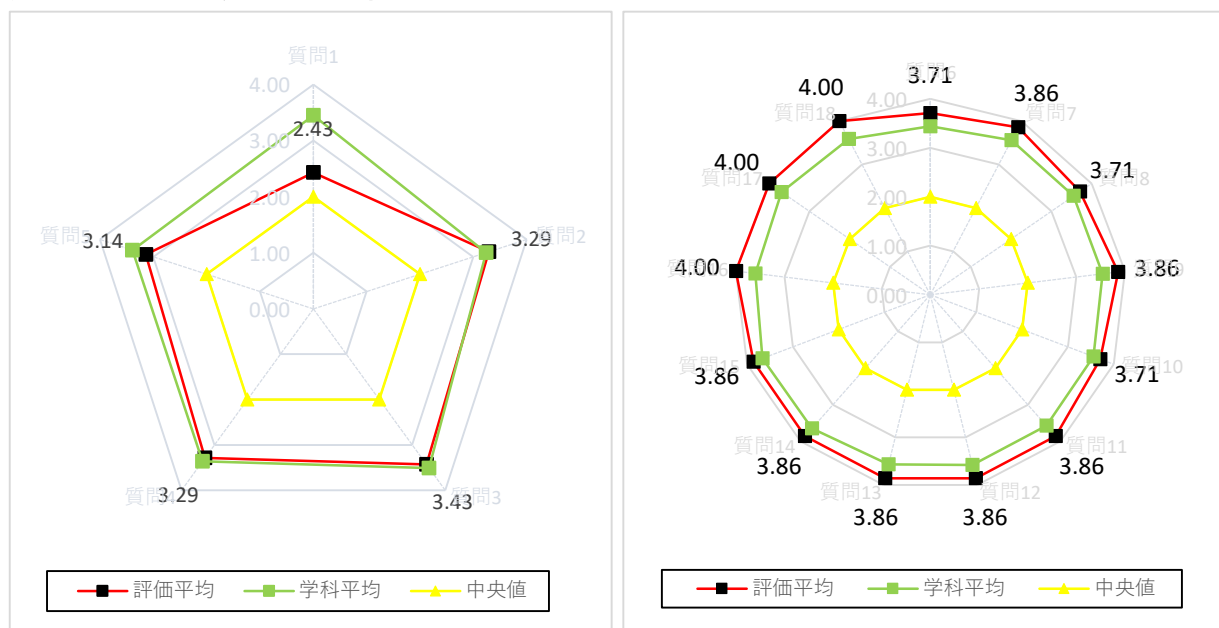
アンケートの回答数が少なかったため、評価平均値に対するコメントは差し控える。

(3) 次年度に向けての取り組み

アンケートへの回答を、授業やメール等で催促したにもかかわらず回答率が低かった。アンケートに回答する時間を授業内で設定する必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

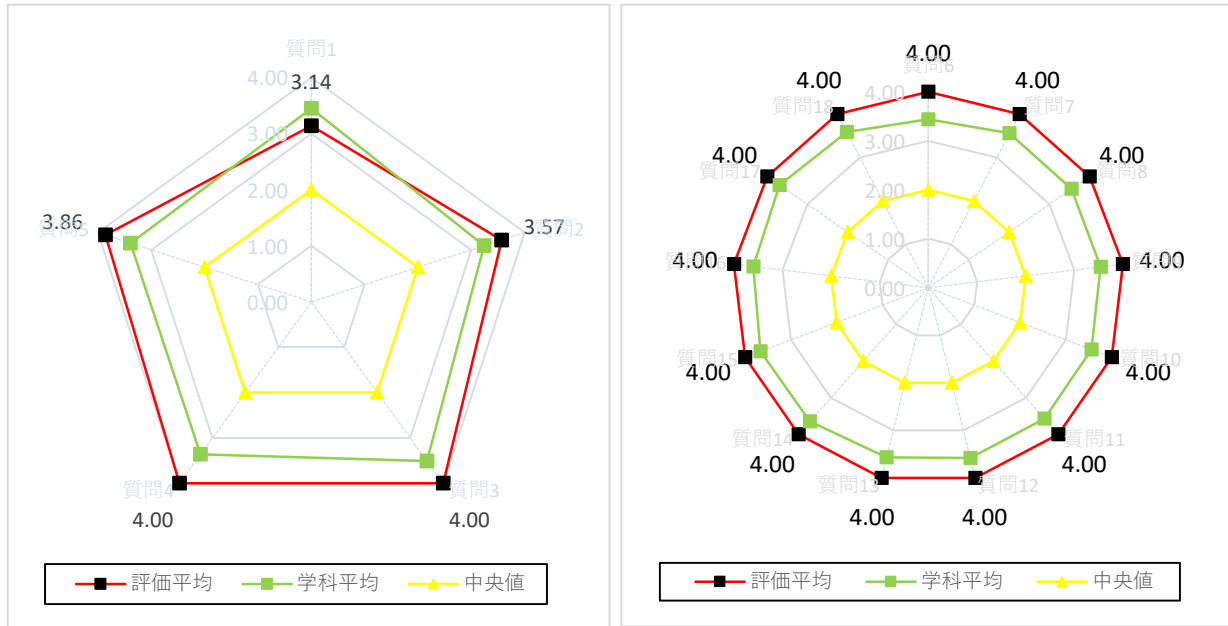
全てが学科平均を大きく上回っていた。特に「質問16 教員は双方向的なやり取りをしながら授業を行っていましたか」は「4.0」であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

特に反省すべきところは見当たらない。今年度同様来年度も充実した授業を展開したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

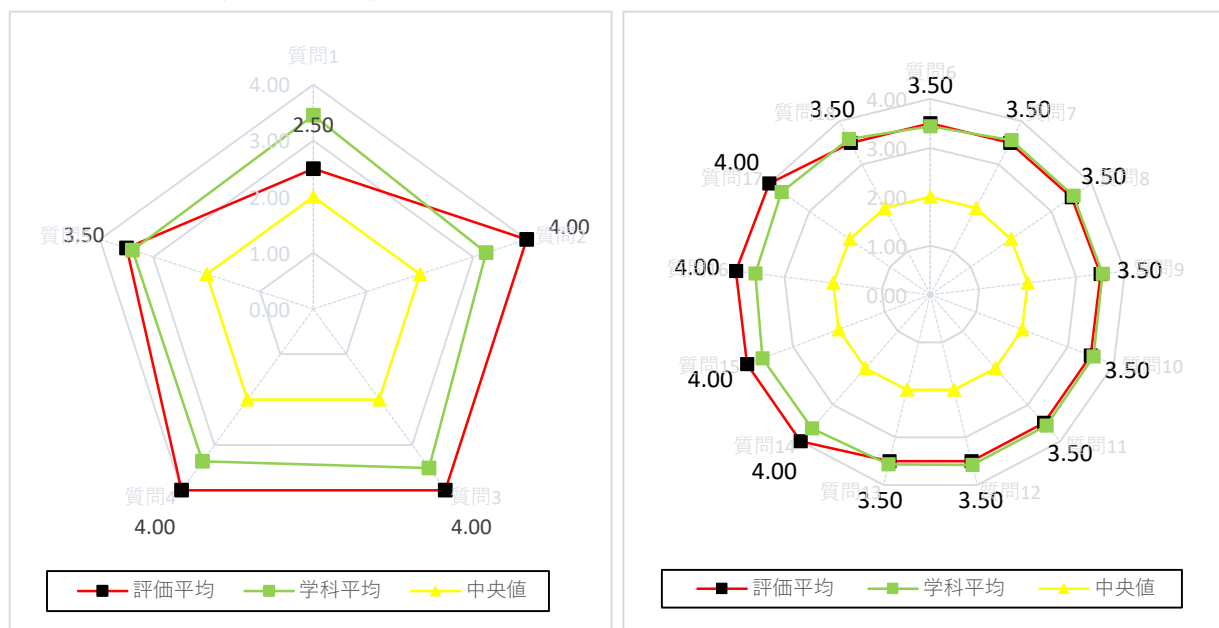
高評価であると捉える。今後もディスカッションを中心に質の高い講義を行いたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度は昨年度の良い部分を踏襲しつつも、もう少し地域での体験活動にも力を入れたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

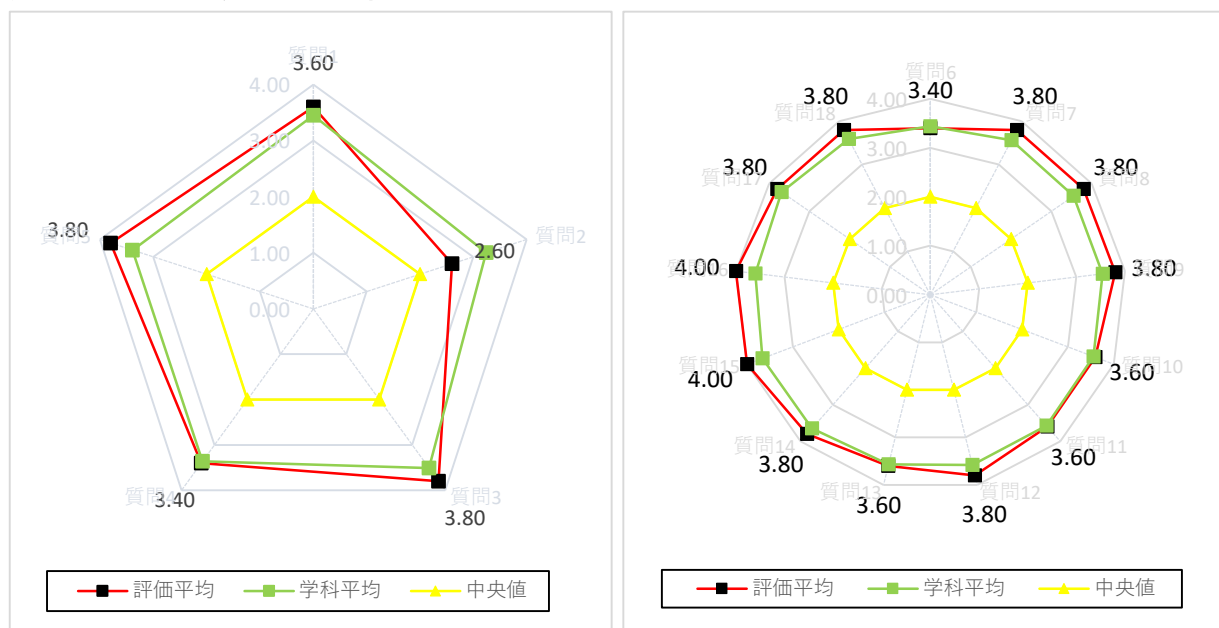
学生の自己評価のうち、質問1の評価が低いのは、体調不良によって欠席がちになる学生がいたことによると思われる。真面目な学生で体調管理に努めてはいるものの思うようにいかないもどかしさが、この自己評価に現れていると言えよう。質問6から18の教員の評価については、特に落ち込んで低い項目は無かったことから、授業の在り方は概ね良好だったと判断している。

(3) 次年度に向けての取り組み

この講座には、音楽に強い関心を持つ学生たちがゼミ生として入ってくる。次年度のゼミ生のメンバーが決まった段階で、受講生の興味・関心を聴き取り、柔軟に対応していく予定である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	5名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

- ・シラバスの活用に関しては、感染症の関連もあり、予定した学外活動が実施できなかったこともあり、大幅な変更を伴う必要があったために、授業の中での必要に応じたシラバスの活用を行わなかった。
- ・その他の項目に関しては学生の授業における主体的な活動を図ることができたと思われる。
- ・本講義は次年度の卒業研究に向けた位置づけも大きく、そのための自分自身にとっての価値ある研究テーマ、学びを見つけ、探求していくためのきっかけとなるように考えていた。その実現に向けた体験（療育体験）等を可能な限り授業に組み込むこととしていた。結果的には社会状況を考慮し、学生に最低限の体験をさせざるにどまった。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・社会状況の変化で本年度は多くの体験（療育体験等）を実施できると思われる。日ごろの学びやこの体験活動、将来の自分の進む道（職業）を整理しながら次年度の卒業研究に学生が繋げていくことができるように講義を組み立てていきたい。
- ・体験、書籍、論文等々を各々が整理し、研究テーマとして形作っていくと同時に、他者に伝えるための技術を学んでいくことが、将来の進路（就職）にとっては大切となってくる。そのことを踏まえた学習形態を工夫していくこととする。